

速水御舟日記（1932年）

鶴見香織

速水御舟（本名：栄一、1894-1935）は、大正、昭和前期に活躍し、近代日本美術史に名を刻んだ重要な日本画家のひとりである。当館ではこれまで回顧展を開催する機会こそ恵まれていないが、所蔵する日本画作品13点、素描2点と、いくつかの寄託作品をコレクション展において積極的に紹介している。

今年度、当館では、御舟のご遺族が保管されてきた資料の一部を寄託で受け入れた。この速水御舟資料の内容は多岐にわたるが、おおまかに、(1)御舟生前の資料、(2)義兄吉田幸三郎氏による調査研究資料、(3)次女和子氏とその夫吉田耕三氏、その長男春彦氏による調査研究資料の三つに大別できる。当館では寄託者の意向を受け、これらのいち早い公開を目指し、まずは(1)に含まれる書簡類を対象に、他館の学芸員の方々、研究者の方々のご助力を仰ぎながら、整理と翻刻を進めているところである。

(1)には御舟の日記も含まれる。ここに含まれるのは、1930年と、1932年から1935年の日記、他に「旅日記」と書かれた手帳、また、日々の行動をメモした1923年、1924年のスケジュール帳も日記に分類している。このうち、1930年の分は市販の日記帳一冊が残されるのみで、そこには1月27日から2月8日までの分が記されている。この続きは、「滞欧日記」二冊¹⁾他に記されていたはずだが、現在までのところ所在が確認されず、ここには含まれていない。「旅日記」とある手帳には、1915年7月11日から25日までの日付がある丹後旅行の記録、1916年7月8日から15日までの日付がある赤城伊香保旅行の記録、1917年2月8日のメモが記されている。

かつて山崎妙子氏は、日記の原本をもとに吉田和子氏が書き起こした資料があり、その一部を見せてもらったと報告している。書き起こしは将来の公刊を期してのことだったようだが²⁾、公刊は残念ながら実現せず、山崎氏による紹介も部分に過ぎなかった。日記が作家研究に大いに役立つことは言うまでもない。そればかりか、他の研究課題にもなにかしらの有益な情報を提供することだろう。当館では寄託者の承諾を得て翻刻を進める計画であるが、まず今回は、御舟が38歳を迎える1932年の日記を採り上げ、登場人物に可能な限り註を

付けつつ紹介することとする。

1932年の日記は三冊に分かれている。1月1日から8月2日までは市販の日記帳一冊に、8月3日から12月8日まではスケッチブックに、12月9日から31日まではさらに別のスケッチブックに記されており、合せると一日も欠くことなく一年分が揃う。一冊目のスケッチブックでは、11月24日まで順に記したところでページがなくなり、11月25日から12月8日までは空いていた隙間や裏表紙に順不同に記されている。ここでは読みやすさを優先して日付順に並べなおしたことを断っておく。また、人名に付けた註は、速水御舟資料に含まれる書簡の差出人名や内容から推定できたものも加えている。各人の生没年や肩書などについては、書簡の整理を分担する佐藤志乃氏、池田博子氏の調査により判明したものも多い。

以下、日記から分かる1932年の御舟の行動について、簡潔にまとめておく。

この年、御舟は再興院展に《花の傍》（株式会社歌舞伎座蔵）を出品した。準備を始めたのは1月19日である。そこから最終的に出品するまで、御舟は二度の改作を含め、さまざまに工夫を重ねた。その制作の過程や考えの推移を、日記から詳細にたどれることはきわめて貴重である。

その間も、毎日のように画商や個人が作品を依頼するためには御舟宅を訪れ、その応対や依頼画の制作に追われる画家の日常も垣間見える。何点もの作品を同時並行で進めるほどに依頼画を引き受けているのは、吉田家別邸にあった洋画家長谷川昇のアトリエを買い受けて改装した費用(1925年)や、ヨーロッパ旅行の費用(1930年)にあてるため、義兄の吉田幸三郎に借金をしていたことも理由のようだ。御舟はそうした依頼画においても手を抜くことはなく、草花や小禽の実物写生に臨み、出来に不満があれば洗い直しや改作を厭わなかった。10月13日の日記には、「一作ごとの工夫つくへゝ考へる 法界寺の天人に依りて種々作画に就て考へさせられる」と綴っている。

吉田の各家に書生として住んだり、通って来たりする門下生への指導もひっきりなしである。とくに夕食後の夜間は門下生を交えた座談にあてられることが多かった。この年、7月

1日に行った門下生との座談会から発展し、毎月1日と15日に研究会が定例開催されるようになっている。この年の研究会では人物デッサンを行うことが多かったが、ときには小林古径や平福百穂からスケッチを借り受けてきて、門下生に参考として提示し(10月15日、12月1日)、写生論を闘わすこともあった。御舟没後に雑誌に掲載された「速水御舟語録」³⁾のなかには、このうち10月15日のときのものと思しい御舟のコメントが挙げられている。この語録のもととなった記録は、天明愛吉(法門平十郎)が記録係を務め、御舟のチェックを受けながらまとめたものであった。

天明は幸三郎と親しかった俳優だが、2月11日の日記から、彼が法門の別名で『三田文学』に寄稿していた人物であると知られる。彼はことあるごとに御舟宅に雑談に訪れ、日記にも「天明さん」として頻繁に登場する。そして、この天明との3月21日の雑談をきっかけに、「時計の内部を知るものは一層時計の価値を感じる 細密観察描写も小生には随分役に立っているわけだ それから理論と感情と技術とがそろふことは仲々むづかしい 真実によき作品は此の三つのものがある大抵の場合どなかゝ先走りをしてゐる」という、これまでしばしば幸三郎、耕三両氏らによって引用されてきた言葉が日記に書き留められた。

日本美術院の画家たちとの交遊もさかんである。この年は、翌年8月末に死没することとなる小茂田青樹の病状を気にかける一方、小林古径とはとくに親密に交際した。家族ぐるみで互いの家を行き来し、旅行(1月11日～12日の湯河原旅行、5月11日～20日の奈良・京都旅行)や、三溪園への訪問(9月11日、12月25日)などで行動をともにしている。この年の6月にあった院の同人推挙については、二人で若手の起用を提唱し、しきりに意見交換をしていた様子もうかがえる。

御舟は日々、東洋の古画や西洋絵画に学んでいたが、同時代の画家では、日記で見る限り古径から刺激を受けることがもっとも多かったようだ。たとえば9月11日、古径と一緒に訪れた三溪園で、原三溪が所蔵する古径の《芥子》(現在、東京国立博物館蔵)や《極楽井》(現在、東京国立近代美術館蔵)を拝見し、「もっと落ち着ゐてこくのある仕事をしは(ママ：な)なければならないことを痛切に感ず 小林さんの足跡は確固たるものがある やらねばならない 浮かへてゐる場合どころか」と記す。また、9月19日には古径のアトリエに向き、再興院展に発表した《花の傍》に対し批評を求めた。その折の古径による手厳しい批評が、日記には詳細に書き留められている。10月10日には、この年の再興院展に間に合わなかった古径の犬の図(《犬(庭の一隅)》)株式会社歌舞伎座蔵)を古径のアトリエで拝見した。その感想を「楽浪だといふ感じ

が第一に感じいつも乍ら動揺もない こった立派なものであること勿論である」と記す。

他にも、制作した作品のタイトルや寸法、箱書などの情報はもちろん、援助者との付き合いや、取材記者とのやりとり、知られていない門下生の名など、日記から初めて分かる事柄も多い。本稿をとおして、御舟に関心を持つ多くの研究者にこの日記の内容が活用されることを願いつつ、続く年の翻刻も肅々と進める所存である。

なお、速水御舟資料の分類、整理、翻刻については、公益財団法人ポーラ美術振興財団より助成を受けた。本稿もその成果の一部である。

註

- 1) 「滞欧日記」二冊は、「速水御舟—日本画への挑戦—」(山種美術館、2009年)で展示されたので、それまでは存在が確認されていた。
- 2) 倉本妙子『速水御舟の芸術』(日本経済新聞社、1992年5月)p.273、倉本妙子『「花の傍」をめぐる』『河北倫明監修「速水御舟(二)」写真・下絵』(学習研究社、1992年6月)註2、p.105
- 3) 「速水御舟語録」『美術評論』4巻3号(1935年4月)



速水御舟日記(1932年)

凡例

- ・翻刻掲載にあたり、漢字は原則として新字とし、かなづかい
いは原文のとおりとした。誤字脱字はママとしたが、一部
()内に補った箇所もある。
- ・読みやすさを優先し、原文の改行は反映していない。
- ・句読点がある箇所はそのまま入れた。句読点がない部分で
文章が切れる場合は一画空きとし、名詞が連続する部分は
読みやすくするため適宜一画空きとした。
- ・判読できない箇所は■で示した。
- ・寄託者より伏字の指示があった箇所は□で示した。
- ・人名のうち、特定できるものを註で示した。速水御舟資料
に含まれる書簡の差出人名や内容から推定できたものも加
えている。原則として初出時に註を付け、途中適宜人名の
み示した箇所がある。

一月一日

新二浴スルモノハ其ノ衣ヲ払フ 今年コソハト曰フ気鋭ハイ
ツモ年頭ノ所感ダガソレハ泡沫ニ過ギテ了ウコト多キヲ憾
ム 今年コソハダ 年末ト年始ノ交雑旧カラ新ヘノ移動相ガ
眺メラレル 半月ノ影淡キ烏山ノ風景 読経ノ声ガ寺カラ高
ラカニモレル 東北寺ノ井戸氷ラズ余程当年ハ暖キ 一家打
ソロッテ元旦ヲ祝フ 麗カナ日差 午後例ニナライ諸氏来訪
於デン鍋ヲ囲ミテ雑話談笑裡ニ送ル 夜雨ニナル
訪客 小林¹、小茂田² 富取³、小山⁴、牛田⁵、柴⁶ 黒田⁷、石本⁸、

一月二日

雨モ午近クショウガツラシイ晴ヤカナ日和ニナル 小谷津
君¹¹来訪 君ノエート言葉ノ始メニ付ケルセハ笑ヒヲ家中
ニ誘フ 横浜中村¹²原¹³両家年賀ニ参伺例ノ如シ 村田直吉
翁¹⁴八十ノ年ヲ重又昨今病床ニ親シムトカ 一炊庵ニ見舞旁
々々聞振り二年賀ニ寄ル 帰途自宅附近ニ三年賀ヲスマス
大沢小生ノ帰ルヲ待ッテイタ 夜ハ加留多ニ賑ヤカ 小生歌
ヲ読ム 数年味ハナカッタ正月ラシサダ 貧シイナガラ 三
溪園の三重塔モスッカリナジンデキタ 博雅デシウマイヲ求
メル時且ツテオ金花ヲ落シタカトラレタカシタコトガ思ヒ出サ
レル ヤッパリ此ノ椅子ニ腰ヲオロシテ考ヘタツケト思出ニ
ナル支那椅子ダ タ陽ヲ浴ビタ富士ガ美シク眺メル幸ヲ得タ

一月三日

麗カナ日 天明、若山¹⁵、高橋新夫妻¹⁶等ト於デン鍋ノ午餐
武蔵有史以前ノ話ガ中心 松本直蔵君佳男君¹⁷ヲツレテ年賀
ニ来ル 夜ハ予テノ約デアル天明サン子供達ヘ活動ヲ映写ス
ル 幸ヒ市川サンヤ高橋新夫人モ来テキルノデ賑フ アッテ
加留多デスッカリ正月気分ライヤ増ニ濃クス 正月三ヶ日モ
早ヤ過ギテアッタ

一月四日

日和ハ続ク 年賀状ヲ天明サンガ来て整理シテ呉レル 高橋
上田¹⁸両君ト午餐 高窪君来訪 ヤガテ豊田君夫人同伴ニテ
来ル 白百合ノ拙作ニ対シテカステラノ折ヲ挨拶トシテ呉

- 1 小林古径(1883-1957)新潟県高田出身。1914年日本美術院同人。
- 2 小茂田青樹(1891-1933)埼玉県川越出身。安雅堂画塾以来の仲間。1921年日本美術院同人。
- 3 富取風堂(1892-1983)東京出身。安雅堂画塾以来の仲間。1924年日本美術院同人。
- 4 小山大月(1891-1946)東京出身。安雅堂画塾以来の仲間。1926年日本美術院同人。
- 5 牛田雞村(1890-1976)横浜出身。安雅堂画塾以来の仲間。1914年日本美術院院友。
- 6 柴宗廣(1899-1979)東京出身。郷倉千鞆に師事。1929年日本美術院院友。
- 7 黒田古郷(1893-1967)東京出身。安雅堂画塾以来の仲間。1921年日本美術院院友。
- 8 石本光太郎(1890-?)東京出身。小林古径に師事。1929年日本美術院院友。
- 9 横田仙草(1895-1962)東京出身。小林古径、御舟に師事。1933年日本美術院院友。
- 10 天明愛吉(1885-1949)東京出身の俳優、執筆家。法門平十郎の別名あり。吉田幸三郎と懇意にし、7月1日から始まった門下生との研究会では記録係を務めた。
- 11 小谷津任牛(1901-1966)東京出身。小林古径に師事。1946年日本美術院同人。
- 12 中村房次郎(1870-1944)横浜の実業家。
- 13 原富太郎(1868-1939)原三溪。横浜の実業家。長男は原善一郎。
- 14 村田直吉翁 原家で執事を務めた村田徳治の父。三溪園正門近くの一炊庵に住んだ。
- 15 若山菊次郎 御舟に師事。1934年再興院展初入選。
- 16 高橋周桑(1900-1964)愛媛県出身。御舟に師事。1930年日本美術院院友。妻の豊島志ま子は郷倉千鞆の門下。結婚して片山村に住む。
- 17 松本直蔵 幼い頃からの親友。佳男は息子。
- 18 上田子行か。

レル 画壇近時ノ雑談ニ日ハ暮レル 大森サン来駕 数刻ニ
シテ帰ヘラル 正月モ早く日常生活ニ復シテ行クコトヲ望ム

一月五日

宜キ天候 警鐘ガ鳴ル 郡部出初ハ一日早キノダソーダ □
 □□□□□□ □□□□□□□□ □□□□□□□□□□
 □□□□ 画室ニ入ル扶桑花ノ作画ニカゝル 朱ト洋紅ト胡
 粉ニ雲母ヲ交ゼ合セテ花ヲ塗ル イサゝカ面白イ味が出タ様
 ダ 高橋君片山ニ帰ル 藤野君年賀ニ来ル 庄司先生¹⁹御来
 駕診察シテモラウ □□□□□□□□ □□□□□□□□
 □□□□□□□□□□□□□□ □□□□□□□□□□□□□□
 □□□□□□□□□□

一月六日

薄レ日 扶桑花ノ作画続キ 午後²⁰、朝子²¹ト三越ニ出掛け
 流行情ニ因ム人形ニ朝子ハスッカリ喜ブ 多少買物ヲシ
 テ銀座ニ出ル 夜ノ銀座風景朝子ハ始メテナノデキョロヘ
 スル 伊東屋及靴店ニ立寄ル 和子²²朝子ノ靴求メル 新橋
 駅際大和トイフ鳥鍋デ晚餐 2.50 不在中三越桜井君²³年賀
 ニ来タ由 松飾リハ取り去ラレタ 正月気分モモウ終リダ
 東京駅降車東口ノ売店デ一錢五厘ノ切手ヲ求メルニ二錢出シ
 タノ二鈞錢ヲモ出サズ五厘錢等今時ソナモノ使用ナンカシ
 マセン等ト日ツタ感じハ詢ニ不快 文句ヲ日ツテヤッタ 馬
 鹿ゲテキルトワ思ウガ日ハナイト気ガスマナカッタ 玉川ノ
 伯父サンガ不在中二年賀ニ来タトノ事

一月七日

昨日ノ様ナ日和　夜ハ雨ニナツテ了ッ　扶桑花ノ作画ヲ続
ケル　午后三時頃和子朝子ヲ伴ヒ弥ト自由ヶ丘ヘ行ク　弥
生²⁴ハ和楽堂ノ新年会に別宅カラ誘ハレテ出掛ケタ　葵屋主
人²⁵ハ本銀町ニ火災ガアツタトカデ不在　九品仏ニ何年目カ
デ参ル　閻魔堂デ御詠歌ノ様ナモノヲ数人デ大鼓鐘デ詠ツテ

中タ 子供達ハ奇異ナ感ジヲ覺エテイル 九体ノ仏モ静カ
 ダ 和子ガ如何シテ仏様ナノニアナ獄屋ニ入ツテイルト聞
 フ 奇問ナレドソナ感ジ無キニシモ非ズ 子供ノ頭ノ直感
 ハ面白キ 門前ノ松並木ガ暮藹ニ情趣満々 本堂ノ左側テノ
 椿ノ大樹ハ洵ニ立派 花ハ淡紅色ノ小輪ワビタル趣キ捨テ難
 シ 晚餐ソバ 武久君²⁶不在ニ中二年賀ニ来ラレタソーダ 一
 人ノ友人ト共ニ

一月八日

昨夜ノ大雨ニモヤラズ快晴 春ノ様ナ暖気 扶桑花ノ作画ヲ続ケル 子供達ハ学校ニ出掛ケタ 飛行器ノ音ガ空ニミロク 今日ハ觀兵式ダ 弥小林サンノトコロヘ行ク 御親類ニ御不幸ガアツテ御出掛ケニナルトコロデアッタソーダ 今日ハ訪客ガナク終日作画ニイソシムコトガ出来タ 聖上還御ノ途次李奉昌²⁷(三二)ト称スル鮮人手榴彈ヲ投ジタル不敬事件アリ 犬養内閣総辭職ス 午前十一時四十四分ノ出来事ナリ 蘇峯翁²⁸日日紙上ニ於テ笑ノ尤モ多趣味ナルハ我自ラ我ヲ笑フコトデアル ヨキ言ナルヲ感ジタ

一月九日

晴天 扶桑花ノ作画ニ没頭 午後兎毛角描キ上ゲル 辛ラ
ウジテ持チコタエテイタ義足愈々危シ 田村²⁹ニ来テモラフ
現在ノモノ不取敢修補シテモラヒ他ノヲ修繕ニヤル 十八円
位デソレハ直ルソーダ ソレナレバモット早く渡シテ置ケバ
ヨカッタ思ツタ 吉田勇吉氏夫人来訪アリ タ刊デ見ルト
犬養内閣留任ト決定シタル 今日ノ折柄当然デアロウ

一月十日

麗カナ天気沢田竹治郎³⁰サン來訪 マルケ村娘ノ箱書ノ為
メニテ数時雑談 小川サンノ御來訪アリトノ電話ニテ歸ラル
玉川ノ伯母サン清次郎君³¹同道來訪 午後八岡本³²ノ新年会
二和楽母³³、弥、子供達ト出掛ケル 例ニ依リテ英サンノ道

19 速水家の主治医。

20 速水弥(1898-1990)妻。

21 速水朝子(1927-?)三女。

22 速水和子(1924-?)次女。

23 桜井猶司(1896-1969)三越呉服店美術部員。

24 速水弥生(1922-?)長女。

25 蒔田實 実兄。

26 武久勇三 御舟に師事。

27 李奉昌(1900-1932)朝鮮の独立運動家。桜田門事件で死刑。

28 徳富蘇峯(1863-1957)ジャーナリスト、歴史家。国民新聞を主宰。

29 田村耕郎 御舟の義足のメンテナンスを担当している。田村式義手足製作所を経営。

30 澤田竹治郎(1882-1973)内務官僚、裁判官。1947年最高裁判所判事。

31 玉川清次郎 御舟に入門。

楽大層ナ脈力 姉ノ友達デアツ横満サントイウ人二十何
年ブリカデ御目ニカゝル 十時頃芽出度閉会 余興番組 鶴
亀(長唄) 奇術ジョージ高橋 実演時ノ氏神 修禅寺物語脚
本読 素踊松ノ緑 三人吉三脚本読 奇術岡本英 実演ナン
センス高速度若返 実演夫婦

一月十一日

大磯安田さん³⁴を訪問の約を履む為め九時二十分横浜に小林
さん³⁵と会す 全く宜き天気 大磯駅の梅満開 安田さんの
屋敷には一月とも思へぬ春の日ざし 宗達の絵に就て話は始
まり画壇ノ動き 七絃会の論評 蘇芳の話 奈良で勉強され
た当時のこと 法隆寺の壁画が写せたなんかは今昔の感に堪
えない 伊東紅雲氏³⁶が見えられる 随分久しぶりにて面会
したものだ 三時頃辞す 小林さんに誘れ湯ヶ原に行く 小
生多少痔の気味あるを知っての小林さんの志難有くおもふ
天野屋に着いたのはもう夜といってよい 特に新館をさせて
本屋を選ぶ小林さんらしい好みだ 横山先生³⁷の宿の部屋に
落ち付く 温泉も寢に工合宜 主人を始め皆が敬意と親しさを
小林さんに覚えてゐる さもある可しとおもふ 西式の運
動法を教へる 新月中空に淡し

一月十二日

六時半頃起床 二階のですりから朝日が山に段々ひろがるの
を眺める 一浴朝の冷気は格別の心宜さを覚える 廣河原と
いふ新にかい掘された温泉場を過ぎて蛇体の瀧一名次郎兵エ
の瀧を見に行く 屈折の趣きよく名の如く小瀑乍ら仲々宜い
見る可き瀑だ ここにくる道は箱根へ通ずる小道とのこと
趣きのある道である あちこちで湯を掘ってゐる やがて此
の辺も開けてしまふのだろう 水仙や椿が美しむ花をつけて
ゐた 宿から二十五丁位あるんだそうで大分くたびれる 大

分風が出て来たが宿の部屋は午の日に室の様に暖かい 一浴
して午食 番頭さんから現在来てゐる栖鳳さん³⁸の日常のこ
と等聞く 随分通人らしむ 三時五十七分発で帰ることにす
る 最後の一浴を存分に味ふ 昨日から全く清遊をしたとお
もふ 不在中石山太柏君³⁹来訪されたと

一月十三日

今日から第二番の制作にかゝる用意をする ばらが描みて見
度るので白金の日香園に買に行く 一本二十銭 案外の高価
だと思ふ 電車従業員のストライキで混雑してゐる 乗合
自働車にのる 徳田ふじ氏年賀に来た 住友氏⁴⁰がアトリエ
二月号に風景に関する感想を掲載するので聞きにこられる
ちっともまとまった話が出来なかった 田村が義足の修繕し
たのを持って来たが不備な点を夕方までかゝって直す 大分
調子による 半田さん⁴¹が夜訪ねて来た 荻窪へ行移ったそ
うだ 新進作家の立場や引ゐては横有恒君⁴²の山の話迄に及
び十時頃迄雑話を交す 今日天気多少曇り勝ちでとても春
先きの様な暖かさが続く ばらの写生にのみ了る

一月十四日

高橋君片山村居から出て来た ばらの写生及び下図にかゝる
午食に行人坂下雅叙園へ幸三郎兄⁴³と楽母別宅姉⁴⁴正五郎君⁴⁵
と試食に出掛る 何といふ悪趣味なんだろうか 庭から山に
かけての趣きは東京とは思へない深さを味ふ 此れだけの地
利を以て洵にをしむものだとおもふ 高橋君晩食後帰る 青
柳君⁴⁶とうがん図を持って見せに来る 地方巡り作家の生活
の話を聞かせて呉れる 浮世を渡る種々相を痛感する 平
和な宜い日和であった

32 岡本英 実妹麻子の夫。

33 吉田こう(1858-?)義母。幸三郎、弥の母。

34 安田鞞彦(1884-1978)東京日本橋出身。1914年日本美術院同人。

35 小林古径

36 伊東紅雲(1880-1939)東京出身。郷田丹陵に師事。紅児会で安田鞞彦と一緒にだった。

37 横山大観(1868-1953)水戸出身。初期日本美術院創立同人。日本美術院を再興。

38 竹内栖鳳(1864-1942)京都の日本画家。晩年、天野屋敷地内に画室を構えた。

39 石山太柏(1893-1961)山形県出身。1914年日本美術院院友。1935年に脱退。

40 住友芳雄 アトリエ社員

41 半田鶴一(1898-1979)福岡県出身。小茂田青樹に師事。1929年再興院展初入選。

42 横有恒(1894-1989)宮城県仙台出身の登山家。1944年日本山岳会会長。著書に『山行』。

43 吉田幸三郎(1887-1980)義兄。弥の兄。赤曜会の発起人のひとり。

44 吉田豊(1890-?)義姉。幸三郎の妹。弥の姉。吉田豊吉(1886-?)の妻。

45 吉田正五郎(1901-?)義弟。幸三郎、弥の弟。

46 青柳五柳 函館出身。1937年再興日本美術院展初入選。

一月十五日

黄るばらを買ひに行く 目蒲電鉄の花屋は未だ店を開けてゐるので永峯の花屋で求める 写生及び下図を続ける 幸三郎兄保険の利子に就て来る 捺印して本宅に届ける 十五日会なので小山君を始めに小茂田君次ゐて富取君来らる 小山君は南天、菊、鶉の三点 小茂田君は虫魚図巻の一部になる 鯉ノ図を持参して小生は扶桑花ノ図を各自それ〱批評をする 回顧的でなる前進的な気持ちを基本に話ははづむ 風景画に対する感想は一層それを高める 十時解散 相沢氏⁴⁷の模絵二付て電報を高橋君二打つ 行違ひにて高橋君早々に出て来て了った 外務省衣川氏⁴⁸より電話 上海の例の絵の督促 大塚さん⁴⁹の詳細の地名 片山村字堀の内二千十番地

一月十六日

ばらの下図に専ら日を送る 薄日も午後小雨になって了ふ 気温も大分低下して漸く冬を思はせる 弥和楽の母別宅の姉等と芝居に出掛ける 夕刻石川宰三郎氏⁵⁰例の如く絵を督促に来る 二月末に三越で展覧するとかで大分突張ってゐた 幸三郎兄が来て天龍、大の里等新興力士団の遂々断髪した話に雑談の中心はなる 一誠堂店員来る 支那名画集雪舟図巻光琳派画集所分仕様とおもふが支那名画集が四十円位 雪舟図巻が二十円位 光琳画集が二百円 まあ光琳画集だけがものになりそうだが二百五十円にならないかと明日まで一考してもらふ 新興力士団に宜い后援者がつくといふとおもふ

一月十七日

大森に藍沢弥八氏⁵¹を訪問する約束なので別宅ノ兄高橋君と出掛ける 天気は幸ひ快晴 藍沢氏の信念と熱情は私達に教ふるものが多い プレミヤの付く人間にならねばならぬ日当をもらって其の日を働く それは労働者だ 目的を持って進んだ事業は失敗して余気なく引受けた仕事が更って自己を立てゝ呉れる場合が随分多い 人智のはかり知る可からざる大なるものが存在する 秀吉の如き英智在っても大阪は

落城する 大智よりも正しき人間の味だ 境がいは人を支配する 氏の幼時両親の貧苦を就寝中聞ゐて感じた観念は一生氏を発奮させる基本となる 斯る数多の体験より出発する信念は吾々を動かさずにはいなる ひよといふ小鳥の御覽応にあつかる 高橋君制作する小襖の寸法を採って御いとまをする 夜糸井君⁵²来訪 夜食を共に雑談 一誠堂遂二こなる不調らしい まあいゝ

一月十八日

ばらの下図を続ける 午近くアトリエの北原氏来訪 三月六日展覧会開催に就て予ての話に依る依頼を受く 幸三郎兄に会って詳細を話してもらふ 金子君⁵³ボラのある風景の下図を持って来る 夕方おろく⁵⁴子供を連れて来る 武久君久闊りにやって来てい■しや整理、文壇近時の雑談に夜を送る 今日は大分冷気が益す 天気は併し宜く月中空に寒る 望月が近るといふのでおろく帰った

一月十九日

アトリエ社から依頼の風景画に就て原稿を訂正する 大阪山崎松筠堂⁵⁵から送って来た菌(小色紙)の箱書併せて沢田さんのマルケン村娘のもすます 予て依頼して置ゐた吉田はな子氏⁵⁶モデルに来て呉れる 初めてなので固くならぬ様に別宅の姉さんに相手になつてゐてもらふ 椅子に掛けて読書してゐるポーズで暫らくモデルになつてもらふ 横はま草藤氏訪つねて来た かはらず賑やかな感じをあたへる 今日あたりは寒さも本格的になる 天気はいゝけれど

一月二十日

愈々寒氣つもの 天気も雪模様 午頃わづか降る ばらの下描きを始める 扶桑花ノ図清吉君⁵⁷を以て山田さんの矢来の御宅にとゞける 行違ひに同氏から電話があつた 今日の本宅で長者丸会があるのでその手伝ひに花子氏が来らるゝのでその合間にモデルになつてもらふ 昨日とポーズを改めて編

47 相澤與次郎 横浜で中村房一郎に仕えた。息子に相澤幸雄

48 衣川水門 外務省の役人。

49 大塚 御舟が1923年暮れに画室を借りた埼玉県片山村の家主。

50 石川宰三郎(1891-1947)美之国社代表『美之國』主幹。

51 藍沢彌八(1880-1969)実業家。証券業を営む。

52 糸井新樹(1899-?)東京出身。小茂田青樹に師事。1927年再興院展初入選。

53 金子丈平 御舟に師事。1941年再興院展初入選。

54 おろく 連水弥の乳姉妹。

55 松筠亭。鴻池善右衛門幸昌(1883-1954)1931年に鴻池男爵家の家督を継いだ。

56 吉田花子 義兄吉田豊吉の姪。

57 角田清吉 福島県出身。1932年に再興院展に初入選。

物をしてゐるのにする　夕暮れまでになって了ふ　昨日箱書をすませた菌の絵は書留で松筠堂に返送する

一月二十一日

ばら図地隈に雲母を数度引く　小倉大野氏来訪　和楽にて幸三郎兄同氏と午餐を共に雑話にふける　天気がよゐので花子氏モデルに来て呉れる　ショールを持ったポーズで夕方迄続ける　上田子行君⁵⁸来たが制作中なので改めて来てもらふことにする　晩食後天明さん来て西式体操の話しを聞かせる山田さんが訪ねて来た　昨日届けた画の礼であつて例の様に墨数多衣物を亦呉れる　恐縮此上なし　今朝電話をかけたので一誠堂光琳画集をとりに来る　右代二百円入手　溝川トイフ人が幸三郎兄ヲ訪ツネテ来テ四月松坂屋ノ展観ニ出品シテ呉レト曰ツテ来タンソウダ　横小品デイトノコト　中野朝日ヶ丘二十二へ田村勝弘が開店した通知を受ける

一月二十二日

ばら線描を始める　用筆如水雲母引の上に調子がいい　高橋夫妻明日をひかへて出て来る　平林寺の白梅を持って来て呉れる　午後三田市田氏邸を幸三郎兄和楽母別宅姉弥天明さんと見に行く　留宅居の人がいないので屋敷に上ることは出来なかったが庭の趣き有雅である　紅梅が折柄の天気美しく香ばしめ　和子昨日から風邪　学校を休んで臥床　庄司さんに診てもらふ　夜清吉君工場地帯の風景画下図を見せに来た建築の構成が面白くおもふ　別宅の兄天明さんと和楽母等にて西式体操の話　朝子の謡等で賑やかにする　午近く九品仏の兄来訪　二日程風邪で引籠っていたそう　おはなの先生岡本の話が話の中心であつた　花の先生が復縁したといふことになったのである　朝佐伯藤の助さん⁵⁹から電話があつた色紙の箱書に就て

一月二十三日

ばら図色彩にかゝる　越谷君⁶⁰鯉ノ下図を持って来たが写生

が不備であつた　午後三時から行人坂下雅叙園で高橋新夫妻の為め一夕の宴を開く　約束してあつたのだが梅の広間は午の客でふさがつてゐるのでしばらく次の間で待たされる　宴を開ゐたのは早や五時近かつた　小茂田君が時間を五時とかんちがゐしたので遅れ郷倉君⁶¹も七時頃にやって来た　併し立会人の沢田相沢の両所の円滑なる話術に洵に愉快な時を過ごす　九時了り小茂田君帰途立寄る　やがて高橋君を始めに村田横尾両君帰つて来る　私宅に泊る　あいにく雨降りであつた　雅叙園に招待した人　立会人沢田竹治郎氏　相沢与次郎氏　七条憲三氏⁶²　小茂田青樹氏　郷倉千靱氏　天明愛吉氏　村田泥牛氏⁶³　柴宗廣氏　横尾木雞氏⁶⁴　忽那有明氏⁶⁵　吉田幸三郎氏　小生夫妻　高橋夫妻

一月二十四日

昨日に引かへ天気麗ハシ　ばら図を続ける　高橋夫妻礼参りに出掛ける　村田横尾両君午頃帰る　中村鶴心堂君⁶⁶電話と行違ひに来る　山田さんからノ依頼されてゐる扶桑花の拙作の表装に渡す　ボクシングの話から闘牛の話に移つたので小生の映画を同君の希望にて映写して観せる　御廉納君の話等にて大分時を過ごす　和子昨夜来咳が大分出るので庄司さんに診てもらふ　百日咳の様な具合等ていさゝか閉口する

一月二十五日

ばら図続ける　富取君来訪　午餐を共に雑談にふける　夕五時偕楽園に院の会合があるので二時半頃早目に出て上野松坂屋のハンガリーの展覧会を観に行く　中二階で生花と俳句の会及小鳥の会開かれてゐた　ハンガリー展も案外つまらない　多少工芸に面白いものがあつた様だがどうもペンキ塗の玩具が思ひ出される　唯紅の彩は特有な味を見る　食堂に小憩偕楽園に行く　眞道君⁶⁷の帰朝祝賀とフランスNRFとかいふ文化協会より院の展覧希望があるとの議であつた　小松とかいふ協会員から日々の金子君⁶⁸を通じての話であるそうだ　散会后小林小茂田小山三兄と銀座散歩　不二家に小憩

58 上田子行 詳細不明。

59 佐伯藤之助(1892-1968) 横浜桐畑の市議会議員。

60 越谷長太郎 御舟に師事。

61 郷倉千靱(1892-1975)富山県出身。1924年日本美術院同人。

62 七条憲三 吉田幸三郎と印刷会社を経営。

63 村田泥牛(1903-1980)神奈川県出身。小林古径に師事。1930年日本美術院院友。

64 横尾木雞(1903-1988)山梨県出身。御舟に師事。1928年に再興院展に初入選。

65 忽那有明 御舟に師事。

66 中村豊(1892-?)京都の岡墨光堂で修業し中村鶴心堂を開業。

67 眞道黎明(1897-1978)1921年日本美術院同人。1930年アメリカのパークレイ大学から招待され、31年に帰国。

68 金子義男(1899-1961)日日新聞記者。

帰って来たら十二時になって了った 不在中今村末亡人⁶⁹見えたそーだ 和子注射したとのこと 春先き見たいな暖かな日とであった

一月二十六日

ばら図の続き 高橋夫妻片山村居に帰る 和楽父⁷⁰命日なれば和楽に焼香に行く 高島屋高橋氏系ぞ菊の箱書依頼に来る 和蘭陀菊と書いて渡す 午食后山田さんからもらった反物を弥と制理する モデルは編物をしていゐるのに決めて午後いっぱいゐやる 夜小笠原弥⁷¹君久闊ぶり来訪 小松とかいふ知人が近くにゐるとかでその訪問の帰途だ 晩食を共にして小笠原家の由来を聞く 鑑査の話し等で大分遅くなる はつきりはしなゐが何とあんな日であったことか

一月二十七日

葉の下塗りにかゝる 暮方迄に通ります 午食の時弥太郎君⁷²来て若槻⁷³ 井上⁷⁴、永井⁷⁵三政治家の選挙の為にトーキーを作った話を聞く レコード応用のトーキーは盤の大きさに随ふので仲うまくをさまらなそうだ 一人八分以内で了る様にするのが演説の長短が出来て若槻さん等四回もやりなをしたそうだ 井上さんは一度でうまく行ったとのこと それへゝその道には様々思はない苦労のあるものだとおもふ 庄司さんが和子の注射に来て呉れる 夜益の助君⁷⁶書生さんのことで紛糾 別宅から小生を迎への電話がかかる 事事に兄貴の命を待たねばならないのか もう自由である すきではないかといふの大意であった 朝いつもより大分早く起きたので十時頃失敬する

一月二十八日

葉の色を重ねる そんなことで日を了る迄かゝる 桐畑佐伯さん⁷⁷から電話がかゝって来て蒔つぶし金地色紙四枚中村⁷⁸にたのむ依頼を受ける 午食后南の縁先で陽に浴し和楽母弥と

正ちゃんのお嫁さんの話等を中心に雑談に時を過してふ 幸三郎兄から電話で今夜テレジーナを観に行く約束であった 小生の切符帰途車中にて友人から懇望されたとのことで小生の切符を新橋駅へ金子君に届けさす 夜天明さんと和楽母別宅夫妻弥口を圍んで雑談

一月二十九日

薔薇図の続き 葉が思ふ様に調子が出て来ないので今日もそれにのみに終る 幸三郎兄がテレジーナを見て来てアルヘンティナ⁷⁹が勝つてると話される サカロフ夫人⁸⁰とは問題にはならなゐがとつけ加へられる 午市の教育局の寺尾とかいふ人が缺食児救済の爲め絵の寄付の歎請に来た 和子が学校から帰って来て台所の上り端であごの下に一寸二三分位の怪我をしたので家中大さわぎになる 自動車が仲々来なるので忽那君に負はれて弥が付添って庄司さんにかかけつける 三はり程縫ったそうだ 随分いたかった様だがよく辛棒したとのこと 何時何事が起るか予想できない

一月三十日

漸く花の部分にかかったが一向に捗かどらなゐ 夕方になってやっぱり線の必要を痛切に感じて塗りつぶして改めて線描きをすることにあきらめる 小林さんが午后見える 和子の怪我から昨夕テレジーナを観て来られた話に移る ぎこちないといふ感じを曰はれる ギターをひく人が好ましくまるでチョコレートがとける様だといはれる 今夕は奥さんと上の娘さんが行かれるといふ 私も幸三郎兄と観に行く約があるので六時出掛ける 七時開演 アルヘンティナとは余程洗練さがかけてゐる様だ 特に引込む時等は女学生をおもはせる大体のべくりが悪めけれども別種な活々したものとひなびたスペインの味ひは受ける ギターの伴奏の場合に一層そういふ感じだ フラメンコ“ファルルコ”は何だかとても面白くおもふ 頭上で手をくねらすこと舞台をふむ音 一八三〇

69 今村愛(?-1941)今村紫紅の妻。

70 吉田弥一郎(1857-1924)義父。幸三郎、弥の父。

71 小笠原弥 帝展の日本画家。

72 吉田弥太郎 弥の長姉八重の長男。

73 若槻礼次郎(1866-1949)憲政会・立憲民政党の総裁。

74 井上準之助(1869-1932)政治家。貴族院議員。

75 永井柳太郎(1881-1944)憲政会・立憲民政党の政治家。

76 吉田益之助(1896-?)義兄。幸三郎の弟。弥の兄。

77 佐伯藤之助

78 中村豊(中村鶴心堂)

79 ラ・アルヘンティナ(La Argentina 本名 Antonia Mercé y Luque 1890-1936)スペインの舞踊家、振付家。1929年に東京帝国劇場で公演。

80 クロチルド・フォン・デルプ(Clotide von Derp 1892-1974)舞踊家。夫のアレクサンドル・サハロフ(Alexander Sakharoff 1886-1963)とともに1931年に日比谷公会堂で公演。

年ノボレロ、ホタ 非常に明快な感じを持つ飛躍 ギターを弾くカルロス・モントヤ⁸¹といふ人の感じはとても工合がい。白熊の様な調子だ 新富寿司に立寄りコロパンで菓子を求めて帰って来た 別宅の隆ちゃん耕三さん⁸²等と弥生がトランプをやつてゐた

一月卅一日

花の一部まともりかける 田村耕郎代金をとりに来る 十円だけ渡す 金子君⁸³が下図工場とボプラのある風景を見せに来たがどうもびんと来ない 極めて平板だ 輪郭の線が悪いのですっかり家の厚味や量感が失はれてゐる ユトリオの画と比して評した 大分悲観してゐた様に見えて気の毒におもふ 夜上田君来訪 例の如き絵を持って来たので手いたく評する 純な気質は尊みがあゝの空想と自己陶醉は洵に困る 東洋画院を創設するといふので大分気ゑんを上げて帰った 試作の切符はつひ放任して置ゐて了ったので思い切って片付ける 今日日は日曜でもありぐすへゝに僅か花の部分だけで過ぐす 天気は極めて上々 弥風邪気味で臥床

二月一日

薔薇図漸く完成に近づく 葵屋主人青木⁸⁴との話例の如し 三宅君来訪 鮫ヶ井養魚場の話を書く あまごも鱸の幼児な そうな にじますとても美なる由 横川君が名古屋新聞掲載の為に冬に因む小品を依頼に来る 一尺四寸巾の一尺位の紙本へとのことだ 夕方亦入江とかいふ美の国の人が例の絵のことに付てやつて来た 横山先生から電話で十三日出席の可否を聞かれる やはり返事を出して置けば宜かったとおもふ 明日伺ふを約す 夜天明さん別宅本宅両兄等との雑誌別宅兄よりの申出でによる雅叙園八日の会合に座談をする約を為す 大分気温は低下して来た 上海日支の闘争濃密になって来た

二月二日

薔薇図完成す 昨日の約を履み横山先生を訪問 拙作を観てもらふ 衣川氏に電話をして拙作完成を告げる 横尾君武久

君来訪 別宅に招かれた クリーム苺のクリームの味宜し 上海事件のラチオ益々重大を告げる 夕陽が美しかったが晩には雨になった かなり久闊らく目の雨だ 不在中太田耕治君⁸⁵がたづねて来たそうだ

二月三日

平林寺ノ梅が瓶子に美しく紅白の花がほころびたので写生して見度くなった 昨夜泊った横尾君と話してるところへ小山君が来た 昨夜の雨もすっかりうらゝかな日和にとりわけ暖かゝる今年 梅を観に行かうではなぬかといふ幸三郎兄の発案で午食后出掛ける 折柄来会せした黒田君も共に久地の梅園へ目蒲電で二子玉川迄玉川電車で乗換へ川向二子で下車 堤を上流に八丁程 未だ花には早かったが静かさは更って宜いと且つて盛りに来た黒田君はいふ 彼地此地で茶店をじゅん備中 唯一軒整つてゐたので小憩 草だんごの味よし 大分大廻りをしてきぬたの渡しを見付けるに約小一時間を費した 五時外務省衣川氏が来る約があるので電車で諸兄と別れて帰宅 衣川氏と晩食を共に日支多端の当今の話を書く 薔薇の拙作を渡す 帰ったあとへ西島君⁸⁶来る 風邪で臥床してゐたとのこと スキーの話なんかして帰る 幸三郎兄院の切符の校正を持って来て見せる 小沢さんに御産があつたそうだ 女だとて弥が喜んだ

二月四日

時雨れた寒い日だ 梅の写生を始める 尚美堂⁸⁷の妻君が来て名古屋展観の絵の督促だ 武久君宋元名画集の一部を借りに来た 和子の怪我也漸く糸をぬくことが出来たが百日咳の方は大分つゝて来た 今日日は節分なので追儼の豆蒔き 例により小生晩食后行ふ 天明さんが来て御台場のことからその当時流行した都々逸二三を語る「品川は江戸ぢやなゝ そりゃてんじゅくよ 坂(しゃか)に台場がつゐてゐる」 金子君下図を見せに来た だいぶしきしまつて調つて来た 夕方散歩の時忽那君のも見た 庭の一隅の図であつた 一寸面白ゐるところを見止める 清吉君のもデッサンが余程改まって宜くなった 行衛不明を伝へられてゐた茅野氏⁸⁸遂々馬賊にや

81 カルロス・モントヤ(Carlos Montoya 1903-1993)フラメンコのギタリスト。

82 吉田隆一、吉田耕三(1915-) 義兄吉田豊吉の息子。

83 金子丈平

84 青木新次郎 実兄蒔田實の妻の兄。

85 太田耕治 雑誌編者。

86 西島廣造(1905-?) 御舟に師事。1927年に再興院展に初入選。

87 関長次郎(1890-1963)新画を扱う関尚美堂を経営。

88 茅野栄 大阪毎日新聞社従軍記者。1932年に満州にて死亡。

られた様だ 日々紙上の写真を見てやっぱり且つて巴里で
会った同氏なので感が深ぬ 天明さんの都々逸の註にヨク
品川の宿は御殿山の方へ坂になってゐたのだそうだ そう日
へば多少今でもその気味はある 弥太郎君が藤の助さんが
十五六日頃来るといふ言伝とペーラムを持って来て呉れた

二月五日

紅梅に竹を組合せた下図をつけて見たがどうもとけ合はない
のと画格が平俗になって了ふので紅梅だけでまとめることに
する もうけふは立春だ 何といふことなく日はどん／＼過
ぎて行く 追はれる気分が濃厚に起る 何かがちりちりしたも
のに組合ひ度い感じだ 試作に瓶梅を描いて見度ゐとおもふ
がそこ迄仕事が順調に捗どって呉れ／＼よいが 平木君⁸⁹か
ら伊太利ノ自動車道に関する小冊子を送って来られたが自分
等が観た伊太利とは別種な科学的見地の伊太利を君が観て
来たことは亦教へらるゝものを覚える

二月六日

紅梅図本紙にかゝる 鳥ノ子紙を用ゆ 雲母胡粉ニ黄少量を
交ぜたものを地隈に引く 小林さんから電話で六潮会三越
会場にて福田君⁹⁰に会ったので八日に会合し度いとのこと
であつたが小生八日は都合悪む由を云ふ 先般来御訪つねし度
いとおもつてをつた折柄こんなことがあつたので夜出掛ける
美術院同人増が問題(過日横山先生宅で出た)から同氏作ノ豌豆
ノ図に線描きがほどこされてることに因して如何に絵画に
線の重要であること 次いで徽宗帝の字の雄麗唐代の重さ
亦細いものを細く太いものを太く描いてそのものが表れな
い 釣竿も糸も同太さに描かれていてそのものがちゃんと表
れてゐるのを宜い画には感じられる 此の妙諦を獲得し度いと
談は熱する 昨秋院出品の髪ノ大きな写真を観せてもらふ
やっぱり立派なものだとおもふ 福田君は九日に延ばして小
林さんを訪つねてそれから共ニ拙宅に来らるゝことになった

そうだ

二月七日

宜く天気がつゝく からりとしたしきしまった日和 多少風
はあるが 紅梅図の線描きから色彩にかゝる 如水といふ筆
は洵によい調子を持つてゐる 自分の今の気持ちにあつてゐる
せいかもしれないが 試作の切符が出来た 今迄のものより
よい様におもはれる 有名会が四谷の喜吉であるといふので
幸三郎兄に誘はれて和楽の母と三人で五時頃出掛ける 何年
振りで寄席見物をするのか知ら 古風な高座の趣き 萬橋⁹¹
小さん⁹²円生⁹³文治⁹⁴小勝⁹⁵等案外に変わつてゐない やっぱり
小勝がうまい(きめんさん) それに比べて加賀太夫⁹⁶のうま
くないのはもう少しよかつた様におぼへていたが 小土佐⁹⁷
の早慶野球戦の義太夫は思ひ切つて笑へる 金馬がどんなか
といふ氣をのこして九時半頃出る 銀座竹葉は了つてゐたの
で新富寿しに寄り帰る 不在中青木と横尾君が来た 横尾君
は泊る 喜吉亭の入場料は特等九拾錢 斯会に見物は多い

二月八日

紅梅図のつゞきだ 午後三越へ六潮会を觀に行く 弥も明日
来る来客ノ食膳に上せるために野菜を求めるので亦泊つてゐ
た横尾君も共に出掛ける 三時頃迄に歸つて来て呉れといふ
別宅からの話しなので(八日会出席の為)理髪も勿々にともか
く三時半頃歸て来た 途中八重洲口日本橋交差点角に火災の
あとを見た 夕刊で見ると好古堂も類焼の厄に会つてゐた
別宅兄と雅叙園八日会へ出席 中村房次郎氏を始め横はまの
名望家約二十名 外人の眼に映ずる日本ノ芸術とでもい
つた様な座談をする 善一郎さん⁹⁸よぎなき用事の為来られな
かつたことは残念であつた 九時半散会 相変わらず繁昌して
ゐる おまけに今夜は隣室で芸者のとんちゃんさわざだ 田
中良助氏⁹⁹が来るといふので錦木改作尺三巾柿の図を幸三郎
兄に渡す 六潮会牧野の氏¹⁰⁰の絵買ふ人があつてもいゝとお

89 平木泰治か。大倉鉱業(株)、帝国ホテル(株)取締役。大倉組参与。ローマ日本美術展には事務で渡欧。

90 福田平八郎(1892-1974)京都の日本画家。1930年結成の六潮会のメンバー。

91 三遊亭萬橋(三代目)(1866-1937)落語家。

92 柳家小さん(四代目)(1888-1947)落語家。

93 三遊亭圓生(五代目)(1884-1940)落語家。

94 桂文治(八代目)(1883-1955)落語家。

95 三升家小勝(五代目)(1858-1939)落語家。

96 加賀太夫(八代目)(1859-1934)新内節の家元。1930年に襲名。

97 竹本小土佐(1872-1977)女義太夫の太夫。

98 原善一郎(1892-1937)原富太郎の長男で実業家。吉田幸三郎、御舟らと親交が厚い。

99 田中良介 新画を扱う東京会の中心人物。

100 牧野虎雄(1890-1946)洋画家。帝展で活躍。1930年結成の六潮会のメンバー。

もふ 梅雨あけとへちまの秋面白いとおもふ

二月九日

紅梅図花ノ部分にかゝる 昨日来らるゝはづであった田中良助氏来訪 東京会五月中旬開催に就て 今度は小生ノ番 快諾するの外なし 亦今回は時勢に鑑み大分小数にする外面帖の展観を為すとのこと その依頼も共二なり 小林さん至急ニ横山先生に用が出来たので午後福田君同道来らるゝをかなはず わざ／＼自身ことわりに来られる 折柄田中氏もいられたので幸三郎兄等と午食を共に雑談 田中氏の当今作家の自然観察の不用意に就ての非難 牡丹に就ての一例等 例に依っての一流の話大いに興味あり 北原おてるさん¹⁰¹正樹みどりの子供同道遊びに来た 福羽莓の立派なものを呉れる 最も今日は祖母ノ命日だといふので 和楽の母にもう八ヶ月の御腹では余り外出しない方がいゝといはれる 夜食后帰る 角谷氏¹⁰²秋艸の箱書を午后来られた 夜糸井君が女ノ子が七日に生れたと告げに来た 今日はずっかり時雨で了った 今にも降りそう田中氏にひたきのいる柿の図渡す 先晩お話しのあった下村先生¹⁰³の挿画釈迦ノ本を小林さんが持って来て貸してくれた

二月十日

紅梅図作画のつゞき 昨夜の雪が木々に美しむ 大分冷えて近頃の寒さだ 越谷君が鯉の下図を持って来た 尾の辺に見る可きものがあつた 午後富取君来る 先達話しのあつた支那饅頭と下駄を呉れる 老父八さんの隠退披露に就て幸三郎兄に話しに来られたのだが不在の為め晚餐を共に雑談に暫時過ぐす 折よく帰って来られたのでその話が出来た 朝刊に報ずるところに依れば井上蔵相¹⁰⁴がピストルで暗殺された 斯ふした愚人の出没は洵に困る 何とつまらないことか 安部磯雄氏¹⁰⁵が言葉の殺人だといはれる 同感ノ到りである 国賊井上等々の言語が如何に無知妄人の頭を支配するか妄語はつゞしむ可きである

二月十一日

大分寒さが厳しくなった 折角ノ紀元節なのに時雨れて夕方には小雨さゑみたら紅梅ノ図どうやら仕上げた ふくらみのあること甘味が加わること そんなものが慾しめといふのが昨今の制作の気持だが 秋草図の修補と箱書をすます 天明さんの琢也君が遊びに来て子供達とトランプ遊びを仕てゐたのに仲間入りをする 迎ひ旁々天明さんが法門平十郎といふ別名で齋垣居随筆を三田文学にのせたのを持って来て貸して呉れる 別宅の兄弟弥等と練炭の炉を囲んで茶話 練炭の効用一个四銭弱で殆んど終日たえないのは大いに賞す可き也だ

二月十二日

昨日に引かへ好晴 紅梅図幹の部分にどうもあきたらない個所があるので手を入れる 試作へ出品して見様かとおもふ 瓶梅の下図にかゝる 二尺五寸巾の三尺 相沢さんから電話で高橋君の祝物に就ての話 夜天明さん 和楽ノ母弥等で茶話 井上さんの暗殺からたま／＼大久保利通の殺されたのも二月の十一、二日だとのこと 憲法発布の明治二十三年でアーチの門 万歳といふ言もその時が創始だそうだ 奉祝万歳何れの言にすべきかが結句万歳になったんだそうだ 弛しきりに練炭の効を賞す

二月十三日

紅梅図の幹の部分どうも思った様にいってゐないので亦手を入れる 試作への瓶梅図の下図をつゞける 角谷さんが秋草図の箱書をとりに来られる 今夕は横山先生の外務省松宮¹⁰⁶ 衣川、三井の土屋¹⁰⁷ 伊太利代理大使であられた吉沢¹⁰⁸の諸氏の御招宴に列する為め出掛ける 築地新喜楽 折悪しく時局多端の為め松宮氏出席出来ず 其他大智さん¹⁰⁹の列席在 折柄のこととて自然談話も上海方面のこと多し 午頃高橋君が妻君同伴出京 最も妻君歯痛の為めもあった由 三点作品持参 その内杉の木立の風景が宜かった 他は多少高橋式形式が多い様におもわれた

101 北原輝子(1901-1932) 実妹。北原大輔の妻。田端在住。子供に茂樹、正樹、みどり。

102 角谷憲一 新画を扱う角谷二葉堂を経営。

103 下村観山(1873-1930) 日本美術院同人。

104 井上準之助

105 安部磯雄(1865-1949)政治家。社会主義者。

106 松宮順(1892-1970)外務省の役人。

107 土屋計左右(1888-1973)実業家。当時三井銀行上海支店長。

108 吉沢清次郎(1893-1978)外交官。

109 大智勝観(1882-1956)愛媛県出身。1914年日本美術院同人。

瓶梅図下図の連続 同図使用の為めのかり張を高橋君に手
伝ってもらって張る 七条さんの息子さんが来られたので写
生に就て話しをする 忽那君の指導で同君が果物を写生した
ものを見に本宅に出掛ける 和子が悪寒を覚えるといふ 体
温八度四分に上る 庄司さんに来てもらふ □□□□□□
□□□□□□□□□□ □□□□□□□□□□□□□□□□
此の所和子の受難つゞき 一日登校したゞけで亦休まねばな
らない 小茂田君も感冒とかであすの十五日の集りを延期し
て呉れといふ通知を受ける けふ終日いやな雨の日だ

続いて雨降りた 夜中に和子ノ氷のうが破れたこと等があったりして熱を増長させたので不安 熟睡しないのですっかり朝が遅くなった 假張が未だうすいので高橋君に手伝ってもらって仕上げる 大根の汁を引くと丈夫になること新聞紙上で見たのでどうさと交ぜて引く 不破君が東方美術といふ雑誌を創刊するので河合といふ人が談話を聞きに来られる 三月に出るのだそうだ 庄司さんが診察に来て呉れる 大分調子はよく熱も下って来た あごの怪我也全快した由 幸三郎兄の地紙に紅梅を描き出す 夕方幸三郎兄旅行から帰って来た 長倉さん¹¹⁰が倉庫を建てられたその写真を見る 仲々近代の様に見へる 川上さん¹¹¹病床に親しんでいられるとか 太田耕治さんが来訪 帝展存続云々に就て話しを聞に来たのだそうだ 晩餐を共にそれ等を中心に雑話 雨益々しげくなって来た 高橋君横浜に出掛けて未だ帰って来ない

い 天気になった 扇面紅梅図仕上げる 佐伯藤の助氏来訪
 木瓜蠟梅ノ二色紙の箱書をする 中村君同氏依頼の色紙を持
 参 紹介をする 幸三郎兄と三人午餐を共に雑談 紙一しめ
 御土産にもらふ 夕方京都土井撰美堂主¹¹²富田さん¹¹³の紹介
 にて来訪 五日下午展観の画依頼の為めである 晩食を共に
 雑談 上田子行君友人有田、清水両君同行来訪 東洋画院創
 立に対して賛助を求めにだ 来客中なので後日を期して帰る
 四谷美術社から持って来た桃山屏風集を高橋君と観る 輯中
 永徳と称する柿、柚子の屏風 猿のいる特に小猿のよきもの
 二直庵の雪梅鷹のいる屏風杉に夕顔の図賞す可きものである

柚子の写真の正確土坡の未だ形式に墮せざる 永徳の傑れたるを感ず 岡田由兵衛といふ人から容齋の箱書をして呉れと送って来たが断って返送することにする 夕方頃から朝子が咳を仕出した 悪くならない様に祈る 外務省の礼に就て横山先生から電話がかかった

天気はつづく 扇面白梅の方にかゝるかたはらあをきの図を
先きに埃及図巻に用ひた紙にこゝろ見る 葉の墨の調子は紙
を利す考へた 朱玉のあつやつやしたあほきの実の美しさ
琅玕から黄玉からルビー半月が梅の梢にかゝる 白梅はもう
盛りを越した様だ 紅梅が之れから 蕾も大分大らかになつ
て来てゐる 天明さんが夜遊びに来られる 同氏の青年時代
に於ける金沢野じまやにて浦賀梅本の御ちほさんとの物語
加賀太夫の引合せ二長町の和田が親類であられること等 夜
は更ける

扇面白梅 小品あをき図共に描き上げる 高橋夫妻片山に帰る 極左派吉田候補選挙運動に因を発して一味検挙 長者丸クラブに集合のところ 大分手近の出来事だ 選挙もいよー白熱期 庄司先生も錦木富士弥の為にハンブレットを持って来た 和子も大分快方の様子 朝子は多少胃を害してゐるのだそうだ 野村が弥生の外套の見本地を持って来た夜は計算 仲々赤字の数字は大きい 速やかに解決がつけ度くおもふが 満蒙愈々独立国家を組織 新聞夕刊は報ずることに来て寒さがつのって来た

こゝにて来て大分冷える 霜柱も立つ 瓶梅図を始める 下
描きと二度程雲母の地眼を引ゐたのに過ぎず暮れる 雲母が
なかったので忽那君に借りた 小林さんが貸して呉れた釈迦
高山林次郎¹¹⁴著を読む 寢に名文であり亦下村先生の挿画と
相まちて貴し 先生のふくやかなくせない線條殊の外にお
もふ 夜は別宅の兄来て上海の話した どうも少し風邪の気
味だ

110 長倉新太郎 沼津の実業家。絵画展を行う沼津同好会の一員。

111 川上五郎(1882-1972) 沼津の実業家。沼津同好会の一員。

112 土井久吉 京都で新画を扱う土井撰美堂を経営。

113 富田溪仙(1879-1936)京都出身。1915年日本美術院同人。

114 高山樗牛(1871-1902)評論家、文学博士。『釈迦』は下村観山の挿絵で1899年博文館から刊行された。

二月二十日

寒いが天気は上々 瓶梅図の地隈を引く 色紙に八重椿を描き出したがどうもうまく行かないのでやめて了ふ 改めてもみぢ葵を始める そんなことで一日とりとめもない日になって了った 関の妻君が絵をとりに来られた 紅梅とダリヤの二図を選ばしたが自分では決めかねるので両図を貸してやる 出口勝行といふ堺の人¹¹⁵から同地所在大安寺の永徳と称する襖絵の絵はがきを贈って呉れた 一寸工合のよいものの様だけふは選挙投票日であったがき権 夜天明さんが見える 耳の後部をまさつすると顔のしはが出来ない 之れはギリシャ時代にあった方法であるそうだ 就眠する時にはすっかり身の全部をゆるめることがかん要 長寿の法とか さもあるべし

二月二十一日

色紙ノもみぢ葵とそれから八重椿を再びやり直して見る どうにか仕上げる 両図ともに衣川氏の依頼によるもの 桃の写生をする 八重の桃である 久闊めで安達俊介さんの訪問にあふ 宝珠をはがき大のものに諸家に描いてもらったものを集めていられてそれに小生にもといふのであったがどうも気が進まないののでことわって了ふ けふは終日風が吹いていた 天気はよかったが暮方にないで満月かと思はれる月がいゝ 日々科学欄に出ていた月の出の大きいのは眼のさかくであるといふことを実見して見る そんな様にもおもわれる

二月二十二日

緋桃ノ写生をする 焼金蒔つぶし大色紙二同緋桃を描くハ益の助君の幸代さんの初節句を祝ふ為めである 昨日のもみぢ葵の気にすまないところをなほす 和楽の母正五郎君の嫁のことに就て来られる 一軒の家庭内の複雑なことは外からは仲々理解され得ないものである 極めて平面表面に観察は止められる様だ 修善寺の新井さんから菌を送って呉れた 名産の名にはちず殊の外の風味 バタでいためたものを白い皿にのせたあんばいはフランス料理をおもはせる 上田子行君が夜来た 東洋画院は不成立になった様子だ 伝統といふものは地下水の如きもので掘りあてたものを引くものは亜流だ 自ら掘りあてるものに依って始めて本統の伝統は保持される 所謂創作と伝統とは同血であるわけだ そんなことを話の中心

に同君に実行を進める 雨が降って来た 幸三郎兄が帰って選挙の成行が不満だといふ 政友会ハ益々数を益して行く様だ 弥生が黒のオーバァは埃が見えるのを始めてのものなのでじぶくる 七条さんが見えた デュラアーの手を模写させるので貸す

二月二十三日

瓶梅図の線描を始める 関の妻が紅梅図の方にしたといふのでダリヤの方を返しに来た 今日子供同伴であったので暫く話しこまれる 小茂田君が軽いが肋膜炎だそうだしといふ話が出たので暮方から幸三郎兄と見舞に出掛ける 幸ひ同氏は中心性肋炎といふ診断をされたとのことだ 内十五日が体温表で見ると一番高熱で併し次第に低下してゐる 此の分ではそうたいしたことなさうで全快する様におもはれる 廣すしに寄ったら仲通りの新富の主がいた なんでも坂下の親類の不幸でその帰りののだそうだ 月は洵に清らかに晴れていたが北の風は烈しく吹く寒ぬ日だ 不在中上田子行君がりんごの絵を持って来た 昨夜貸した傘を返ししかたへ^{*}

二月廿四日

瓶梅図の色彩にかゝる 九品仏の葵屋主人火災保険に付て来たが何にしても当方の都合がつかない 吉住小一郎君¹¹⁶長唄学校の君子さんといふ人と幸三郎兄の案内で画室に来た 小一郎氏には約半年目位のことだ 今夕の研精会の安宅を是非聞きにこいと誘はれる それで夕方幸三郎兄母別宅姉と日比谷公会堂に出掛ける 自宅の風呂が損じていたので和楽で入浴 夜食の暇なしである やっぱり小三郎の偉さを感じる 外記猿の独吟も宜し 安宅勳進帳の大ものも巧みに大きくこなし切るところはさすがであり他の追従をゆるさない とりわけ近來仏教に深入りしてゐるとか 一層此ふしたものに熱がある様で他の人々もそれに引き入れられてともかく面白く聞けたことを欣ぶ 帰りに新富は了ったので帆掛すしに寄る 銀座交叉点で黒田君¹¹⁷に遭遇する 伊太利以来帰朝始めてゞ氏はえらいことを始めたといふ それは此の二十八日に公会堂で催すオペラのことだ 是非来て呉れといふ

二月廿五日

瓶梅図幹の部分である 二三日寒いとおもってゐたが遂ニ雪になる 仲々の大雪で樹木が美しい 静かで制作には雪の日

115 出口勝行 堺市在住の茶道家

116 吉住小一郎(1908-1983)吉住小太郎。四世吉住小三郎の長男で1963年に五世吉住小三郎を襲名。

117 黒田謙(1895-1947)声楽家。イタリア留学後はバリトンからテナーに転じ、歌劇の普及に力を注いだ。

はもってこいである 明るくもあるし 衣川氏に依頼されて
ゐた色紙のもみぢ葵と八重椿ノ二面小包で送る 暫時休校し
てゐた和子通学を始める あいにくの雪だ それにもめげず
庄司さんが見舞って呉れたそうだ あとはたつぬる人もなく
静かに雪はつもる 早寝だ とも子が片仮名を大分読には感
心した

二月廿六日

雪晴れの輝かしい日 瓶梅図紅梅花の部分を進める 午後上
田子行君亦りんごの絵三点持て来た 本すじの糸口を見付け
た様だ この道をうんと進むことを望む 幸三郎君がよし政
の払のことに就て来られる 昭和五年拾月廿一日のだそうだ
が記憶がさっぱりない 日記出してしらべたところそうであ
ったことになる で弥に少々文句を言はれる 和楽に風呂
をもらいに晩食后出掛ける 父の命日で青龍寺の和尚の読経
の声が聞こへる 天明さん正ちゃん別宅の兄等とぶどう酒梅
酒を味ひ雑談の中幸三郎兄帰る コロンビアの畜音器を両氏
に約束されたそうだ 座敷用では手さげの五十円位のものが
適当だとの事 出口勝行といふ堺の人から線香をもらふ 同
氏の商のものである様で大へんいゝ香である 幸三郎兄が
五十円持って来て呉れる とにかく困るだろうといふので

二月廿七日

あす二十八日は今村さんの十七回に相当するののでけふ墓参し
て置かうと予ての約束であるので午前中瓶梅図の紅梅花の部
分をして出掛ける 長谷川さんが色紙の展覧 それに美の国
の展覧もあるので三越に立寄る そこで長谷川さん¹¹⁸美の国
石川氏等に遭ふ 丁度来合せた幸三郎兄と一所にタクシーで
大塚駅に行く 牛田小山富取黒田¹¹⁹と会す 小茂田君は病気
だが岡田君¹²⁰は如何したのか 掬水といふ茶屋で小憩 墓参
吾々の献木の松大分調って来た 故人をしのぶすがとて
浅草に出て東京倶楽部でフットボール大学、間チャウ27 上
海事変等の映画見物 丸やといふ蛸めして晩餐 且て故人と
来た家である はまなべ仲々にたべられる 満腹 昨夜来下
痢で減食してゐたので一層である 銀座に出てエスキモーで
ホットレモネード一ぱい 牛さんに今秋奮起あらんことを
うながす 不在中西島青柳、玉川の伯父さん等見えられしと
仲見世裏の扇子屋に仕立てにやるので紅梅白梅の扇面幸三郎

兄に渡す

二月廿八日

青柳君が試作出品作のとうがんの絵を持参する 大分宜く
なつて来た 清吉君の絵を見て本宅忽那君の不完成に注意を
あたへ大崎へ行って金子君の出品作を批したら午近いので神
戸岡田氏堺出口氏への返事手紙を書いて了ふ 午後瓶梅図
やっぱり未だ紅梅の花の部分に引かゝつてゐる 幸三郎兄天
明さんと画室に来て昨日太田さんからの依頼である紅梅白梅
双幅拙作希望の話を聞く 何んでも成可く早々に描かなけれ
ばならないのだそうだ 今夕七時に黒田謙君の帰朝記念のグ
ランドオペラが日比谷公会堂に催うされるので切角招待を受
けてゐる為め弥と二人で出掛ける 行しなに清吉丈平両君に
試作出品の注意をして オペラはカバレリヤ、ルスチカーナ
であつて黒田君終り近く大分苦しそうであつた 南部氏¹²¹は
よくやつてゐた ともかくオペラを貧弱ながら本格的に移し
た事は見止めてもいいとおもふ 帰途廣すしに寄る 歸つて
から雑談十二時になつて了ふ

二月廿九日

けふは試作の鑑査日である 十時参集 府美術館で行ふ
百七十九点程の応募に対して約二十九点の入選と決定さる
目星しき作品なくいたづらに表面の塗抹で内容とぼしきはさ
みし 金子角田青柳君等皆落選 新人中けん作家の出品少な
きは如何なる理由か 生活難に依ること大なりとは郷倉君の
説であつた 或いは然るか 案外に早く片付いたので小林富
取小山三兄と拙宅に来られて晩餐を共に 牧溪のアトリエに
出ていた柘榴がとてもいゝと鶴心堂がはがして来て呉れた
小生ギリシヤイオニア式彫像の写生から小生の滞欧中の写生
を見てもらふ 外出から歸つて来た幸三郎と交じて市村氏
がいよいよほんものになつたといふ様な雑談に十時頃まで賑
か 支那に輸送される兵士の万ざいといふ声が列車からんに
聞こえる

三月一日

瓶梅図の続き それから上海出兵への献金の為院主催展覧の
下図にかゝる 鯉魚図である 満蒙へ出兵の列車が通過する
のを見送る 万ざい三唱す 日は麗かのうち日章旗の小旗は

118 長谷川昇(1886-1973)洋画家。1911年に渡欧、14年帰国後再興日本美術院洋画部に所属。

119 黒田古郷

120 岡田壺中(1895-1955)東京出身。安雅堂画塾以来の仲間。1931年日本美術院院友。

121 南部たかね アメリカで活躍をしていたオペラ歌手。1931年に帰朝。

輝く 晩食後富取君院陳列の帰りに来られる 父君隠退披露の記念品を幸三郎兄に届けて呉れといふ事柄もあってゐる七条さんからもらったこのわたで浅酌 雑談満蒙は愈々独立宣言を為す 上海事件も漸く落着に近づいた様だ 大満州国 国名大同元年年号

三月二日

鯉魚下図が出来たので本紙から引きをする 四回程引く かわく間紅梅の花がどうも工合悪いので余り鮮か過ぎるので軽いのだ やっぱり朱の重みが加はらなければいけないので上に胡粉と交ぜた淡いのを掛ける ギリシャ彫像のスケッチ台帳に張る 鯉魚図線描きを為す 山田さんより拝受せる長方形の墨を使用して見る 予想した紅色のものであった 弥風邪引きで臥床 けふは結婚記念日に相当する 静かな一日である 六潮会座談会の記事がアトリエに乗ってゐた 特定の内容は特定の形式を要求する 全くそうである 時代精神に伴う表現形式であらねばならない 言をまつ可きまでもないことだ 美学的要素に時代等価を持つ 何れがかけてもいいけない

三月三日

朝北原¹²²から電話 一家をあげて病気 とりわけおてるさんは高熱の為に早産であり死産である とにかく見舞に行く 茂樹君が四十度五分の熱 おたけさんも大分苦しそうであり 丁度下島先生の来診があってそれでもまあ大体大丈夫だろうとのこと 気管支炎肺炎の診断である おてるさんにたのまれたが此のところ持ち金をなし拾円程どうか持っていたので置いて来る 隣の人がいゝ工合に手伝ってもらへることが出来るのでんてこ舞のうちに洵に幸ひである 北原さんが戸棚から死んだ子供を出して見せる もう一月といふ間際であるのですっかり調べてゐるのはいたましい 氷の様に冷たい死人の特種の感じである 聞き乍ら 午後鯉魚の制作の続き 不在中越谷君が来たそうだ 夜七条君¹²³本とインク壺吸取紙のある静物写生を持って来る 吸取紙がうまく描けてゐた おてるさんに依頼されたことに就て弥と相談して九品仏に電話を掛けたが今以て来ない 明日くるつもりなんだろう

三月四日

鯉魚図制作連続 葵屋主人余り昨夜遅くなったといふのでけふ来る 直ちに田端に行ってもらふ けふは四回にわたる出兵の列車通過 度ごとに万ざい々かん声は上る 夜ははなれに弥招かれて出掛ける 良子さんの三回忌に相当するのである 青柳君が来られる 同君が且て大崎で加藤友三郎といふ人に依って趣味的に経営されていた陶器研究所にて作ったといふ支那うつしの盃を持って来て呉れる 面白い味があるものである それから同君の富士行地元登山等々の奇行の雑談に十二時までになる 田中良助さんが東京会の絵と画帖用のものを持って来る 同氏は日清戦役に出征した経験があるのでその当時の話が出る 軍曹であった氏はだん葉運び宿所係等のことをやったそうだ 今は曹長になっていられる由

三月五日

鯉魚の完成に進む 葵屋主人昨夜どうにも遅くなったとかで十時頃やって来る 頼んだことに就て手間取った為だとかそれも思た半にも達しなかったそうで漸く二十五円だけおてるさんに渡して来た由 でも病状経過はいゝ様であるとのこと けふも昨日におとらず出兵の万ざい盛んである 太田耕治君が祖国の口絵に就て来たが延期してもらふ 横川君があほきの画をとりに来る 鯉魚図完成に達す 幅二尺三寸七分 堅一尺七寸である 院の出兵献金の資にあて様とおもふ 瓶梅の図に再びかゝり出す 衣川氏来訪 例のばらの図の礼に就てゞ金一千円也 拝受する 幸三郎兄が久方帰ってこれらて午頃アトリエ社藤本氏¹²⁴に小生独断にてダリヤの図を渡したことに就て文句をいゝに来る だがそれは色々行違ひが あって幸三郎兄にも小生にも一方の解釈のみにとらわれて論じたことが解って直に氷解する そんなことで昨夜と同じ様十二時になったった 團琢磨氏¹²⁵三井の前にて暗殺さる 無智の族の暴挙遺憾の極み也

三月六日

地久節亦弥生の誕生日也 うらゝかな春の様な日初めてたし 瓶梅図制作の続きである 大阪万朝の三村儒平氏¹²⁶来訪 小作希望の由である 氏には且てねづみの図を送りしことあり 今度は輪転機北浜の有志に五千号記念とかにて寄贈されたるに報ゆる為とか その一人吉川とかいふ前作所有し

122 北原大輔(1890-1951)陶磁史研究家で御舟の妹輝子の夫。帝室博物館勤務。

123 七条憲三の息子。

124 藤本韶三(1896-1992)『アトリエ』編集長。

125 團琢磨(1858-1932)実業家。三井財閥総帥。男爵。血盟団事件で暗殺される。

126 三村儒平 大阪万朝報記者。

て呉れてゐる人に贈るのであるそうだ 高谷氏代理五月開催の展観に出品して呉れといふことで来られる 弥北原に見舞に出掛る 小生は木村さんの御悔みを兼ね院へ鯉魚図を届けに行く 丁度幸三郎兄も院を觀に行くと言ふので四時半院に会ふ約束をする 鳩居堂に依って五円線香を求め約束の時間迄にともかく会場に行く 齋田氏が居て雑談 金子君も来合す 幸三郎兄と三人にて京橋迄出て金子君に別れ味覚にて晚餐 ちもと三共にて買物 小茂田君見舞のもの 併し時間が遅くなったので小山君を訪問 同氏を誘ひ樽平にて浅しゃく帰宅す やがて弥帰る どうもおてるさんの工合が悪いとのこと 困ったものである

三月七日

團さん哀悼の為に原善一郎さんに手紙を書く 小茂田君見舞幸三郎兄との約束 北原工合おもしろからずの方へ弥と出掛けるのでやめる 下島先生を訪ねる 折柄三佳さん¹²⁷ 来る 御産婆さんの見立てはどうも腎臓を併発している様だとのことと下島先生も大いに閉口 大輔氏御産婆さん等来てもらって協議 鶴岡先生の来訪を乞ふことにする 産科の人である 診断の結果じん臓はなく多少かん蔵がはれてゐること 肺炎が向上してゐることと多分なる手あての必要あること 看護婦に就て種々行違ひ等あったがともかく三人雇ふことに決める 三佳さん夫婦岡本夫婦¹²⁸等来て十時半頃迄看護す あいにくの雨降り出す 岡本達とは品川で別れる 北原さんも閉口してゐる様なので不取敢五〇円を置く 亦鶴岡先生来診料拾円も

三月八日

北原より電話 てる危篤の報 匆々にして弥と行く 早や六時十分死去であった 岡本夫婦杉浦母葵屋主人やがて来る 亦花屋の母来る 愁歌以て皆の涙を誘ふ どうもたけのさんの工合悪し 山川一郎博士の来訪を乞い遂に入院と決定 夕刻同病院に移るかたわら納棺の式 神官の礼拝 吾々玉串を捧げる 重病二人を控へてゐる折柄告別式は何れの日を選ぶこととし明日不取敢茶毘に付すことに協議決定す 博物館関係の方々それからそれと来駕 明日のこともあれば十二時半頃帰宅す 昨日と同様岡本夫妻には省線で別れる 何にしても一度に群がる出来事所致に窮す 亦いやに寒い日でもある

三月九日

晴れてゐるが烈風 北原不幸二付て笹岡大沢両氏に電話す 幸三郎兄に会って小茂田君余りよくないとのこと聞く 弥と田端に行く けふは不取敢火葬に附すことになってゐるので一時出棺式神官の祭詞によりて行ふ 二時卅分出棺 北原大輔、三佳、武雄、石本君大沢葵屋主人岡本小生送る 日暮里火葬場にて茶毘 五時卅分頃帰る おてるさんも早や白骨也 享年卅三才 北原輝子刀自の壺に入つて了ふ 八時頃帰宅す 入院後おたけさんの工合宜しとか茂樹君は入院の手はづのところ余りの烈風明日にする 香典として同族会の名によりて卅円贈る

三月十日

弥と采々会院献金展観共に三越に催されてゐるので觀に立寄り荻窪に小茂田君を見舞 阿佐ヶ谷の田村隆一の新店に廻る 昨年十月に生れた子供はその子と名付けたそう 亦店も発展して行く様でありめでたし 亦勝弘の時計店開店を祝する 予定であつたがけふは木更津に兵隊検査に行ったとのことでやめる 大分時間が遅くなったので病院の方はやめて直に田端に行く あさ子が正樹を連れて行き弥がみどりを引き受けるのであつたがみどりは折角中里の三佳さんの方になれたとのこととでありどうしたのか正樹が目黒に來たいといふので変更して正樹を当分引受けることにする ねむくならないうちにと匆々に違をつげる 東横にて晚餐しかして帰る 案外におとなしい 病院の方へ茂樹は移された 空が見えて窓からであろう喜んでゐるそ だ おたけさんが追々重って行くのは困る 不在中上田子行君が來たそう だ

三月十一日

長倉さんの来訪を受け近來宗教ニ對して関心をもたるゝを中心に談話は高潮に達す 石本君¹²⁹来訪 午食を三人にて為し乍ら一層はづむ 長倉さんの心をひく映画を映写して見せる 夕刻小林さんを画室に長倉さんと訪問する 氏は始めてなので大に古稚の味を礼讃す 紅梅と柳にかわせみの図のかきかけを拝見する かわせみが不用になったといふのでもらつて来る 同氏も誘ひ三人にて沢田屋に晚餐を為す 大へんな賑かさだ 未だ時間が早いといふので銀座に出る 青柳の樓上にて喫茶帰宅 高橋夫婦上京してゐた

127 北原三佳(1895-1972)鍔金作家。北原大輔の弟。

128 岡本英・麻子夫妻。

129 石本光太郎

先日下さった切手やっぱり頂いて置く方よいだろうといふこととなる 五十円の三越切手である 更ってすまない次第である 梅の双幅を描くので写生をする そして下図にかゝる巾尺三寸立四尺のものである もう白梅の方は散り僅かにうてなを残してゐるに過ぎないが紅梅は未だ蕾もある 椿の花の枯れかゝったものもある情趣がある 金色彩だ 築山の影に且つて三宅君からもらった蘭を移して置いたが気を付けて見たら蕾を持ってゐた 木々も皆かすかに芽を吹みて早や陽春を目前にひかへた感じである ひきの声も折々きこへる 夜野村が朝子の洋服の裂地を持参したが此れはと思ふものは少ない 正樹を始めて湯に入れてやった しゃぼんが目に入つて泣いた

三月十九日

紅梅白梅双幅の下図を午前中して絹を求め旁々独立展試作彫塑を觀に行く 天明さんが出掛に久らくめで来られる 一家風邪であつたとかである 中車が中央公論に現今の役者は修業が不足だ 往昔は例へば車引の梅王等は決して腰をかけたものではない 或る役者が病気の折後見がうしろで椅子をあてがったところそれをけとばしたそうだ 然るに今ではどの役者も椅子を用ゆること当然にしてゐる 芸は何才になるともなし得るものならず いわんや腰をかける等に於ては 仲々味のある話してであると話される 独立展の清水登之¹³²の陶土の丘 花売と看護婦 芋畑、三岸好太郎¹³³の裸婦の背部道化 林武¹³⁴の緑色の少女 児島善ノ助¹³⁵の雪庭川口軌外¹³⁶の花等面白く見た 特に林武の絵は印象深し 中山¹³⁷、里見¹³⁸、の諸作きわだちてはをれど余りこない 試作石井さんの裸婦かたのところに特に感あり 平藤さん安井さんに拝眉 忽那君写生してゐるのに会す 一所に絹を求め銀座に出て伊東屋で和子の机を求める 六円八十銭 それから松喜で晩食四円六十銭。青森高谷氏から林檎を一箱もらふ

三月二十日

紅梅白梅の本紙にかゝる 朱筆にてあたる 胡粉地隈を引く烈風に終日埃りに落ち着かない日である 弥も昨日あたりから風邪の気味 けふは臥床する 上田君午后来訪せれど制

作の都合上あはず 夕刻横尾君来る 作品白梅の図を觀る 夜は同君と雑談 善一郎さんから岳父をいたむ哀悼歌数首を送つて来られる 青森からの林檎の味美ながら雪を食む趣きがある

三月二十一日

紅梅の梅の線描から色彩にかゝる 彼岸の中日春季皇霊祭の祝祭日らしく洵に静かな麗かな日とて案外に捗る 横尾君は村田君のところへ行くと出掛ける 夜分は天明さんが来られ少年時代に人生とは何ぞやとか宇宙存在の意義とかそんな哲学尊重流行熱に冒された話が出た 併しそんなことがあつたので多少今日でも自然の深き味を知ることを得るのは幸ひだ 時計の内部を知るものは一層時計の価値を感じる 細密觀察描写も小生には随分役に立ってゐるわけだ それから理論と感情と技術とがそろふことは仲々むづかしい 真実によき作品は此の三つのものがある 大抵の場合どれかゝ先走りをしてゐる

三月二十二日

紅梅白梅作画連続 昨日と同じ様な麗かさであり平和に進捗する 暮方幸三郎兄沼津より歸つて来られる 晚餐後隆一君が倒れたといふので弥と別宅にかけ付ける 例の眼の疲労から来たらしい発作である様だが起き上ろうとすることや悪寒を覚える様であるし小生始めてゝとう惑する やがて庄司さんも来られ安静になる やはり眼からであるそうだ 今夜は月蝕であるがあいにく雲が多い

三月二十三日

紅梅白梅作画に過ごす 終日とり立てることもない平面的な日であつた 夜子供達と林檎を鉛筆で写生して見たことなんかであつて洵に静かな日であつた午頃から時雨でいたが遂々夜には雨の音を聞く

三月二十四日

紅梅白梅作画連続 花のうてな部分に静かな日を了る 弥朝子正樹を連れて烏山に墓参 葵屋主人帳面のことで来たが

132 清水登之(1887-1945)洋画家。独立美術協会創立会員。

133 三岸好太郎(1903-1934)洋画家。独立美術協会創立会員。

134 林武(1896-1975)洋画家。独立美術協会創立会員。

135 児島善三郎(1893-1962)洋画家。独立美術協会創立会員。

136 川口軌外(1892-1966)洋画家。独立美術協会創立会員。

137 中山巍(1893-1978)洋画家。独立美術協会創立会員。

138 里見勝蔵(1895-1981)洋画家。独立美術協会創立会員。

見当らず漸く夜戸棚からさがし出す 北原から二十六日告別式を催行する通知に接す 降りみ降らずみといった薄れ日だ 夜雨のおとはもう春のうるをひを味ふ

三月二十五日

紅梅白梅作画連続 弥病院見舞から北原に出掛ける 杉本絵具店主来る 午近く小林七条さん共に見える 七条さんは同好会の乾板をとりにてある 小林さんと和楽に午餐 それから福沢さんの地面を幸三郎兄小林さんと見に行く 白日の湯山氏¹³⁹夏催うす展観出品依頼に来る 夕刻北原へ出掛ける 内藤さんといふ人見へる 亦おたけさんの乳姉妹といふ人も来られる 弥とそれから晚餐を天民でして帰宅(天民三円五十銭) どうかと気づかって行ったが告別式の多少じゅん備はしてあった

三月二十六日

昨日二十日祭をひかへて本日告別式を北原自宅にて催行 幸ひ好晴に恵まる 相変らず北原式かんまんにて仲々捗どらず大いに促進―を以て辛うじて時間にあてはめる 午後一時から二時の間に於てゝある とにかく無事終了 階上にて数氏と小宴 午後七時半頃散ず

三月二十七日

温度昇騰 終日風が強く夜はとう―雨になった 紅梅白梅図完成する 牛山さんの木瓜が朱色に美しく咲きほこってゐる 無心して写生をする 単辨で真紅な花である 横尾君が来る 葡萄の話が出る 今秋は見に出掛けたくおもふ 何んでも十一月初旬あたりがいゝそうだ 夜は幸三郎兄と別宅にラジオを聞きに行く けふは朝日で献木した銀座柳復活祭を同講堂から放送したもので凡て柳に因むものであった 天明さんも来られた

三月廿八日

昨夜来下痢腹痛遂二本日臥床のやむなきに至る 庄司先生に來診を乞ふ 急性腸胃かたである 何か中毒したのではないかといはれる 別に心あたりはない 幸三郎兄が紅梅白梅のことで来られる 横尾君にはがしてもらって長茶亭に届ける 夜は天明さん横尾君等に依りて退屈しに過ごす 大分食欲が出て来た様だが未だ下痢は止らない 天気もいやな雨

降りだ

三月廿九日

どうもはっきりしないので臥床 和楽の山桜弥生が枕もとへもって来る いつの間にか盛りになったのに驚く 静かにねてもいられない気持ちだ 自然のゆるぎのない歩みには 天明さんが自作の俳句と歌を抜き書きしたのをもって来て呉れる 忽那横尾清吉等も交じって雑談 大谷とかいふ人が柿の図(錦木の改作)の箱書に來られたが臥床の為め改めて来てくれることになる 夜は天明さん横尾上田君別宅の兄等で雑話 おも湯二椀 スープ一椀 トースト五片 大谷ではない 大久保浩伸といふ

三月三十日

余り麗かな日和なので起きる 横尾君武久君等と姓名判断等の雑話をする どうもやはり未だ工合が悪いので臥床する 葵屋の主人が来て朝子正樹を連れて行く おゆき¹⁴⁰が共をする 弥生和子は先日来の約で弥が三越に連れて行く 夜は若柳君が中島さんの寄付画の所分法に付いて話しに來られる 折柄来合せた天明さん等で自然話しも下町のことが多かった 朝子達は未だに帰って来ないからとまるのであろう 清吉をおたけさんの見舞にやる スープ三椀 牛乳一合 パン一片 ソーダビスケット二枚 湯豆腐若干

三月三十一日

起きる 横尾君と雑談 高窪君が小生のちゃぼの表装が出来たので持参する 二三本のんでいゝ気嫌である 弥生は友達のところへ出掛けたり朝子達は九品仏なので和子を連れて弥と鶴の写生下検分に日比谷に出掛ける つがひの鶴は大分すゝけてゐた 松坂屋の屋上はどうかと行って見たがいない やはり上野の動物園がいゝんだらうとおもふ 銀座を散歩 資生堂で軽い晚餐 前田さん¹⁴¹の御夫婦に不図出会う 清元会に行かれんだそうだ 帰って来たら朝子が不在に出掛けたのでぐすつく 天明さんが來られた 淀橋の横君とかいふ人が水仙南天小禽の二幅鑑定に來たが両図ともいけな 多少運動したらと出掛けて見たのだがやはり未だ下痢が続く どうしたのか スープ二椀 トースト四五片 スープ オムレット ソーダビスケット二枚

139 湯山昇 新画を扱う白日荘の経営者。美術雑誌『白日』の編者。

140 おゆき 連水家の女中。

141 前田青邨(1885-1977)岐阜県中津川出身。1914年日本美術院同人。

四月一日

余りなまけてもいられないので画室に入る 木瓜の写生を続けて見たがやはり気力がでない 撰美堂の扶桑花の箱書も永引いていたがすませて返送する 和楽で拙作ちゃぼの図を掛けたので見に行く 土牛さん¹⁴²の軍雞も出来ていた 庄司先生に來診を乞ふ 予想の通り小腸の部分が特くに悪いのである 可く安静にしているのがいゝ そうだ 弥太郎君が来てトーキーの話してから上海事件ニュース等は后で擬音でトーキーにするのだ そうだ 庄司先生の話しのうちに往古には医術のうちにも一子相伝といった事があったそうでその一例としてはトラホームの薬に流さぬ銅が入るので古来の法に依れば銅板に梅干の汁を落としてその青銅の吹いたものを薬に用ひる 追々界にも競争烈しくならば秘密を守らねばならなくなるかも知れないと 丁度各国の軍備に於ける様に

四月二日

寢にいゝ 天気だ 減食の為め気力さらに無し 和楽の山桜も散り出すし木芽も一日―とぐんぐん延びる 木瓜の下図をつける 幸三郎兄が一中入学保証書に就いて来られる 笹本さん借地に関して葵屋主人の相変らずの所致にて弥と話をする 困ったことである 夜は玉川のお伯父さんが清次郎君の美校入学不許可に就て前後の話しに訪ねて来られた 午食にクエーカー・オーツ 晩に一椀のかゆ茶碗むしスープにて多少気力をつける 早々快愈して呉れないか

四月三日

祝祭日にふさはしき好晴 幸三郎兄保証書をとりに来られる 小茂田君亦熱を出したとのこと 武久君離婚問題にて話に来る 木瓜作画を始める 昨日から見るとすっかり元気になって来た 子供達は別宅に誘はれて摘草に出掛ける 庄司先生の來診あり 快方に向つてゐるが尚注意を要する由 夜天明さん小笠原君等見える 小笠原君は宝石彫金類を買はないかと持って来たのだ ひすゐの帯止めはとりわけ美しかった

四月四日

木瓜作画続き 午頃玉川のお伯母さん清次郎君同伴にて來訪 修業上前後の所致に就てゝある 富取君やがて来られ拙作瓶梅図の批判を乞ふ 練り過ぎて更って本質を失ふ恐れあること もっと単的に直さいな色彩法をほどこしたなら近來そうしたことがしきりに考へられる 富取君は下手好みの法から

脱れたいといふ 多少手造り風の持味にたより過ぎていられる様だ 北大路氏¹⁴³より寄贈の古染付百品を見て話しはそれからそれと十時近く迄話される 妻君がやはり工合悪く子淵(ママ：癪)になる恐れが多分にあるので近く再度入院される そうだ けふは充分全快に近づく 多少秘けつのかたむきクエーカーオーツ― かゆ二椀 スープ三タン等で気力を快ふくして来た 何しろ健在第一だ

四月五日

木瓜制作完成 柿二ひたきの箱書 晩秋と書く 大谷浩伸氏持参 北原三佳氏茂樹君を同伴正樹を引取り旁々先般小生立替五十円返却に来られる 茂樹君は豊島師範附属小学の制服にて仲々快活になった 越谷君葵屋の使で来る 山田さんのことに就て伊セ丹から解雇の通知を受けるいかなる理由か 夜は幸三郎兄来られて雑談 昨日三里塚にドライブした話等 かゆ二 スープ二 きれい片身 クエーカーオーツ― 未だどうも下腹かはる気味多し 気分はいゝのだが

四月六日

木瓜の写生 大谷氏箱書をとりに来られししばらく下村先生のこと共話してゆかれる 田村隆一君やってくる 久闊めであるのでゆっくり話し込む 天明さんも見えてそれからそれと話はつきない 雨が折々降って来る

四月七日

鶴写生の為め上野松坂屋に行く 同店八時卅分屋上は九時開場なので約一時間早く行って待つ 正午迄写生して帰宅 午後は相かはらず例の編物のモデル来て呉れる 五時迄写生 それから更科へ別宅の姉妹朝子と花子氏と出掛ける 最初の目的は飯倉の鳥屋に鶴がいたのを記憶していたのでそれを見旁々である あいにく雨が降って来たりかんじんの鶴は葉山の細川家に移っていたり 更科のそば元の様にうまくもなかった もっとも小生は未だ全快したわけではないのでせいろをーったべたに過ぎないが

四月八日

春雨にうるふ 鶴の下図を始める 尺三巾四尺で小林氏依頼のものである 井川白濤といふ人が(卅四才)小生偽作に就て了解を得に来られる 何んでも刈谷と云ふ人に依頼されて描いた絵が木村豊といふ表具師の手を経て白濤の落款印章が小

142 奥村土牛(1889-1990) 東京京橋出身。1932年日本美術院同人。

143 北大路魯山人(1883-1959)陶芸家、料理家。

生のものにかへられたんだそうだ 事実とすれば同氏も随分迷惑した事になる 先月末持って来た水仙と南天の二図がそれなのだそうだ 夜は北大路氏から送られた染付百品を親しく観る

四月九日

鶴の写生に上野松坂屋楼上に行く 午近くまでして食堂に小憩 それから久闊振りに理髪 小茂田君にも無沙汰をしてゐるので井泉水¹⁴⁴の俳句集を求めて見舞に行く 大分快方に向つてゐる様子なので遂五時過ぎ迄話し込んで了ふ 帰ってきたら勝弘¹⁴⁵が来てゐた 時計二個(一個八円)求める 代金は何れ支払ふ約束である 恋愛に関する話しが主で九時頃帰って行った 洵に快晴ではあったが風が烈しいので切角八九分咲きの桜がいたいたい

四月十日

鶴の下図 午近くに相かはらずモデルに来て呉れたので例の編物の写生をする 弥は歌舞伎に出掛ける 天明さんが夜遊びに来る ロッチのお菊さんの話してから長崎や下田の開港等の話しになる 北原から電話でおたけさんが退院した由 天気も宜く静かないゝ日曜 花見客は随分出た事だろう

四月十一日

学校が始まったので子供達は出掛ける 弥も朝子のことでやはり学校に行った 了解があつて明日から朝子も幼稚園へ入ることになった 午後弥は朝子の服やカパン等求めに三越へ出掛ける 朝子はそれを着て喜こんで寝る時はカパンを寝台に掛けてゐる 鶴の図本紙にかゝる 胡粉地に一日を終つて了ふ モデルの写生の手入れとで 夜上田君来た 突然北田氏福羽氏¹⁴⁶を同道訪つて来た 廣ずしで一さん傾けて来たので上きげんである ばらの会のこと鶴のこと鷹のこと菊の巻物のことなんかの話しで十時頃帰る 午頃天明さんが見えて殉教者とお菊さんの本を借して呉れる 小生からは宗達画集二部を貸す

四月十二日

朝子が幼稚園に初めて出掛けるのに愛憎の雨降りだ 弥が子供達を引つれて出掛ける 鶴の制作に終日没頭 案外に捗る

木瓜の小品前々からの依頼である京都の上田晴風氏に送る 午朝子は帰って来た 大変元気であったそうだ

四月十三日

天気晴朗 鶴の図完成 税務省の人が所得調査に来たので長茶亭に行く 幸三郎兄から五十円貸して呉れる 午後は春草先生¹⁴⁷の下図写生を拝見する約束があるので代々木駅に大久保小山小林氏等と落ちふ 大久保氏の案内で菱田家を訪問 小鳥の写生から拝見して雑木の部分鯉魚熊笹きじあやめ等々ゆるがせにしない写生 賢首菩薩 春雨か秋雨かの美人、杉木立の精細なる小下図 賢首菩薩及び美人のは精なる写生も共ふ 亦日蓮辻説法の下図のゆるぎのないこと 烟草の火を落したとかで未成に終りしを横山先生の補ふとかいふ釈迦説法の作品 終りに未完成ではあるがさぞかしとおもはるゝ六曲屏風への美人画 余り世人は知らざるものとのことだが 下村先生の春雨にヒントをあたへしものと考へらるゝものにて晩年着手致されしが時間の都合にて黒猫と変更して出品されしとか 若しも此の作完成されをりしなればどんなでありしか 洵にをしまるゝもの也 御子息のせがむに依つて描かれし略画 精細極まりなき美人夕涼等を暮方迄拝見した 何と明せきなる徹するその力と天才 全く凡俗の遠く及ばざるを感ず 山谷から小田急で新宿に出て中村屋に小憩 帰る夜は天明さんが来られ自然春草先生の話が多かった

四月十四日

扇面に蘭を描く 金地であつてこれは小倉同好の氏が小林さんの銀婚記念に贈るのだそうでその為めだ 上田晴風氏の代理とかいふ人が竹の子を持って訪つて来た 小生から送った画と行違ひに出京したとかでその報に接したので不取敢挨拶に来たといふ 南米岳さん¹⁴⁸も死んで今日告別式(十円香料)である 焼香に行く 小山兄と一所になって新宿三越で菓子(二円五十八銭)求め土産として小山兄宅訪問 川上涇君来られてから始めてゝある 幸三郎兄の計ひでけん微鏡を祝に贈る やがて幸三郎兄も来られて一所に南浦園に晚餐に行く 誠志堂のところで別れて小生は帰る 朝子は少し腹工合を悪くしたので臥床 でも大したことではない様だ 弥生は忠哉さんの開店で招かれて行った 小林豊造さんへ鶴の図を送る 武久君午頃来た

144 荻原井泉水(1884-1976)自由律俳句の俳人、俳論家。

145 田村勝弘

146 福羽発三(1890-1962)園芸家、造園家。

147 菱田春草(1874-1911)長野県飯田市出身。初期日本美術院のメンバー。

148 南米岳(1870-1932)表具師、新画商。巽画会の経営にあたる。

四月十五日

扇面蘭の図大野さん宛に送る 木瓜図下図にかゝる さらさ木瓜と紅色木瓜の二種を組合せたもので木瓜二彩とでもいふものである 大塚巧芸社の人が支那土偶の集を持って来た 求める 八代さんが今秋展観の絵を依頼に来る 陶器の絵付も希望したが余戯の程度ではどうも満足がいかない 今日の心境では出来難いので此方は断る 夜は上田君が来る 英国のエプスタイン彫刻家の集を観る 古典的なしっかりしいところがある 多少英国風の常識的なところはあるが幸三郎兄が新内春太夫といふ名古屋の人の演奏を聞かないかといはれるがあいにく二十一日は院の集りがあるので断る 今日とは終日春雨にうるをふ 温度は例にない様な低さだ

四月十六日

木瓜の本紙に着手 大塚巧芸社の人が昨日話したので早速法隆寺壁画集を届けて呉れる 家庭といふ雑誌の表紙を描いて呉れないかと二女性が来る 今の場合断る 夕方別宅の隆一君が自動車にひかれたといふ突発さわぎが持上る だがそれは誤伝でやはり例の眼からくる発作で姉と出掛けて途中での出来事であったのでそんなさわぎとなった 夜は天明さんが来られた 幸三郎兄と楽母別宅姉隆ちゃんの病気の話が多い 春雷始めて聞く

四月十七日

昨日今日も洵にいゝ日和 木瓜の制作の続きである 終日作画に没頭 隆ちゃんのことで田代さんから眼科の大家を紹介してもらふ様岡本¹⁴⁹へ電話をかけて依頼す 桜ももう散り始め花のうてながゑんじ色に美しく春の淡い青空にながめられる 日曜なので子供達は近くへ摘草に出掛けた

四月十八日

木瓜作画連続 戸田栄次氏¹⁵⁰が扇面を依頼旁々以前渡した四十雀のいる山茶花の箱書を兼ねて来た 幸三郎兄が面会して呉れた 山茶花の画は岩田金之助さん¹⁵¹に譲ったそうだが夜は川村良孝君¹⁵²が久闊めで訪つて来た 忽那金子君等と

法隆寺の壁画や支那泥像の写真等を観ながら雑談 宋元名画集第五譜落手 因陀羅の維摩牧溪の遠寺晚鐘玉澗の洞庭秋月なんか墨画の妙の偉らさを味ふ 時雨でいたがとうとう春雨じょうへ^{*}たる趣きになる

四月十九日

木瓜作画連続 午近く岡本あさ正君同道 依頼して置いたので田代さんから石原教授¹⁵³に宛てた紹介状を持って来て呉れる 午食後幸三郎兄と天明さんを誘ひ小金井観桜に出掛ける けふは観桜御会なのでシルクハットの夫人同伴を大分見かける 国分寺タクシーにて小金井堤迄それから漫步 兩岸の花を賞しむさし小金井駅から中野に下車 新井の薬師へ参拝して門前万屋にて晚餐 四名の紅裙を交へる 一時間半位にて帰途廣ずしに寄る 小金井の桜を賞するは数年前よりの宿願 けふ満開を賞すること幸ひなるかな 樹木のみしさは仲々他に比す可きものなからん 水路をはさんで亦趣き深し 町田徳蔵氏¹⁵⁴が投身して一ヶ月后溺死体となってひょう着した記事が出ていたそうだが 幸三郎兄から聞く 意外な出来事である

四月二十日

木瓜図の作画に日了る 午後田口掬汀氏¹⁵⁵宗達作屏風のことに就て来訪 夜は天明さんが来られて味覚のこと等の雑談 戸数割に対する所得の申告書茅ヶ崎牧野宛に出す 日々紙上にて池谷信三郎氏¹⁵⁶が言葉の適確といふことを書いてゐた 洵に同感 吾人は表現の適確といふことを考へねばならない

四月二十一日追補

高橋君夫婦出京 枝垂桜、林間桜花游魚の三点を見る 桜の図がいゝが土坡に難ずべきものあり 桜、魚、両図は自然に對しての認識不足とでもいふ可きか 大分こさへ過ぎてゐるのがいけない 弥は春太夫を飛行館に聞きに行った 弱いが静かないゝ芸であるような

149 岡本英

150 戸田栄次 新画を扱う戸田観美堂を経営。

151 岩田金之助(1884-?)東京の実業家。

152 河村良孝か。(1907-1959)東京出身。1929年再興院展初入選。

153 石原忍(1879-1963)医学者、眼科医。帝大教授。

154 町田徳蔵(?-1931)東京浅草の実業家。

155 田口掬汀(1875-1943)小説家、美術評論家。

156 池谷信三郎(1900-1933)小説家、劇作家。

四月二十一日

木瓜の作の連続 七条さんが幸三郎兄と画室に見える 上田晴風氏から書留が届いたが保留して考へることにする 五時半音楽園に岡倉先生¹⁵⁷帰朝歓迎会に出席する アメリカのミューゼは著じるしく民衆に接する様に組織されて来た 美の神は奥深く入って限られた人の賞玩に止まらなくもっと人間一般に何物かをそれぞれにあたへんものと殿堂は開かれたそこには舞踏映画劇所謂芸術のはんちゅうに置かる可きものをもうらされる そうして幼老を問はず出入洵に何等の垣をもうけない自然さである 西欧建築が安全とはいへ吾人にはかん禁された感じをあたへる ひさかへ日本のそれはかい放的であってそこに芸術の基本は起る 日本の絵は書と握手してる場合も多くそれは描かれた形のみに了るものでなくその形を契機として心にヒントをあたへるものに過ぎない だからその絵の裏にひそむものがかんじんでそれは仲々外人には理解し難いものらしい 多の質疑は形の上に於てのみ起るそうだ 近來彼の行づまりに東洋の研究に没頭し始めた日本も此の際唯々自己陶醉に落ち入っていず彼れからきゅうしゅうすべきで亦世界を一つの体として統一ある調子の或る一ツのものとならなければならない 亦武にのみよって見止められがちな日本は芸術をもって日本の反面を了解させないことは大へんな損失である パリの展らん会の件小松氏の信じ難き等のことにて行なやむ

四月二十二日

木瓜の作画連続 午近くけふは隆一君と帝大に出掛けるので都合を石原教授に問合せ 三度目に漸く午後三時頃来る様との返事を受ける 整形科を右に曲った奥の方に眼科はある相変わらずの患者多数ときたらしいことは予想を裏切らない 刺を通じて約一時間余り待つて教授室にて石原博士と懇談出来る 小生の経過隆一君のも告げて診察を受ける 小生のはやはり且て京都府立にて診断されたる左中心結膜のこんせき右目乱視近視加ふるに神経衰弱性を伴ふものにて成る可く清養を恵らにすること 隆一君のは外側斜視が主なる症状にて発作は他より来るのであるそうでとりあへず精神科三宅鉦一博士¹⁵⁸への紹介状を書いてもらふ そんなことで石原博士の手術し行を約一時間半本郷三丁目角明治製菓にて小憩しながら待つて右紹介状をもらって帝大の門を出たのは六時を過ぎた それから天政へ行つたが河岸の休みに出会ひすぎなく江知勝にて牛鍋の晚餐 庄司先生へ寄ったが不在 別宅和

楽に報告だが隆一君との内約を以て内輪に話する 心配を掛けさせないことに依ってゝある 高橋君夫婦は先程帰ったそうだ 富士大宮市昨夜大火千五百焼失

四月廿三日

別宅兄大坂へ出発前隆一君のことやはり心に掛かると見えて聞きに来た 石本君いでゆの国と椿の枝折の二図を持って来られる 両図とも石本君近頃の工合よきものか 木瓜の作画午迄やって三時合会 パリ展のことに就て美術院へ行く 遂に静観して NRF の意志を見ることにする 安田小林前田小山氏等と味覚で晚餐 明石鯛頭さんしょ焼しゝみ赤汁鯛さしみ野菜つけ合せ等にて歓談 銀座散歩 新橋にて別れる 帰って来たら武久君来訪 カフェの遅き時刻の図の下図を見る 大分面白い やがてシネマを観に行っていた弥帰る不在中上田子行君けし山水等の例の如き作画を置ゐて行った

四月二十四日

大野上田小林氏等に礼状を書く 大野氏へは小林氏祝賀の扇面春蘭図二対して三拾円 上田氏は木瓜小品への五拾円 小林氏へは鶴図に対して五百円 木瓜二彩図新く完成 巾二尺五寸立二尺 越谷君来訪 鯉の写生を持って来た 古染付の鯉を模写さす 七時から日比谷公会堂にて黒田君が戦艦ビナフォア上演 弥と二人で出掛ける案外に盛会 氏の為に歓ぶ 極めて期機を得たる演出ともいふべきものか 歌詞はわからなくてもやっぱり源語の方が自然でありはしないか とうしても模写の境を脱出し得ない しかも余りうまいものではない様だ

四月二十五日

動物園へ鴨の写生に行く 鶴が巢に籠って仲たいゝ やはり鶴は断然王位をしめてゐる 丹頂真那鶴玄鶴姉羽鶴錫鶴オーストラリヤ産鶴 小鳥のところも色彩豊かでな美しい 暮方近く帰る 風が烈しく急雨が一しきりある 黒田謙君へ切符代四円と礼状を出す

四月二十六日

昨日の写生の整理 それから玄鶴図の下図にかゝる 鴨の細部の写生をしたいのであちこち聞合せ結局四ツ木の方から買つて来てもらふ 仲々工合がよい 価は三円二拾銭である 清吉君に大野さんからの三拾円大手町の安田へ取りにいって

157 岡倉由三郎(1868-1936)岡倉覚三の弟、英語学者。

158 三宅鉦一(1876-1954)帝大教授、精神病学。

もらふ 弥は朝子をつれて北原へ行く 葵屋の主土方来る
夜は天明さんも交って雑談 三村儒平氏へ筈の礼状を出す

四月二十七日

隆一君診断の爲め三宅鉦一博士を竹早町に訪問 やはり軽微な
である様に診断 併して投薬のコントロールのこともあり
旁々主治医に一応話しときたいと云ふことで今夕庄司さんと
同行して来る約と為す 庄司さんに帰途依って依頼 それから
別宅で大体話しをして長茶亭に来たら中村豊氏山田さんの
箱書と六月に開催する表展へ出品したいので拙作を希望し
て来る 玄鶴の下図多少改め鴨の写生を夕方迄して三宅さん
の約で庄司先生と出掛ける ルミナールの分量のことを始め
過度の運動過食刺げき性肉食等いけない 塩もいけない
ビールは随分いけない 二十円御礼に渡し帰路しぶや二葉に
て晩食して(七円三十銭)帰ったら隆一耕三両君天明さん等と
けんかの話して十時を過ぎる 弥は朝子と岡本へ登代子久子
二故人の退夜で行って来たそうだ

四月二十八日

動物園へ玄鶴の写生に出掛ける 一時感応寺に杉浦の法要が
あるので参席 次みて目黒雅叙園にてその供養の饗応を挙く
夜は天明さん別宅姉弥等と人間学の雑話に興奮 盗難に会っ
た御物仏像(六朝)一体出頭僧の愛人の家から発見されて博物
館に帰る 鳥類の羽毛の組織は洵に巧な統一された美しいも
のだ スふした自然科学的の観点に立つ美も正にめい想的精
神美に伯仲する 秋葉原に架けられつゝある鉄骨の陸橋も近
代的画材だ

四月二十九日

玄鶴図に着手 佐々岡正民氏来訪 室生行の爲め打合せであ
る 丁度石本さんも来合せ午餐を共に雑談 土井撰美堂へ木
瓜を送ることに定めつ そうして発送の手はづをする 夜は
朝子が天長節祝日で講堂に入るのに泣いたので弥生和子と一
所に遊び行くことが約束で出来ず留宅をしていたので弥と小
林さんの御宅を訪問する 拝借していた釈迦下村先生挿画の
もの御返し旁々 帰路不二屋にて小憩 十時頃帰宅 朝子途
中でねむっていった

四月三十日

玄鶴図の制作連続 市川置手紙して出奔 須賀きよ宛 その

由打電す 幸三郎兄から三百円受取る 小林豊造氏謝儀五百
円の内 のこり二百円は少し待って呉れとのこと 今村未亡
人¹⁵⁹来訪 夜は日々金子君から今夕演奏のシュメー女史¹⁶⁰
のウィオリンの切符を送って呉れたので別宅姉弥と三人で出掛
ける 東京劇場である 峻烈な荘重な宜き芸術である 場中
で金子君亦桑原君とかいふ伊太利大使館の人にも面会 帰途
新富ずしに寄る 市川一久といふ人が桃林の下図を持って来
た 土木の仕事の間に絵をかき度いとかいふ 栗の箱書をと
りに来た清可堂といふ同人会の一人らしい 撰美堂へ木瓜の
図発送す

五月一日

玄鶴図のつゞき 牛田君来訪 久闊めである 市川氏(平塚
の兄)昨日打電に就て来る 根本はどうやら思想問題に因し
てゐる様である 北原三佳夫人来る 夜食を牛田君と共にし
てゐる折柄石本君笹岡さんからのたのまれて中田氏室生に関す
る本を持って来て呉れる 天明さんも来られ科学の話等で十
時頃帰る その間上田子行君来る 相変らずの作品なので一
掃以て苦言を呈す 亦中村鶴心堂氏扶桑花の箱書をとりに来
た 何だかで半日は空しく過ぎた

五月二日

玄鶴図のつゞき 午近く小山、富取両兄来訪 午餐を共に
やがて太田氏天明氏幸三郎兄等も加はる 玉川清次郎君見え
たが話さず帰る 夕方石川宰三郎氏例の作画のことで見え夜
わ三宅君来られ富取君と三人で晚餐 けふも亦半日空しく玄
鶴図為めに捗々しからず 三宅君の談話中魚類はめすが卵子
をまいて行ったあとへをすが精液をかけるのだそうだ 紛失
の六朝仏遂に三体とも発見さる 石川宅と便所中と河中とで

五月三日

玄鶴図に終日没頭 午頃葵屋主人来る 過日発送した木瓜の
図途中で損じたので撰美堂から返送して来た 中央の辺がし
はになって多少はくらくがあつたが仮張りにはって見たらそ
うたいしたこともない様だ 夜は武久君が女絵の写生したもの
を持って来た 大分進歩した 面白くおもふ こてまりが
咲き出す 築山のつゝじ紅紫白樺とリ―の美しさだ 木
蓮も真盛りである もっこくの花が雨だれの様にはら―散
る

159 今村愛

160 ルネ・シュメー(Renée Chemet 1887-1977)フランスのバイオリニスト。

五月四日

玄鶴図それから木瓜の修補 玄鶴図の水の部分仲々工合よく行かない 金子君梅月図と老人の下図とを持って来た デッサンの不備やらこ張されたこと等でびんとこない 勝弘が時計を持って来る 十五円渡す 過般盗難に会って九十円程の損害を受けたそうだ 夜は栖鳳¹⁶¹が鶯に就ての話とシュメー女史のワァキオリンの演奏が放送されるので別宅へ聞きに行く シュメーの技洵に賞す可きものがある しゃもじを中断した形は鶯を表現するこれは秘法であったそうだ

五月五日

玄鶴図引かっていた水の部分洗ってふ 群緑が強過ぎるのだ 線をいれて白緑グの隈にする どうやら完成したとおもふ 内藤といふ絵具屋が来る 五円程求める 田中良助氏が見える 富取鈴木両君のを渡す 無花果美男かつら葉らん等の花の話等して帰る 鳴鶴図下図から本紙の方に移る 玉川のお伯父さんが清次郎君依頼の為め来訪 此の二三日陽気はすっかり青葉に輝き汗ばむ程だ 昨日今日眼がうっとうしい 尚武湯は気持ちいい 昇天祭とかで子供達は休みだ

五月六日

鳴鶴図制作に入る 訪問者がなく為めに終日煩わさるゝこともなく没頭する 別宅姉隆一君の礼に行くといふので弥朝子と共に大井へ出掛ける 鴨を和楽の泉水に浴させる 制作中の動勢よりもっと直立することの強さに気付く 羽ばたきする時である 大分風が烈しく吹く

五月七日

鳴鶴図制作連続 羽根の部分が重くなったので洗ふ 注意してもつひ失敗することである 体の部分がうんと重くならねばならない 土曜日なので弥子供達三人連れて動物園へ行 午後玉川清次郎君来訪 晚餐を共に京都奈良の話しを聞く 仏像等に対する鑑賞余りに間違はない様だ 天明さんも来られる 仏国ゾーメ大統領¹⁶²露人の為め暗殺さる 土井撰美堂宛木瓜図発送す

五月八日

鳴鶴図仕上て了ひたいとおもふのだが仲々捗らないし洗った

りなんかしておもふ壺にはまらない 清吉君に画帖の絹を求めに行ってもらふ 夜は天明さんやら別宅御一統等で雑談 終日雨がしとしと降っている 僅か日ざしを午過ぎに見たが あいにくの日曜だ

五月九日

鳴鶴玄鶴両図の不備なところを修正したと奮闘努めて春花二芳の小品東京会画帖をとにかく描き上げる 小林さんが午前来訪 旅行打合せの為め 亦笹岡さんへやはりそのことで電話す 朝幸三郎兄から二百円小林豊造さんからの五百円の残分もらふ 内藤絵具店白緑雲母を届けてくる 八円五拾銭払ふ 暮方小山君が来る約であったが風邪発熱の為電話で断って来る 春芳堂が緑庭の箱書を兼ね拙作の督促にきた 夜天明さんと楽母別宅姉来る 天明さんの知人で古くから京都三本木丸太町上ル東側東屋(谷川梅三郎)といふ洋食及ホテルの経営をしてゐる人の話しが出る 訪つねても見度いとおもふ 新海さんから和紙数多御恵送を蒙る

五月十日

昨夜田口掬汀氏よりの速達にて宗達と称するを見に来て呉れといふ報に接したので小林さんを早朝訪問 御同行することになり 池袋一時に会する約でその前に中央駅で寝台券を求め上野博物館に周漢時代の銅器類の展覧春陽会の展覧を観る 前者にては正しき力強さに先づ胸を打たれる 亀甲の背紋とか指紋とかの自然科学的な美を感じる 亦怪奇的な味の不可思議さも感じさせられる 后者にては余り感げきすべきものをあたへられなかった 池袋で小林さんに会って椎名町で田口氏の出向ひを待ってゐる間太田可省といふ人に会う 妙なところで変な人に会ふものだとおもふ 田口氏に案内されて同氏宅省吾氏¹⁶³のアトリエにて屏風を拝見する 宗達よりは太分小味なものであるがとにかく特種な作家であるとおもふ 省吾氏にも巴里以来の拝眉である 帰途小山氏の風邪の様子を見による 何んだか明日は行けそうもないようだ 夜は例の市川氏が温泉の画をもって来た 武久忽那両君と雑談 不在中琅玕堂氏¹⁶⁴がきたそうだ 石本さんの夫人も 依頼した鳥籠が出来て来たがどうも不出来だ

161 竹内栖鳳

162 ボール・ドゥメール Joseph Athanasie Paul Doumer (1857-1932)第三共和政第14代大統領

163 田口省吾(1897-1943)掬汀の次男。洋画家。

164 林数之助 新画を扱う琅玕洞を経営。

五月十一日

早朝田中良助氏来訪 玄鶴図を渡す 銀座伊東屋丸善にて旅行の為に必要品を求める 三越にて理髪 帰宅 天明さんが見えてゐて雑談 小山君から電話 やはり風邪で今夜はためだとのこと 八時頃家を出東京駅にて偶然大井岡本大坂より帰る 出向への上野君に面会す やがて小松さんこられる 笹岡さんわざ／＼見送って呉れる 九時卅五分発西下 小林さんと春陽会の話などして十時頃ねることにした

五月十二日

昨夜来の雨だ 食堂にて朝食 八時五分京都着 直ちに奈良行電車にて西大寺にて乗換 奈良着 ホテルに落ち着く 小憩後都跡村に大林氏を訪ねたが不在 西大寺迄車を進めそこから電車にて西ノ京を通り過ぎ九条にて下車 薬師寺までの道をぶら／＼蛙の声やれんげの草等を賞し乍ら歩く 巨大なる光如来三尊の荘麗 東院堂の聖観世音の晴やかな 唐招提寺金堂内の荘観 前者に比して余程体温を覚ゆる 小林さんと此こを訪ねるは何と二十何年月かの久しき過去であることだろう 大分空腹になるで奈良に出て間に合せて三山亭食堂にてすしに一時をしのぎ大仏殿やら手向山等参拝 藤のいまを盛りをめでつゝホテルに帰って来たのは夕方であった 晚餐後ホテルにて雑談 折柄小山君から明朝当地到着の電話に接す 不在中正民さん¹⁶⁵が見へられたそうだ 偉大な芸術はその観る度ごとに偉さが益す

五月十三日

すっかり上天気になる 朝食の折小山笹岡両兄来訪 三月堂博物館拝観 前者に於て吉祥天弁才天始めて拝す 吉祥天女のおすぐれたる尊うし 午食ホテルにて 併して法隆寺に出発(ホテル三十三円強五円祝儀)奈良の平野ドライブにさわやか 法隆寺壁画案外に宜く見得る喜びあり 西方浄土十一面特に感ず 百済観音四天王亦夢殿観音依然として傑れたり 中宮寺に観音を拝し之亦益々親しく我が胸に逼る 新法隆寺から平端八木を経て榛原に下車 笹岡氏本邸に落ち着いたのは八時を過ぎてゐた 半月中空にかゝり此の旅行に余情を加ふ 笹岡氏御一統の御かん待と風雅の御住ひとはいれしく感謝に堪えない

五月十四日

戒長寺秘仏拝観の為に同山約十八町登る 薄曇りの日和 スミレ等の春の花余情多し 笹岡家にて午餐後長谷寺参拝 折柄牡丹見頃 廻廊大講堂の前裁洵に美観 像其他宝物余り見る可きもの少し 帰途室生口に出て大野の石仏拝観す 周囲の風光と相俟ちて想像以上の感化 小憩後暮靄逼るうち山辺 笹岡家に帰着 入浴後晚餐 雑談に十時近し けふは大分つかれる 亦ねむい 戒長寺秘仏温雅な藤原仏である 薬師如来 大野石仏 天長時代みろく菩薩 戒長寺の和尚の温容亦気持よくおもふ 老松白ありの為に枯れそれを木こりが伐つて居た

五月十五日

八時半山部出発いよ／＼室生寺訪で 清流にそひ美しき杉木立ちの山道をドライブ 大野石仏に亦一べつ 十時近く室生寺客殿に落ち着く 先般来滞留の石本君に面会 住職荒木良仙師¹⁶⁶の案内にて一山の堂塔宝物拝観 午食後金堂内にこもりて光背の模写 次いでみろく堂(光明堂)にてみろくの尊像を写生 薄暮逼る迄やる 入浴後晚餐 月光麗はしき景観を味ひ就眠 石楠花を一昨年此のかた境内に移し植へたのが今真盛りである 金堂内中央釈迦如来及び右端地藏の光背 壁画帝釈天まんだら豊かなる色彩寔に美し みろくの尊像亦感銘深し

五月十六日

三時半打鐘にて起床 護摩堂にて護摩の修法を拝す 併して奥の院に大師像秘仏を良仙師の案内にて拝観 念珠読経裡にてある 朝陽の景観清々しく一山の趣き亦一だんである 朝食後みろく堂に入り尊像の拝写にふける 小山君は石本君と良仙氏の案内にて龍屈とかを見物に行 小林さんは金堂内にこもる 午食後大師将来とか鈴 とっこ等の宝具を観る 次いで再び堂内にこもり三時いよ／＼室生を出発 山部笹岡家へ帰着 室生寺に於ける歓待いゝつくせず 犬養首相陸海幼年生に暗殺さる

五月十七日

山部笹岡家出発 京都に向ふ 榛原より大軌にて八木、西大寺にて乗換へ京都に一時近く着く 森田さん¹⁶⁷へ電話を掛け来てもらふ そうして安井杉田に落ち着く 午食を新三浦に

165 笹岡正民 実家のある奈良旅行に招待した。

166 荒木良仙(1879-1947)室生寺住職。

167 森田甚造 御舟は1922年3月に京都の森田家に寄寓している。

水だきを食べる それから新門前の堀といふ古道具商のクドを見物 明治二年建てたといふもの 智恩院から高台寺を経て杉田に帰る 正民君の歓迎の意を以て二三紅裙を交ゆ 美しい月が東山に眺められる

五月十八日

森田さんをリーダアとして神護寺広隆寺の二寺拝観 前者にては金堂の薬師五大虚空の弘仁独特なる力とやはらかさとの組合されたる味 后者にては例の如意輪のかん素大いに感激す 富田さん¹⁶⁸を訪つねるので小山石本両君にわかれ同氏を訪つねる 金島¹⁶⁹神崎¹⁷⁰両氏先きにあり 暫らく雑話 やがて両氏森田氏は帰る それから富田さんの御心ざしにて岡崎つるやに晚餐 土井撰美堂をその後たづね同氏の作品拝見する 烏丸にて同氏にわかれ小林さんと宿にかへる 石本森田両君は鴨川をどり 小山君は田中の親類を訪門に出掛けた 笹岡さんは朝出発された 不在中西村さんがたづねて来たそう だ 午餐は太秦日活食堂のランチ 高尾の新緑藤の花の盛りは喜びをそへる 如意輪の手の美しさは何んといふのだろう 薬師の重さは亦弘仁の尊さだ

五月十九日

森田さんを先達にて小林小山石本三兄都合五名にて穴太(アノー)の盛安寺に朝がほの襖画を観る 坂本のそばやにて午がはりのそばをきし西教寺を訪つねる 約十四五丁の道のり そうして天台の本山であり仲々の大寺也 柿柚の屏風を主にしたれど更って時雨の屏風よくその他恵心のまんだらがアンゼリコをおもはする ■作 大黒天白に腰をかけた一寸珍らしきもの等 亦桃山殿にて猿猴の調子よさと利休の茶席窓なんかに面白かったがともかく総じて感じるもの少し 夜は土井撰美堂¹⁷¹に木屋町大津やに招かれたので小林さんに出掛ける そこで同氏父子富田氏面会 十時十四分発上列車にのるのでわかれたが駅に来てゐるはづの小山石本森田氏等 見へず 結句十一時三十分のに変え けふは何かとつけ悪し 糸り万で糸り一ツ求める(十円) 亀末廣で菓子四円求める 森田さんの家を訪問 出発のときは始末はいよいよ次で有終の美だ

五月廿日

横はまで小林さんと別れる 品川のりかへ目黒に十時過ぎ着く 幸ひ雨も晴れる 朝子をつれて弥学校から帰って来た 午食後子供達への土産物を求め旁々田端へ行く 日比谷美松で文房等求めた 田端ではおたけさんの案外元気な顔を見たので洵にいゝとおもふ 子供達も皆健やかなうでいゝ 夕方かえって来たら弥生和子も学校を了へて帰って来て土産の文房具をそれへ¹⁷² 欣ぶ 夜は和楽母や天明さんが見えて旅行の話が多い ちよっと大きい地震があった それと風が烈しい日である

五月廿一日

幸三郎兄と長茶亭に旅行の話をする 田中良助氏より画帖に就て再度電話 画室に入り室生の写生の手入れ 画帖のかわせみの下図 武久君子供達の勉強を見る人のことで来る 小山君石本君来る 天明さんも来て旅行の話した 武久君早速先程の話して天野といふ人をつれて来た もようしてゐるが遂に雨となる

五月廿二日

かわせみ図の作画二終日をわれる 群青が止まらないのでフォルマリンを塗る 工合はよい様だ 将来何か変化さゑ起きなければいゝ都合である 東京会を觀て来たとして天明さんが夜やって来る

五月廿三日

かわせみ図ともかく仕上げて了ふ そうして清吉君に会場へ届けさせる 春花二芳はやめにしてゐる 鳥籠のことで金網屋に文句を曰ってやる 笑話があった 午後小茂田君を暫らく振りで見舞ふ どうも直感した工合は余りいゝ様におもわれない 大分疲労してゐられる様だ 丁度齋藤¹⁷²さんが院を代表して見舞に来られる 一所に帰る 横山先生は写生はその時直ちに用ゆ可きでないといはれてるそう だ 大変いゝ言葉である こんな話が車中であつた 六時に大森で出会 小山君との約があるので直ちに行く 丁度定刻に遭ふ そうして小林さんを訪問 石本さんも亦来合せ十時迄話をする 肖像画のよさ 劉生氏¹⁷³の村娘等の話しなんか出た 画に就

168 富田溪仙

169 金島桂華(1892-1974)京都の日本画家。

170 神崎憲一(1889-1954)美術評論家。『塔影』美術顧問。

171 土井久吉

172 齋藤隆三(1875-1961)史学者。日本美術院の運営に携わる。

173 岸田劉生(1891-1929)洋画家。

の意見がはづむ

五月廿四日

旅行写生の手入れと旅行中世話になったところへ出す礼状で日を了へてしまった 午頃中村鶴心堂君が鯉魚及び百合の二幅箱書に來た 夕方高谷氏の代理の人が督促に來たが今回は断はる 森田さんから高尾で撮った写真を送ってきて呉れた

五月廿五日

笹岡さんを訪問 此度の旅行に就ての礼を述べ 動物園へ行って小禽室に於て赤啄木を写生する 三時清吉君が届けて呉れる(次郎さん¹⁷⁴へ見舞の為めの鳥) 約があるので出る出口で受取る 上野から日暮里乗換で市川真間下車 折よく在宅 亦夫人も殆んど全快の様 晚餐のもてなしを受けて九時辞す 約一時間強目黒迄要す 折々しゅう雨あれど幸ひぬれずにすむ 不在中石本さん來訪せりと

五月廿六日

吉住一郎氏來訪 啄木の小下図を工風 塔影社の人が話を聞きにくる 柏の木の写生牛山邸にてする 夜は大智さん小山さん見える 土屋さんからくれたといふ墨を持って來られる 風が烈しい日である

五月廿七日

赤啄木と柏の下図から本紙にかゝる 鳥の子紙三尺巾一尺七寸竪である アトリエ社北原氏画帖を持って采々会に就ての礼の為めである 同氏は趣味と事業と家庭との三ツ調和させることは仲々至難な事であるといわれる 同感す可きことであるとおもふ 角谷さんが今秋展覧に就て本宅へ來たと幸三郎兄が午頃來て話される 夜は清元会に和楽母に同行 出掛ける やはり延寿の神田祭はいゝ 声量もたしかでありいつもの長引かせるへきが今夜は少い 前田御夫妻¹⁷⁵に會ふ 亦角谷氏にも會ふ 延寿に會はないかと日はれたが辞す 廣ずしに立寄り十時頃帰宅

五月廿八日

赤啄木柏の作画連続 漸く色といふものに対して觀念が出來て來た様だ 自然そのまゝの色ではない絵画の持つところの特種な色であらねばならない 斯ふいふ理解は数年前から

解つてゐるはずであるが實際に用ひられて來るのは近頃であるといつてもいゝのだ 過程といふものは随分長いものだ 桜井君が三越展覧は八日になったのでどうしても制作して呉れとのことだ 夜は天明さんが來て雑談のあげく弥に散歩の価値をとく 明日から多少にてもやることにする 川端さん¹⁷⁶から第二回個展の図録を送ってくれた

五月廿九日

赤啄木と柏図作画の連続 暮方小笠原君來訪 山内家所有の杏所の西園雅集、袋田の滝の二図の写真を見る 杏所代表作であろう 枝牡丹光長作等のものも持って來た 武久勇三君が亦例の教師のことで來る ともかく使つて見て呉れとのことである 笹岡さんから記念撮影を送つて來る

五月卅日

赤啄木の作画 午近く松本直三君子供を連れて來た 安田さんの方が病氣の為めやめになつて困るのであげ物やを始めたといつてもつて來て呉れる おろくも子供をつれて來た 丁度しばらくやらないので活動を映写して見せる 夕方清次郎君來る ばら等花を持って來てくれた 夜は忽那君を勉れいする 幸三郎兄が來て雑談 溪仙龍子両画集等見ながら 弥生朝子齒を治療に行つたそうだ

五月卅一日

赤啄木の図あらまし完成する 次ゐで飛鴨の下図を始める 太田さんから紅梅白梅図に対する謝儀(八百円)幸三郎兄が持つて來て呉れる 大塚巧芸社の人が土偶の第二集を届けて來た(七円支払ふ) 夜武久君が家庭教師にと日ふ人に就て(司馬とかいふ)話しに來る 幸三郎兄天明さんが小茂田君黒田君訪問して來たと立寄る けふは大変工合がよかつたそう だ 坂本さんが量を洗ひに來た 多少きれになつた様におもふ

六月一日

赤啄木の柏の部分に不満在 手を入れる 大雨烈しき中に日香園、大庭花店で菖蒲(初霜と万龍)四十銭程求める 安価に意外の感あり 午後は此の写生にする 高橋君出京 今迄の作品約十五点展べて幸三郎と撰ぶ 結句八点を獲 同君妻君どうもつはりらしいとしよげてゐた 晩食後歸る 別宅隆一

174 富取風堂

175 前田青都

176 川端龍子(1885-1966)1917年日本美術院同人。1928年脱退し、翌年青龍社創立。

君猩紅熱と疑ひがあり伝研に入院 重ね―のことだ 夜は幸三郎兄別宅兄天明さん等で雑談 鴨の下図は後に譲 一時中止する

六月二日

赤啄木完成する 中村鶴心堂来訪 同図を渡す 表展出品さるゝそうだ(巾二尺九寸立一尺七寸六分) 花菖蒲の下図 巾一尺三寸立四尺(鳥の子紙)にかゝる 幸三郎兄が松島¹⁷⁷が来て今秋十月の展観に出品を希望してる由曰はれる 夜は武久君が例の勉強を見てくれる人を連れて来た 今度はいゝ様におもふ 司馬といふ人である

六月三日

あやめの本紙にかゝる 葵屋主人来る 六月分廿五円渡す 弥子供達三人を連れて帽子求め旁々三越に理髪に出掛ける 夜石本さん室生寺図巻の小下図を持って来られる 天明さん見える 別宅の姉が隆一君の小便が出ないので心配そうである けふは梅雨をおもわす様ないやにじめ―^{*}した日である

六月四日

はなあやめ図うまくゆかず遂に描き改めることにする 朝子が漸く一人で教室に入ってる様になったそうだ けふは少し元気が帰って来た時よりないので体温を見たら三十八度程あるそうで庄司先生に見てもらふ どうも風邪であるらしい 和楽の母も胃を悪くしてねてしもふ 夜は中村さん¹⁷⁸が小林さんの蓮の図を持て立寄って呉れる 天明さん幸三郎兄等と廣ずして快談 食用蛙が例の池で泣き出した たえたとおもってゐたものが繁殖の力の偉さをおもふ

六月五日

三越の期日逼るので花あやめ改作の為め未明に起きて始める じめ―^{*}した梅雨日和でどうもかわきが悪いので困る 午後小林さんが見える 小茂田君を見舞つての帰りでえられる そうだ 晚餐を一所に雑談 天明さんも来合せる 朝子も大分快くなって来た

六月六日

花あやめけふ迄の約束であるので大に早朝より努め暮方桜

井君数時待たせたがともかく仕上げる 尺三巾四尺で紙本鳥の子紙である 大磯からの帰途であるとかで安田さんの朝がほ尺巾を持ってゐた 洵に気のきいた小品である 琅玕堂主今秋山と水に因む展観を為すとか依頼に来られる 夜は糸井君若柳君天明さん等見へる 終日梅雨気分で絵具はかはかぬ 編物の小下図多少ひねくる おうむを配そうかと工風する けふは朝子がシスターにほめられたとか洵に元気に喜こんでゐる

六月七日

法隆寺壁画や滞欧中の名画写真集くり返し見る 花あやめ大色紙に描き出した 亦そのかたわら編物に小下図を工風 立図を横図にして見る 糸井君宗達画集を見て帰る 少し風邪気味であったがどうも工合が悪いので熱を計ったら七度一分追々昇って八度五分になった

六月八日

熱が七度代を往来してゐるので臥床 葵屋主人天明さん来訪 芝居の階段のこと等の話し 夜は金子丈平君に奮れいをうながす 終日無為に了る 玉川の伯母さんが亦清次郎君のことで午頃来た 小林さんが午後九時過ぎ院同人加増問題でこられ十一時頃かへらる

六月九日

其一日静養する 天明さんが来て釣の話がある 出口氏からびやくだんを送って呉れる 夜はあんまををにとって静養を助ける 院の川崎屋に於ける会不参

六月十日

花あやめ色紙やりかけたところへ小山君来る 解防図の青写真昨夜院の会合のとき石井さん¹⁷⁹から事伝つたとの由 昨年末依頼してあったものである(五十五銭) 午食後三共美の批判社展と三越展を観る 丸善で洋書等べつ見して文房堂で色鉛筆を求める 四十八色で九円 大分騰貴した 小茂田君を見舞ふ(面会はしないで) 帰途三徳に晚餐 界わい見物して新宿駅に小山君と別れ帰る 十時半頃になったった

六月十一日

花あやめの色紙や太田さんからの紅梅白梅双幅の箱書 倭雛

177 松島勝之助(1893-1973)新画を扱う松島画舫を経営。

178 中村豊

179 石井鶴三(1887-1973)彫刻家、洋画家。

(正五郎君のもの)の箱書をする 午後一時神宮プールに於けるオリンピック準決勝の水泳競技を幸三郎兄に誘はれて観に行く 清川¹⁸⁰の背泳 小池¹⁸¹の平泳 千五百の北村¹⁸² 二百の大横田¹⁸³ 横山¹⁸⁴印象深し 新宿中村屋に晩餐後別れて紀の国屋にて科学人体(参丹)を求め階上の映画研究会展べつ見して帰ったら小笠原君来て居て何んだかだと雑話 十時半頃 帰る 弥は子供達と学校のバザーへ行ったそうであった

六月十二日

殆んど一日弥にも座ってもらったりして編物の小下図を練ることに了る 紅梅白梅図箱書済 太田さんへ金子君に届けさす 梅花馥郁とした 富取君が午後來る 太郎さんの自動車にての怪私も幸ひ僅かで最早全快された程だ 春の試作に対する私見をもらし奮起をうながす 晚餐を共に天明さんも見えて幼稚の社会観を戦はす 小林さんから手紙があって同人問題もどうやらいゝ加減らしく光明がうすると歎せられてゐる 赤万が再び始めた通知を受けた

六月十三日

紫陽花の青い花や蕾 枇杷の果の青い色等初夏の美しさだ
午前中多少小下図を練る 漸くはなれの白い犬を配することに決めその写生をする 子供を腹に持ってゐるので余程ものうらしい 田中良助氏和楽へ来たので行く 今回は大分景気が悪く拙画も行なやんでゐるとか それでともかくといふので三百五十円 それと画帖の三十五円の謝儀を受ける 恐縮だ その内幸三郎兄へ百六十九円八十一銭御立替分をかへす 小笠原君例の調査書を持って来て呉れたのは、が長時間応接 すっかり閉口した ジオット等の写真を観たりはしたが 夜天明さん泰山木の花を呉れる いゝ香りだし美しい立派なものだ 清吉の下図武久君も下図を持 came 清吉のはビール会社の風景で才分在 一日とりとめもなく了ってしまった

六月十四日

泰山山の写生 その間々に小下図を練る 入江といふ美の国
の人が作画に就例の如く督促に来た 夜食後大森に小林さん
を訪つねる 十時頃迄同人推挙に就て相変らず院のいんじゅ
んなる悪風を難ずる 打開するには非常な結果を予想しなけ
ればならない 自然を待つか 朝子のカバンがないといって
大さはぎをしてゐる かへって来たらば

六月十五日

昨日同様の仕事だ 仲といふ人がその息子さんが絵画志望に就て来られたので和楽へ行く 三越桜井氏花あやめの礼に金三百円持って来た 亦久し振りに関岡美堂氏が紅梅の図に対する礼に來られ金貳百五十円也拝受 石本さんが來られ幸三郎兄と雑話 何だか生計整理に関しての話であった 夜は別宅の兄が来て新宿の松屋の話をして行く セザンヌの画集を久方目にひろげる やっぱり偉いなおもふ 前にそれ程に考へなかったものも偉くなって来る こうなるとセザンヌの以後にそれを超ゆる偉さを持つものがあるだろうかとおもふ

六月十六日

自由ヶ丘へるの写生に出掛ける 病鳥で尾はなく見る影もないがとまかく写生する よくなれてゐるので手にとって写す たまへとび出し猫にかまれてしまふ 今迄鳴いてゐたのにかはいそうなことをしてゐた 死だあとの鳥籠は寂しめるものだ 猫が子を四ひきかゝえてゐたのを写生したりして美術院の会議に五時迄に出席する 投票議論の結果奥村¹⁸⁵、溝上¹⁸⁶、田中¹⁸⁷の三氏を推す まあ無事波平らだ 何のこともない 新人起用を提唱したがまだへだ 時代はかんまんにしか動かなる 奥村十六対四 溝上十五、五 田中十四、六 小川千¹⁸⁸六、十四 村田¹⁸⁹、、 高橋¹⁹⁰、、 四田¹⁹¹五対十五 中村貞¹⁹²三、十七

180 清川正二(1913-1999)

181 小池禮三(1919-1998)

182 北村久寿雄(1917-1996)

183 大横田勉(1913-1970)

184 横山隆志(1913-1945)

185 奥村土牛

186 溝上遊亀(1895-2000)小倉遊亀。滋賀県出身。安田靫彦に師事。1932年日本美術院同人。

187 田中青坪(1903-1994)群馬県出身。1932年日本美術院同人。

188 小川千甕(1882-1971)京都出身。1921年再興院展日本畫面部初入選。

189 村田泥牛

190 高橋周桑

191 四田観水(1892-1983)愛媛県出身。大智勝観に師事。1925年日本美術院院友。

192 中村貞以(1906-1982)大阪出身。1924年日本美術院院友。

六月十七日

枇杷の写生を色鉛筆で試みる 葵屋主人来たので母法要の手はづをする 昨日木村さんに依頼してもらった紙のことで中田氏の代理森といふ人が見える 神宮紙の五尺五寸七尺五寸のを持って来て呉れたがどうさがない方なので改めて持って来て呉れる約をする 小山君が昨日の約束で来て共に馬込の画室に小林さんを訪問 タービー集や夢殿 東院堂等の大写真等拝見する しょう略といふことは最もよく知ることである そばの御もてなしを受ける あいにく降り出す 九時頃御いとまをする

六月十八日

動物園にるりを見に行ったが余りよくもなく見にくるところにあるので写生出来ない 一巡して松坂屋に来たがここには小禽部はなし 理髪をして地下鉄にて三越に出そこの小鳥部にて一羽求める 価三円也 友禅展一べつ 池の端伊せ梅横山先生主催金子君¹⁹³札幌ボロ栄転別会列席 十時過ぎ散会 芸者家内幕 三度の食事も沢庵ですませることやひすめの借料一日四十円だとか全部の人の夜着のないことや様々裏の話を聞く 朝のうち奥村さん同人になったので挨拶に見える 神宮紙森氏が届けて呉れる 神宮紙巾五尺五寸立七尺五寸ドーサ引十円にして呉れる 小下図用の方は一枚三円

六月十九日

弥に裸になってもらって写生 午近くり三越より届く 写生して枇杷に排した図を仕上げる 二尺五寸巾一尺六寸立の横物 市川さんのソースの方の兄夜着等引とりに来る 未だ居所不明であるそ一だ 夜は益之助君見えて偶然夜食を共にする めづらしく長茶亭に出かけて忽那君等と交話 幸三郎兄も帰って来たので十時過ぎになる 月が洵に美しく上空に在 星ヶ岡から日本名画鑑届く

六月廿日

高橋君が妻君が喉頭結核の疑があるとかしゅしょうとしてやって来る 何にしても庄司さんに相談して所致するより仕方があるまい 尚今秋院の小下図銀座と舞踊の二図を持参した 銀座をいく段かに別ちて工風されたら 此の場合内憂外患共に到れども奮起致さざればと大いにうながす 昨日のる

りどうしたのか死んで了った 仕方がないので写生をしさいにする 玉川清次郎君テッセンと野茨の図を持ってきたので批評する 弥裸体になってもらって写生のつぎに半日を過ごす 夜は西島さんが扇子店 自画像 滞船等の小下図持参 扇子店を作ることを進める 弥次郎さん¹⁹⁴があす検査とかでとまる 飛鳥園に百済観音の写真を註文する 拾円小為替で送る

六月廿一日

弥次郎君の検査なので早起起床 編物の小下図に殆んど一日を過ごす 正しきデッサンなかる可らずといふことを痛切に感じる 武久君夜分例のカフェーの下図持参に及ぶ 朝早かったので大分ねむい 弥二郎君は丙種免除であったそうだ

六月廿二日

枇杷るり本紙に木炭にてあたる 小山さんが見えて個展作品十点程展べて見せてもらふ 幸三郎も共に 清水眞輔¹⁹⁵氏来訪 今期はやめて今秋に作画することを約す 院小下図を繰りひろげて見ると未だまた不備だ ギリシャの彫刻の標準の正しさには敬伏させられる 夜は天明さんが見えて金子君とセザンヌを賞す 金子君には大いに奮起することを望む

六月廿三日

枇杷るり線描きを始めた 院出品小下図どうも構図になやみ暮方迄没入 勿々に自由ヶ丘へ亡母の退夜に出掛ける 先きに行ってる弥朝子等と持って行ったり鍋で晚餐 大沢、岡本あさやがて来会す 百済観音飛鳥園より届く

六月廿四日

枇杷るり色彩にかゝる けふは亡母¹⁹⁶十三回忌に相当 午にて切上げ烏山に出掛ける 母葵屋主人弥朝子とタクシー(二元)にて一時半頃寺に着之 来会者は岡本夫妻正 杉浦母北原三佳、岡本たけの 北原子供三人 丁度輝子御骨埋葬となす 晩食辰光軒(二拾六円五拾銭)にて九時散会 御前さしつかへありて山田和尚法要をつとめてくれる

六月二十五日

枇杷るり図色彩の続き かたわら院小下図に工風をこらす

193 金子義男 日日新聞記者

194 吉田弥次郎 弥の長姉八重の次男。

195 清水眞輔(1884-1942)大阪三越美術部長。

196 蒔田いと(?-1920)実母。

堀田夫人¹⁹⁷菊一郎君をつれて来られる 葵屋主人来て法要の
計算を為す 七日分三十五円その折渡す 横尾君久しぶりで
やって来た 元気である 夜天明さんが茅ヶ崎にせん風が
あったとて知らせに来てくれる 幸三郎兄小山兄の帰途寄る
別宅の兄がけんとうを見て来たそうでそんなことが話題に多い
午前中戸田栄次氏が扇面の督促旁々来たので長茶亭へ行く
金子丈平君の作品自画像 ばら 風景 水門 下田を見る
ばら特にいっ 田屋へ帽子谷沢ヘカバン修繕 金子氏へ
反物を届ける 清吉君に行ってもらふ シャムに革命在

六月廿六日

枇杷るりの制作 富取君来訪 シャモの小下図を持って来られる
中川真作といふ日曜夕刊主事寄附かん誘に来たが断はる
石山太柏氏夜分来る 帝大眼科石原博士を同氏も知って
ゐるとのこと 知合といふものはどこにあるかわからないものだ
小茂田君の病氣主治医藤本といふ人によく聞いてもらふ
ことを約す けふは何となく重苦しい日だ

六月廿七日

枇杷るり午前中制作 午食後田代さんへ過日の礼に伺ふ 弥
と森八に寄って長生殿を求め春花二芳図に添へて暫時雑談
二時三十分表展にて幸三郎兄に遇ふ約あり辞して弥と途中に
て別れ会場にて中村豊氏と幸三郎と会し一巡 共に黒田研
究所の近代洋画展に行く 矢代氏¹⁹⁸始め和田御夫妻にも遇ふ
セザンヌの傑れたること ピカソの裸婦ルノアールの小品裸
婦背を見せてゐるもの風景の重さ ゴーギャンの牛かひ等印
象深し セザンヌの水彩はうまいなおもふ 三越に出て洋
行展を觀て吾々の渡伊の感じは明治初年の頃の様な遅れた
程度だと失笑する 岩倉公¹⁹⁹の手帳にテーブルだとかフィッ
シュだとか短語が書かれてゐてのを見ると ルノアールは感
情ピカソは理智セザンヌは両つを具備したようにおもわれる
石山さんが不在中に昨日の返事に来訪したそうだ 軽微だが
やっぱり結核性である由 半田君が小下図婦女の図を持って
来られた 面白くおもふ

六月廿八日

枇杷るり図完成 院出品小下図から大下図にかゝる 巾三尺
堅約五尺 高橋君片山から出京 銀座図巻小下図持参 大分
まとまって来た様におもふ 妻君病床にあること故夕方かへ

る 弥は清元会へ和楽母と出掛ける 隆一君退院

六月廿九日

院出品下図 午后石原博士へ過般の礼に伺ふ(鍋屋横丁下車)
銀座に出て伊東屋にてコンパス等求め帰って来たらば村田、
武久横尾三君来訪 幸三郎兄も帰って来て遅く迄雑話 紀の
国銀座支店でモチリアニを觀た 今迄此作家には余り感じて
ゐなかったが仲々いゝところを感じさせられた 石原博士へ
の礼は花あやめ図大色紙と長生殿一折である

六月卅日

終日下図に没頭 横尾君小茂田君へ見舞に行く 亦幸三郎兄
も午後行かれた 大分快方に向つてゐるそうである 幸也
正しき源に還つて独自なる表現の生るゝことは仲々ようゐな
ことではない 健康なる芸術 世紀末な芸術に落ち入つては
ならない 太陽にまともに向ふことの出来るエジプトの芸術
ギリシャの精神

七月一日

石本さんかあやめの図の批評を乞ふ 小山君犬の小下図で
持つ来旁々ぢゅうたんを模写に来た 午後は院の下図に没頭
夜は忽那、金子、角田、越谷君等と座談 前(ママ：毎)月一
日十五日には此のもようしを例としたい 人間的な基本精神
を以て晴やかな健康芸術を創作したい 大変な大雨である

七月二日

午前中は院下図にかゝり午后二時卅分上野発で金子義男君が
札幌へ赴任するのを見送る 横山先生や大智、齋藤、黒田
氏等に会す 本郷三丁目に出て解防の本をあさったがどうも
適したものが見つからない 松坂屋に寄り御徒町で偶然幸三
郎兄に会す 夜食頃市川さんの兄来訪 亀井戸の託児所に本
人はいらるゝそうだ とにかく居所だけはわかった けふは
馬鹿につかれた

七月三日

院出品下図に終日没頭 卓子を配することに工風す 夜天明
さんが自書の芭蕉の奥の細道数種を持ってこられて見せて呉
れる 天気は晴れ 漸く真夏に近づくをおもはせる

197 堀田家寿

198 矢代幸雄(1890-1975)美術史家。

199 岩倉具視(1825-1883)公家。政治家。

七月四日

院下図構成に苦心 どうも思った様にゆかなる 夜は大智さん幸三郎兄石本さんと赤坂桔梗にて会を催うし義理をはたす

七月五日

下図の工風に過ごす 幸三郎兄昨夜の費用分前三十円渡す 松本直蔵氏やって来たので療治をしてもらふ 西島さんが扇店の下図を持って来た 入江といふ美の国の人が来たが治療中面会せず 石川氏に七日頃来てもらふ事伝をする

七月六日

院下図描き改める 終日 夜頭蓋骨図を写す 別宅夫妻和楽母天明さん等見える

七月七日

院の下図の続き 椅子との構成稍まとまる 長茶亭へ椅子の脚部を写生に行く旁々忽那君の絵(下図ひのき)を批す 七夕なので天明さんが色紙を竹に着けに來られる 七夕にことよせてよむこひの歌の一句を作る 夜石川美の国主事來訪 琵琶り図渡す 葵屋主人も来た

七月八日

院下図連続 楕円形を隆一君に教はる 武久君塔影に写生の掲載を了解することをたのまれて来た 夜は解ぼう図記録す 弥と楕円形の工風をする

七月九日

院下図に就て手の部分弥にモデルになってもらって写生す 午頃黒田君来る 蛇が山羊をのむ実感の話等を聞く 関氏夫人子供同伴中元にハンケチを持って来て呉れる 塔影掲載のため大塚巧芸社の人が室生寺の写生の撮影に來る 夜はグリヤを求めに白金へ散歩がてら弥と行く 帰途東横食堂でピールの一ぱいにかつをうるほす 正ちゃんが由良さんと来てゐた □□□□□□□□□□ □□□□□□□

七月十日

グリヤの写生 玉川の伯母さん清次郎君と見える 兵隊第二乙種である由 落日の作品を持って來られた 大分宜い 午

后三時二十分から開演の歌舞伎へ少し遅れて出掛ける 別宅夫妻和楽母弥は先きに行った 信玄仁愛明珍の芸術良心を組立た額田六福²⁰⁰の作 綺堂²⁰¹の虚無僧 弓矢太郎の猿の助²⁰²の踊 忠次の反逆に落ちて行く心境の推移 眞山青果²⁰³作 十一時迄観る 案外によく見てゐられるとおもふ コロンバンに立寄って小憩 帰る 西島さんが不在中中元に來た由

七月十一日

院下図 犬の写生益之助君から借りて来てやる コロンビヤ蓄音器届いて来る 五十円の品(特に三十五円) 夜はそれを中心に幸三郎兄始め母別宅一同益之助君正五郎君等で賑ふ 西島さんが話しに來る 今朝は子供達勉強をする方法として五時前起床 大分ねむくなる

七月十二日

椅子等検べに松屋へ出掛ける 石本さんに偶然会す 三越に廻ってやはり家具部や亦一階ホールにて着物の色合等を検べる 小山君を訪つね朱を研究 大智さん同氏と訪問 先日の割前十七円六十二銭受取る 帰って来たら川上さん²⁰⁴が見えて天明さん小生と行違ひに小山君を幸三郎が訪つねたので同氏と共に皆で雑話 金子君のゆづり葉にふくろの下図を評す 武久君の妻君が見えた由 おろくも子供を連れて來た いやに暑くなって來た 小山君の舎弟氏のところにある朱はとても安いので放光堂や製朱座等のと比べて見たが余り違はない様だ 価値は比かくにならない 二両目で参十銭とは

七月十三日

午前中下図 川上さんが見えてゐるので午食は共に雑談 午後はモデルの写生に費す 盆であるので和楽の待合の前にて例年の如くお向ひ火を焚く 植木屋さんが庭の手入れに來た 白百合が昨日は一輪開花であつたが今日は数輪開花 庭中香ばし 随分蒸暑く夕方遠雷を聞く

七月十四日

院下図写し直す 長谷井氏の御紹介にて弥生の勉強を観て呉れる目黒学校の先生が来る 沼袋の近きに御住ひなさるそうだ 二十一日休校を待って午前中に来て呉れることになる 高窪さんが中元に來た 夜は天明さんが見えて芸術上の話し

200 額田六福(1890-1948)劇作家・大衆小説作家。

201 岡本綺堂(1872-1939)劇作家・小説家。

202 二代目市川猿之助(1888-1963)。初代市川猿翁。

203 眞山青果(1878-1948)劇作家・小説家。

204 川上五郎

に費す おろくは夕方帰ったあぢさゐの花が夜の暗にくっきりと美しい

七月十五日

院下図漸く終に近づく 高橋君銀座図巻二面持って来上 川上さんが昨夜観て来た御船師範の柔道護身の話をする 敵の剣を愛するの一語敬ふべき言葉なり 夜は十五日会例会 五時半開催 小生一時間十五分モデルになって顔部分の写生をさせる 丁度来合せた高橋君忽那角田金子吉田越谷西島七君外川上天明両氏も加はり特に機械美主義等話しが中心であった 帰って来た幸三郎兄も加はる 十時卅分散会 夕刻大雨甚だし

七月十六日

終日院下図に在る 高橋君片山に晩食後帰る 天明さん昨日の座談会の記録をして持って来て呉れる 金子丈平君枇杷の下図を持って来て批評を乞ふ 今日御送り火である 折々雨 涼し過ぎる気温

七月十七日

院下図不備な点を検べる 百合が余りに美しく立派であるので写生をする 山田直造さんが中元にわざ／＼^{*}来られる 夜青木の赤ちゃん²⁰⁵が自由ヶ丘の帰途だとして寄る 例の話しの繰返へしであるが稍了解に近づて来た 弥は公会堂の長唄の会へ行った

七月十八日

院下図 手の部分に引かゝる 終日過ごす 葵屋主人煙草仕入れ金不足に就て来たが弥が芝居へ出掛けたあとでわからない 天明さん益の助君夜来て東京過去の姿を懐古する 小茂田君から大分快方に向ってゐるといふ手紙をもらふ

七月十九日

午前中院下図及び本紙を張る 午後琅玕洞主夫人告別式に出掛ける 帰途三越に出て服飾品等見る 何だか大分つかれて了ったので休養 夜食後天明さんの家の辺迄散歩 武久勇三君下図蓄音器を聞いてゐる婦女持って来た

七月二十日

院出品本紙にかゝる 鉛筆で当りをつける 石田放光堂が来たので紫白緑を求める 夜は和楽に蓄音器を聞きに行く 川

上天明幸三郎兄等と旅行の話しに夜を更かす

七月廿一日

色彩にかゝる いやにむし暑いし何となく身体が疲労しものうゐ 暮方散歩 早くねる 何うしたのか段々腰のいたみを覚える 今朝から桜間先生が弥生の勉強を見に来て呉れる

七月廿二日

院出品作色彩を進む 吾等は若いのだ ひげを生やして紋付で床間二をさまてゐる日本画家の老成ぶりはいげきすべし 血潮は赤ゐのだ 夕方時事に加藤といふ人が伊太利の写生掲載をたのみに来た ことわる けふも大分暑さはきびしゐ 川上さん帰泊さる

七月廿三日

院出品色彩連続 相変らず暑さはきびしゐ 幸三郎兄は濃へ今夜出掛けるそうだ 金子君下図を見せに来た どうもつんとこない 涼台で天明さん等と雑話 今夜は両国の花火だそう

七月廿四日

椅子の部分に日を了る 仲々暑さは依然としてきびしゐ 葵屋主人午后来る 相変らず夜は庭で涼む さっぱり風もない 清吉君を奮れいする 金子君下図どうも水際立たない

七月廿五日

椅子のところに引かゝる 斯ふしたところは寔にむづかしいとつく／＼^{*}おもふ 依然とした暑さだ

七月廿六日

椅子窮余の策として黄色の縞を入れる 午朝日の三輪といふ人が制作中の写真をとりに来る 週刊朝日に掲載の為めとか夜半田、武久、角田、金子君等の下図を観る 旅行から帰って来た幸三郎兄を中心に信州温泉の話しに興ず 天明さん別宅の兄も共々であった

七月廿七日

椅子デッサン不備は如何ともなし難きか 所謂こ塗策也 小山兄午后来訪 暮方永らく愛蔵のにう鉢を破ち以て拇指を切る 出血意外に多し 金子君に下図紙を求めに行ってもらふ 朝鮮人の行路病者附近にあり 庄司先生がモルヒネの注射に

205 青木新次郎

来た けふは土用の午 うなぎ食膳を賑はす

七月廿八日

改作に決定 下図再考 仲田の森氏電話をして置めたので紙を持って来て呉れる 拾円支払ふ アイスクリームが届いたので和楽へ一家で出掛ける 暮方幸三郎兄正五郎君葛藤あり和楽の硝子戸のこわれをこみ捨に入れてゐる音が湯殿に聞こへた

七月廿九日

椅子見学の為め寺尾氏訪問 二三写生 イヤーブック(一九三二)を拝借して来る 北原三佳夫人来訪 椅子工夫するより仕方なし とうも思ふ様なもの見あたらず 夜西島さん扇店の下図を持って来る ロサンゼルスからオリンピックの初めての放送があり案外よく聞へたと幸三郎兄が来て話される

七月卅日

再考下図あらまし完成 幸三郎兄旅行に出掛ける 五拾円貸して呉れる 新らしめ本紙に貼り更へる 隆一耕三両君を交へ晚餐は賑ふ 夜青柳君が茄子図と無花果二猫の下図を見せに來られた 遅いので大分ねむくなって困った

七月卅一日

改作本紙にかゝる 木炭のあたりで一日を了る 佐伯のよし子さん²⁰⁶が遊びに來られ子供達は大喜びである 夕方三佳夫人正五郎君の嫁のことで見えた 天明さんが夜分遊びに來られる 依然と暑さは厳しいしどうも身体の工合が変だ

八月一日

本紙色鉛筆にて当る けふは案外涼しいので佐伯よし子さん子供達凡てを連れて弥国技館へ出掛けた 夜はデッサンの会 おゆきをモデルにして一時間十五分 それから十時半散会迄 忽那君の色彩に対しての苦 清吉君の芸術商品云々の感等の話にて話題波紋あり 高橋、越谷両君不参

八月二日

本紙色彩に着手 吉岡²⁰⁷がロサンゼルスオリンピック百米決勝に六着 十・八 天明さん昨夜の談話会の記録を持って来て呉れる 越谷君帰ってくる 大分今夕から涼風が出た 所得税督促あり 清吉君に役場へ届けさす

八月三日

色彩連続 全般配色を為すを主とす 一個所に停頓の習慣を改革しなければならぬとおもふ 武久君夜来る カフェーの図と婦女像との二下図を持ちて 后者進歩大るに見止む可きものあり 多少風あり 埃多し 凌きよくはあった

八月四日

じゅうたん椅子の部分にこだわる 風で埃の多いのは閉口である 若い時には所謂きざといふことも必要である

八月五日

けふも風吹き埃多し 気温は低め 色彩ノ地盤大体調ふ 南部選手²⁰⁸三段跳に十・五米七二 世界記録を作りメインマストに日章旗を上ぐ

八月六日

椅子に停頓 なやまさる 高橋君が出て来た 夜旅行から帰って来た幸三郎兄天明さん等で雑話 多摩川原で花火が上がる

八月七日

果然改作に決める 早速仲田へ紙本注文する 午前森氏が届けて呉れる 八円五十銭にしてくれた 紙を求めるに就て弥の配慮を感謝する 下図再考 行づまりはデッサンの不備に依ること多し

八月八日

本紙にあたりに着手 今度こそはである 自重すべし オリンピック水上百米に宮崎²⁰⁹五十八・二の記録を以て一着 河石²¹⁰次ぎ高橋²¹¹五着といへどもヤリリのタイムと同じ 第一当初に於て成果好調 祝すべし 葵屋主人正ちゃん嫁にど

206 佐伯善子 吉田家の一員。横浜シネマ協会を設立した佐伯永輔と結婚。

207 吉岡隆徳(1909-1984)

208 南部忠平(1904-1997)

209 宮崎康二(1916-1989)

210 河石達吾(1911-1945)

211 高橋成夫(1912-1990)

うかと池田兵三郎氏令嬢の写真を持って来た

八月九日

線描に着手 西島君が扇屋の下図持参す 中川氏仲博明君同道来る 仲君絵画志望に就てゝある 僅かではあるが降雨一しきりもっと降って呉れゝばである

八月十日

着彩案外に捗どる かほるさんをむかひ旁々佐伯夫人子供さん達同行来訪す 水泳八百リレーに優勝 いやへ発輝

八月十一日

着彩前進 濃淡微妙 僅かな濃さも他に及ぼすゑきょう甚大である 敷物の灰白色少し濃かったきらゐがある 横縞は縦縞より明確に観へるといふことを感じる 朝河野正義氏の代理の方が例の緑の山と題する大作偽印を鑑定にこられた 高橋君出京 午後帰る 四百米に於て横山大横田三着四着となりクラブタリス二着にしも 大に期待に反く 夜石本さんのところへ幸三郎兄忽那君と出掛ける 同君出品作日光の風景五点拝見する 帰途同君同道小山街見物 廣ずしに立寄 十時帰る 小雨あれども地をうるをすにたらず

八月十二日

大分着彩進行 廣瀬といふ塔影の人が日出へ掲載するとかで 小生結婚当時の話を聞きに来た 弥太郎君見へて弥二郎さんが昨日廿五瓦程喀血したそうで入院したり閉口してゐた 仲博明君白線のデッサン持参し夜来る デューラーの手と信実 下図絵巻とを貸す 午後多少しゅう雨らしゐものがあつたが もっと未だ足りなる

八月十三日

漸く作画進む 国民社写真を撮影に来る 大塚巧芸社から泥像第三輯配本を受く 代金未納 本宅へラヂオを弥と正午聞き行く オリンピック背泳 清川入江²¹²河津²¹³日本三者優勝 遂に三流の日章旗をかゝける未曾有の快事 夜西島さん下図持参に及ぶ 吉田ふみといふ一寸変な人見へる 越谷君鯉の下図持って来た おろく子供を連れてやって来た

八月十四日

椅子の部分に終日過す 正午本宅へラヂオを聞きに行く けふは最終である 二百平泳鶴田²¹⁴小池一、二着 千五百北村牧野²¹⁵一、二着日本断然優勢 終に水上の六種目の五を優勝 四百の自由型のみ米へゆづるといへ大した成果を上げたり 弥生は和楽の母と佐伯宅へ行った 伝来の猫こま病院へ昨夜入院 一日八十銭で約二週間の予定だとの話 トーランが語る 百米の場合は百二十米の考へもつ テープを切るといふ 観念はそれだけ速度を遅らせる もっと無意識たれ 人形使の天才玉助は狐を使ふもつとも傑れたり 伏見の稲荷へ日参して感得せる賜物である さる時子供に狐の動作を見たのではないかと指摘されその子供の敏なるを賞して右を語る お八重さんは三味線は猫の皮でなくてはならないと 今時多くの人には馬でも犬でもわかりはしまいと

八月十五日

ダリヤの着彩に入る 十五日例会 例の如し 西島君高橋君不参 院出品の為に 武久君そのかはり出席 十時十五分 参会

八月十六日

夜来の雨大地をうるをすに余りあり 暫らく待つてゐた雨だ 着彩前進 頭部に手を入れる 午後西島君下図持参 大分まとまる 気温は低下 法師蟬は泣く とことなく秋の気配が入りこんで来た

八月十七日

画室入盗事件あり 巡査刑事等来たり 一局面転回 盗難品 浮硯(香盒)三佳作のもの 菊盤九谷焼 木製のもの二個 銀製ボンへ入れ二個 ハサミ ピカソ集 夜別宅兄西瓜のアイスクリームを持って来て呉れる 清吉君丈平君に夜番をしてもらふ 弥は弥次郎君見舞に行った 和子チロに咬まれる

八月十八日

降雨しばらく目 冷氣加はり秋の寂しさに似たり 顔面着彩に終日 夜はすはらの伯母さん天明さん見える 別宅の兄 信州へ出掛られた

212 入江稔夫(1911-1974)

213 河津憲太郎(1914-1970)

214 鶴田義行(1903-1986)

215 牧野正蔵(1915-1987)

八月十九日

漸く完成につとむ はっきりしなる天候 弥生朝子風邪引
ひとくならなければいゝが

八月廿日

美の国写真を撮影に来る 日々文芸部の人談話を聞きに来る
葵屋主人青木のことでやって来る 高橋君出で来た 夜は幸
三郎兄と小山君のところへ行く 同氏犬の作品を観る 同氏
も共に新宿に出て柳屋支店でおでんで一さんかたむける 新
興廓を見物 十一時半近く帰って来た

八月廿一日

漸次完成に近づく けふは毛糸犬の部分である 大分暑さの
よりがもどる 日々の関本といふ去年も来た人が撮影に來ら
れる 午前仲玉川清次郎君作品落日図を持って来たがどうも
前作の方宜い様におもふ

八月廿二日

亦画室入盗 此度はグレコ、ミレー、パンテオン ジオット、
レンブラント、ギリシ彫刻写真イヤーブック(寺尾氏から拝
借のもの)独逸建築、ミュージグメーのミイラ棺蓋のホート
ライト集印章二個眼鏡等々大分やられる 樋口刑事に電話し
て来てもらふ あとで納屋の棚にマサッチオ、伊太利各地の
写真集五冊程隠とくしてあるに気づく 午後三田の巡査検分
に来る こんな出来事で一日余りまとまらずに過ごす 夜天
明さん武久君青柳君来訪 青柳君は無花果に猫の図持参 泥
棒の話して十時頃帰る 清吉君丈平君に泊ってもらふことに
した

八月廿三日

不図汲取口より泥棒の入ったことがわかる 合羽等そこに使
用してあった 作画あらまし完成 大工さんに戸じまり改め
てもらふ 夜兄のことで関文五郎さんの訪つねて来られる
西島さんが扇店の下図持参 十一時過ぎになる 今夜も丈平
清吉両君に画室とまりを乞ふ 大工さんに木の上下の見わけ
方を学ぶ 今迄の見方は反対であった

八月廿四日

作品補修 長茶亭に忽那君の檜つゝじの図、本宅に金子君ふ
くろの図を観に行く 泥棒が隠とくして置るもの弥不図北
の窓の下掛戸の間から発見する イヤアブック、ホートライ
ト アンテイク、初期ギリシャ彫像写真ローマ写真帖 レン
ブラント アーキペンコウ等 朝日作品を撮影に来る 鶴心

堂氏粹張に就て来てもらふ けふは一しきりしゅう雨が
夏らしい趣きを覚へた

八月廿五日

顔面の個所に引かゝって終日それに過ごす 夜武久君自作婦
女図を持参する 天明さんは昼間不良少年に子供さんがきよ
うはくされたことがあったので不要心だとして早々帰へる 清
吉の弟といふのが宿入りでやって来た

八月廿六日

肉体の色彩は寔に至難である 雨折々降りもの寂しい秋の気
分がある 気温もばかに下った 清吉君の工場の図を観る
仲々宜いところがある 武久君が明日から作画完成につとめ
るので画室に泊る 七生義園の人が作品寄付希望で来られた
が断る

八月廿七日

昨夜泥棒様子を窺ひに来たあとがある 武久君画室三畳にて
作画を始める 玉川清次郎君落日の作品持参 大分改まる
清吉有明両君の作品を観る 少し眼の調子疲労があるので終
日とりとめもなく過ごす 夜キングの徳永といふ人が名作も
の語のことにて来訪 ローマの図録を貸す 弥生は別宅の兄
に誘はれて追分へ出掛ける 大喜びである 五時五十分上野
発 画室から警報の仕組みをする 亦やってこはしないかと
いふので ふりみ降らずみの冷気の多い日であった

八月廿八日

昨夜半三時頃高橋君出京銀座行進図巻持参 けふは清吉有明
丈平武久高橋諸君の作画注意に巡廻 玉川の清次郎君も出で
来て終日作画修正に没頭 夜は桑名さんが粹張のことにて諸
君の画と照し合せて見る 天明さんに院の招待状を書ゐても
らふ 幸三郎兄が小林さんを訪問して夜遅く来る 何だかた
で十二時近くにねるのがなつて了ふ しとへと秋雨だ 青
木進次郎君例のことにて来た

八月廿九日

けふは院べ切であるので諸君の奮れいをうながす 大塚さん
が撮影に来られる 石山牛田両兄も見える 出品をすませて
の帰途である 史料研究会の中野とかいふ人が本を売りに来
たが断る 小山君の作品を観る 夕方出掛ける幸三郎と遭ひ
小山君共々 新宿に晚餐帰宅 桑名さん高窪さん等にて粹張
あるふんいきを現出してゐる 青柳さん西島さん玉川の清次
郎君もふんれいしてゐる 西島さん青柳君は完成せず終ひに

夜明しの様子 吾々のねるのもとう／＼一時になる

八月卅日

太田耕治氏の訪問を受く 少壮作家に対する評感を話せとのことだ 院鑑査の爲め九時出掛ける ぱっとした作品なし 広造²¹⁶丈平²¹⁷清次郎²¹⁸勇三²¹⁹諸君先づたほれ有明²²⁰青柳²²¹高橋二点上赤の部、清吉²²²周桑²²³疑問にて成績上らず 次郎さん²²⁴と同行帰宅 弥生別宅の御連中を三時頃帰ってきたそう だ 夜は之れ等の人々にて角間の話しに賑ふ

八月卅一日

院鑑査第二日 清吉周桑銀座三点入選 終了後小林小山富取三君と博物館見物 六時先生主催同社晩餐会出席 九時過ぎ帰宅 折々小雨 かなり暑い日である 一般作品基礎の不確実いたづらに塗抹に終るかたむき多い 反省すべきことである 不在中石本半田坂本²²⁵牛田の諸君見へた由

九月一日

高橋君に警告をあたへる 小林さんが和楽に見えられたので行く やがて拙宅にて午食 朱紙等の談話を交へる 石山太柏氏午後出品作の批評を乞ひに見へる けふは研究例会にて鳥木屋のぢーやさんにモデルになってもらって五時から六時迄 それから清吉入選の祝杯を上げ鑑査後感等の話しにて十時散会 終り近く小山大月氏来られる 松村とかいふ洋画の人が昨日かの清吉作と不図同所のビール会社の制作に来られる 午後二時一四時迄である 高橋君は九時頃帰宅

九月二日

院内見日なので幸三郎兄と行く約束をしたが出際に痔出血多く庄司先生の来診を乞ふ 安静すべき注意を受けやめて臥床 徳永といふキングの人がローマの画集を返却に来る 玉川の伯母さんが清次郎君の礼に来る 天明さんが夜昨日の記録を届けて呉れる いやに熱く汗ばむ日だ 池田さんの猫の箱書をすます 越谷君が葵屋へ帰るので支那名画集二冊届けとく

九月三日

院招待なれど安静臥床不参 昨日にをとらず仲々暑い日 角田新一喜びの爲め上京 清吉と共に院見に出掛ける 寺尾さんへ拝借の家具の本返す 牛田君院への途上寄る 別宅兄夫婦院見物に出掛ける 随分入場者があつたそう だ 天明さんが見えて研究会記録の修正をする 夜は幸三郎兄別宅の連中にて院の話

九月四日

けふも静養に過ごす 角田新一に肖像画を依頼するとかで幸三郎兄等で写真を選ぶ 中村貞以氏院賞の発表あり 庄司先生来診 □□□□にて注射の必要ある由 血行不調の結果なるのだそう だ 市川といふ絵画志望の人、青柳君夜来る 清吉の使を以て小林さん見舞旁々鳥を届ける

九月五日

少し仕事をするつもりであつたが訪客の爲め了る 葵屋主人に支那名画集、雪舟図巻売却のことを頼む 太田耕治氏入選作批評を依頼に来られる 十二日ともかく会場へ出掛けて見る約をする 角田新一帰郷す 弥が日黒小学校に桜庭先生を訪ねたので夜立寄られた 弥生を依頼す 桑名さん夜来た 天明さん等雑談

九月六日

時雨た日になる 朝顔の写生 戸田栄次氏の扇面に朝顔を試みる 耕三さんが椋鳥をうったのでその写生をする 落選画を引取りに行つて来た忽那吉田金子三君と雑話 武久君が先般盗難にあつた本が神田にあるとわざわざ知らせに来て呉れる はたしてそのものかいなや

九月七日

扇面朝顔の作完成に努む 武久君から亦電話にて稲垣書店の本一見され度き由 午食後三村儒平氏来る 作画督促 富取君来訪 共に神保町へ出掛けて盗難品なるやたしかむ 正に

216 西島廣造

217 金子丈平

218 玉川清次郎

219 武久勇三

220 忽那有明

221 青柳五柳

222 角田清吉

223 高橋周桑

224 富取風堂

225 坂本華光(1889-?)御舟に師事。1930年再興院展に初入選。

そうであることを感ず 直ぐ共に帰宅 その趣き交番に報告
天明さんも見えて昨日子供達との約 朝子が番に当るので晩
食を一所にする 非常な喜びである 美の観点の移動 中村
氏²²⁶の院賞はかなりいゝ加減に定められたそうだ 幸三郎兄
が帰って来られ中村房次郎さんが病気であられたこと その
全快祝にふくさに老松晩天の図を拙作希望のこと 前田家の
天狗草紙等模本のこと等の話が出た

九月八日

齋藤さん²²⁷博士になられし祝賀の為めの画帖の作 甲蟲かし
わ図と柚子図とをやって見る 葵屋主人に依頼とし置るた
支那名画集、雪舟図巻とを五十五円に売ったとてその代金を
持って来て呉れる けふは春日神社の祭礼 御こしをかつみ
でゐる子供のさわぎかきこへる 玉川の伯父さん清次郎君の
ことで見える 相変らずのことだ

九月九日

折々雨 晩には大雨 雷鳴さゝ加はる 扇面るりひばの作画
に入る 和子朝子は約束だとして別宅姉弥と三越へ出掛ける
武久君やって来る 夜は天明さんやら越谷君も来て怪談愚話
に過ぐ

九月十日

武久君が盗難品に就て電話等かけたりして呉れる 何でも
大体のもの出たそうだ 小笠原君から加治といふ人の娘さ
んの写真をよこして正ちゃんにどうかといつて来られたが
二十五年なので早速越谷君に返へしに行つてもらふ 越谷君
に菊の図を九品仏へもたせる 中村さんの全快祝賀のふくさ
のことにて笹本さん幸三郎兄と相談する 扇面るりひば描き
上げる 柚、甲虫、朝顔等もまあいゝとする 弥柿瀬先生の
神楽町の御宅へ礼に行く 中村さんの老松の写生に丸の内
へ出掛け夕方帰宅 横尾君来ていた 仲君雞頭の図、自画像
信実の絵巻写しデューラーの手等持参 小林さん見えて朱数種
頂く 明日午後三溪園へ行かぬかと誘はれその約をする

九月十一日

午前仲ふくさの老松の工夫 あいにくの雨だが小林さんとの

約で三溪園訪問の為め十二時州分桜木町へ行く 同氏の拝受
せる蓮花図を中心に三溪先生の作画数点拝観 随分久闊めの
拝眉 円満なる風格以前として和やかなるものなり 丁度来
合せて居られた川面さん²²⁸にもしばらくめである 小林さん
の名作芥子極楽井等も拝見して八時州分辞す 仲々雨はやま
ない もっと落ち着みてこくのある仕事をしなければならな
いことを痛切に感ず 小林さんの足跡は確固たるものがある
やらねばならない 浮かへしてゐる場合どころか

九月十二日

武久君清吉君に盗難品を受取りに行つてもらふ 五円手紙に
同封 謝儀の意を以てする 院当番に当る 雨を冒して出
掛ける 最も太田氏との新論へ掲載の批評に就てのことも
あつて夕刻帰宅 浮硯始め香合、洋書等再び小生の手にもど
る よくもどつたものだとおもふ 中島葉刀氏²²⁹来る 十一
時頃迄横尾君も来て雑談にふける

九月十三日

老松図ふくさの小下図に工夫したがまともまらない 飯島南風
氏²³⁰がやって来たり夕刻から神崎さん²³¹がやって来たり等で
殆んど終日談話によつて了る 婦人世界の浅尾さんといふ人
が拙作掲載につみて了解を得に来る 学校はけふから始まる
折々しゅう雨沛然と来る 白萩が雨情豊かだ

九月十四日

正ちゃんの御嫁さんのことや本宅移住のことで午前仲は時は
過ぎる 太田君が拙評に就て校正に来る 一時の約で米大使
館属官院見物のこと大本さんにたのまれてゐたのであらまし
見て勿々に同氏と出掛ける 院会場にて相沢さんに面会 ふ
くさの話に就てわざ／＼来られた様だ 大本さん一行案内後
高橋夫妻上京 同会場に居たので一所にタクシーにて帰る
夜は別宅天明さん等で雑話

九月十五日

笹本さんがふくさの寸法のことで来る けふは午後一時から
研究会 朝子和楽母幸三郎兄モデルにして写生 五時迄 そ
れより座談会 十時散会 熊谷さんのことでふんきゅう 満

226 中村貞以

227 齋藤隆三

228 川面義雄(1870-1963)着色木版による復刻の技術者。

229 中島葉刀(1902-1955)鳥取県出身。1929年再興院展初入選。

230 飯島南風 大成美術通信社代表。

231 神崎憲一

州国独立祝賀調印日である 葵屋主人菊の絵のことで来た

九月十六日

いやに降り続く 伊代²³²熊谷さんのところへ行く おゆきのことを聞いてきた ふくさに老松の図を描き始める 寸法一尺三寸巾一尺四寸丈け 朝鮮紙にである 戸田栄次氏扇面びわり図をとりに来られる 謝儀五十円を受く 菊の図(チェッコ出展)のことにて長沢義郎氏来訪(葵屋主人の例の問題にて(の爲めあたゑしもの) 尚画帖揮毫に就てゝもある夜葵屋主人来る 長沢氏より百五十円受けとった由 北原へ出掛けてゐた弥朝子と帰って来る 姉のことにて論議 幸三郎兄落選者慰安をして帰途寄る 武久君の長唄はとうもあやしいものだそうだ

九月十七日

土井氏来り木瓜図に対し謝儀二百円拝受 十二月開催する色紙二点揮毫依頼を受く 関如来翁²³³久らくめで来た 河内金剛山の夕立に反映する虹七彩のはなしは如来らしい趣きがあった ふくさの老松図あらまし仕上る 横尾君帰郷す 高橋夫妻は小襖の寸法をとり旁々出掛けて未だ帰らない 天明さんが研究会の記録を書いてきて呉れる

九月十八日

尚美堂主人早朝来訪 今秋展揮毫依頼の爲め(十一月末尺五とか) 老松図と裏面あけぼの染仕上る 午後は弥が弥生和子を連れて院へ出掛ける 朝子は小生が連れて松屋に弥達を待ち久らくめに銀座を散歩した 帰って来たら大智さんと小山さんが待っていた 十二時近く迄話される 拙画に就てもへる熱の不足 技術的方面にては椅子が何れか色の变化ありしならば等々の評語を聞くことを得 松屋エレベータアの中で川上元夫人竹越さんの玉子氏ニ会す 茅ヶ崎へ夏出掛けなかったので本箱を求める 小林さんから電話があったが出はなでもあり朝子の気持ちやらで御ことわりをした

九月十九日

熊谷さんが御ゆきのことで話しに来る 笹本さんにふくさのこと依頼すること等あって午前中過ぐ 午後二科青龍両展見に出掛ける 次いで馬込のアトリエに小林さんを訪ね拙画の評を乞ふ すっかり話し込んで御宅へ迄寄り晚餐を受け十

時近く御いとまする をくれ毛に最も形式化の悪い落度を表はす 色がきれへ^{*}であってとけ合つてゐない 立ての円味は注意されてゐるが横の円味に関心がない へへへへ之れは出ているが輪郭の外に落ちて行くそこがけてゐない 大体に軽さに過ぎる 雑誌の口絵をおもはするものがある色の糸りの上端からすその下端に及ぶ迄同一色の度合はかなり平板に致してゐる(佐藤くんが構成とはこんなものではない 目的が達せられてゐないことは無意義だ) 小林さんでなければ聞かれない有意義な評を聞くを得たことは有がたくおもふ

九月廿日

高橋君妻君が昨朝流産したとて早朝やって来た あぢさいの花の秋色に特色があるので写生する 午後はにはとりのとさかの美しさに引かれて写生 葵屋主人青木対する認識不足は行動前後して切角得たる好機を失す そのことで夜亦遅くなる 上田子行氏やって来たが証こ(作品)がなければ話しが出来なる 実行の語あるのみと別れる

九月廿一日

どうも腰のいたみがいへないので田代博士を診察を同病院に乞ふ 原因は過労によるらしい 痔の注射をしてもらふかとおもつて田村町の西元医院に寄つたが未だ診察時間にならないので帰宅 午後はにはとりの写生 横浜のことぶき署の刑事が先般のころぼうがたいほされたに就て来る はん人同行であったが背後より見るに止める 三十才で前か一年八月月の刑に服したこともある由 ねずみ色の洋服を着てゐた 幸三郎に扇面あさがほ渡す 松本の眞ちゃん来てもらつてあんまをもらふ 半田さんが一寸見へた

九月廿二日

けふは終日臥床 清養につとむ 田中良助氏画帖揮毫に就て来られたが拝眉せず 夜は松本直ちゃんが療法に来た 全く無為の日だ 遅くなったので直ちゃん留る

九月廿三日

もう一日静養のつもりであったが午前中から葵屋主人のことにて関氏²³⁴来訪を始め岡本麻満津子同伴来たりて終日過ごす

232 速水弥

233 関如来(1866-1938)美術評論家。

234 関文五郎

九月廿四日

午前中にはとりの写生を僅か程したが午後一時院会場にて正五郎君のお嫁さん候補に就て小笠原御一家に面会する約束があるので和楽母別宅姉弥と出掛ける 場内にて幸三郎兄に会し小笠原御一統等と喫茶休憩 しかしてホクト社一べつ銀座中島にて遅い昼食 帰宅後葵屋主人と関氏のもたらしし百円に就て論ず 先般の百五十円は本日同主人吉田和楽に手渡し青木とのせっしょうを依頼して来た由 明日関さんに一応返却して置かねばならないので同主人滞留す

九月廿五日

美術研究所展観長崎系洋風絵画を観に行く 出掛けに牛田君が子供さんを連れて来られたが失礼する 美術学校の方にも陳列されてゐたが総じてたいしたことにもおもはれなかった 久しぶりめに小茂田君を見舞ふ 大分快方に向はれて帰る時等途中迄送ってくれる位であった やっぱり二時間近く話して了った 次ゐて小山君を訪ねる 安緑青のことを聞く 帰って来たが未だ岡本へ出掛けた家中ものは未だであった

九月廿六日

あぢさゑの紅くなったのを写生 昨夜の約束で小山君来る共に二子(吉沢)に在る婦女界のフレーム 現在は武村の経営を見に出掛けたが主としてカーネーションであり花もなく失望 児童園の側的美蓉亭にて午食 溝ノ口に出で矢向に牛田君を訪ね共に三溪園に行く 此ゝ迄来て宜かったとおもふ 秋草の美に接す とりわけ芙蓉は美しき盛りである 伊勢佐木町のあけぼのといふ一品洋食にて晩食 九時近く帰宅 弥は弥太郎君のことに別宅へ行ってゐた

九月廿七日

写生の手入を多少したがまあとりとめもない日にする 玉川清次郎君来たので五馬図を貸す 午後橋村君上京 夕食後天明さん武久君等会し雑談 橋村君の茶毘、狂人の骨ばかりの洋傘通夜の出来事等一寸新しき話してある 雨しきりに降り出す

九月廿八日

雨降りであって三溪園写生の予定はだめ 雞鳴の下図にかゝって見る どうも思ふつぽに入らない 不徹底なる日を過ごす 昨夜泊った武久君に例の盗難問題で五円礼をする

夜小谷津君来訪 画の話しに過ごす

九月廿九日

午前中は別宅兄来り吉田家に就ての話しで過ぎる 午後遊就館へ大鷹の写生に行く 唯一ツあるのみ とにかく三十銭にて特別観らんをする 僅か写す 天明さんが象の版画持参 夜遊びに来られる

九月卅日

九月もけふで終りだ 高橋君が秋草を持って片山村居から出て来た 流産の子供は男女の双子であった由 死亡届の手つゞきで一応医師の診察が必要で掘り出したのだが気附かなかった一人の子供に引合せられる因縁かとおもふといふ 雨降りて三溪園へ行くこともならず鷹の下図にかゝる

十月一日

三溪園へ秋草の写生に出掛ける 小山君後より来る 一時半頃迄やる 残暑仲々暑し けふは例のデッサンの会なので切上げて帰る 大東京併合の祝意のチャウチンが多摩川のへに迄販ふ 銀座に対する荘八²³⁵の反ばくが主として論争の因となって大分熱が上る 夜は大雨一しきりある

十月二日

僅かに写生の手入れをしたに過ぎぬ 午後は神宮プールに於ける選手権大会見物 幸三郎兄別宅兄隆一耕三両君高橋忽那両君等にて 清川北村の泳法の如何にも自然なる やっぱりそれなくてはいけないと感じる 帰路別宅兄に誘はれ和楽堂にて晩食 弥は新宿へ出掛けたとて未だ帰って来てゐぬ 不在中岡本の子供達来てゐた そうだ 天明さんが昨日の記録を持ってきてくれる 高橋君片山村居へ帰る

十月三日

三溪園へ秋草の写生に出掛ける 道に一時間半はやはり要する 阿屋にて不図新井勝利君²³⁶に会す 午後は雨二わざわひされがちである 四時卅分迄にて帰る 雨は本降りて仲々烈しさを加へて来た 堀田夫人子供を連れて遊びに来られてゐた

十月四日

絹尺三巾清吉君に買に行ってもらふ 写生の手入れ 雨しき

235 木村莊八(1893-1958)洋画家、挿絵画家。

236 新井勝利(1895-1972)東京京橋出身。安田靫彦に師事。1941年日本美術院同人。

りに降り終日暗くとりとめもなく了る 夜天明さん武久君来る 武久君は木村荘八氏の院評に反ばくの意を蔵する原稿を持って来た 上田晴風君から松茸の贈らる して忝状に父君の卧を伝へられる

十月五日

鷹の図にかゝる 午後は上田氏厳父逝去に就てその霊前手向けの為め紺紙短冊につゆ草を描く 夜は小笠原弥君母堂同行来訪 松岡映丘氏の紹介の希望に就てが主たるものである

十月六日

鷹の図作画及不二つくばのはく落くを直す 松島画房主作画督促に来る 夜葵屋主人天明さん来る けふは秋晴れ 赤とんぼが稍に羽根を光らせてゐる 法師蟬が未だなごりをしく鳴くがある 和子朝子長唄をき上りこぼしを始め出した

十月七日

鷹の図作画 午後書齋を土蔵の前の部屋に移す 丈平清吉両君に手伝ってもらって概略とゝのへる 林琅玕洞主作画依頼に来る 上田晴風氏宛つゆ草の短冊供花として贈る 夜は手伝ってもらった両君と一さんのねぎらひをし旁々絵画談に十二時になる おろくが子供を連れて来る

十月八日

葵屋主人の保険勧誘員に就て長茶亭幸三郎兄に相談に行く まあやらせて見るか 鷹の図完成尺三巾四尺 芝田好助さんから送くつて呉れた松茸を築山に植へて茸狩の真ねをして晚餐は子供達の喜びである 夜は武久君葵屋主人来る 保険外務員の事につめて話しが延び泊る

十月九日

午前中は葵屋主のことにて別宅兄とも協議等に過ぎる 午後は黄蜀葵の下図 夜大沢、天明両氏見える

十月十日

小林さんが見える 茶と花の雑誌口絵の立花の屏風の部分雞頭図を見せて呉れたがとてもつんとしたすみ切ったものでいゝものである 不完成で出品出来られなかった犬の御作品が出来たそうで共に馬込の画室へ伺って拝見する 楽浪だといふ感じが第一に感じいつも乍ら動揺もない こった立派

なものであること勿論である 往路立会川の方迂迴した乗合で終点から大分歩かせられたが帰路は目蒲乗合で大井町に出る それはづうと便がよい 往きのは城南乗合といふ 写生の会の話をして写生を拝借して来た 犬のクロッキーが主である 硯面を直す石を拝借して来て天明さんと大森ギャング捕物の話し等しなから硯を直す 大分工合よく行くものである 寺崎さんから電話でイタリ大使館で十月廿八日午前十一時祝賀の催うしがあるので出席如何の由であった

十月十一日

黄蜀葵下図 葵屋主人三井生命外務員になることに就て別宅兄と会社に出掛けた その帰りに寄る 保証人としての手続き等のこと夜はそのことにかゝわる 村田泥牛氏天明さん来訪 泥牛君から同氏郷里の話等聞く 今秋はその辺見に出掛けたくおもふ

十月十二日

黄蜀葵の本紙にかゝる 長者丸の平井邸を見る 幸三郎兄と行く アメリカ人が借り度いといふことで 石本さんが壁画を模写に高橋都哉君²³⁷と今夜出掛といふのでやって来られる 小山君もその頃来合せ午食を共にする 小山君はそのまゝ夕方迄ゐる 朱を半斤程例のものを届けて呉れる それ等のことで一日殆んど為すことなし けふは御会式であり芭蕉忌でもある 十三夜の月を散歩がてら観る 本の部屋を整理する

十月十三日

黄蜀葵色彩に着手 淡きを基調にしての試み 一作ごとの工夫つくへゝ考へる 法界寺の天人に依りて種々作画に就て考へさせられる 葵屋主人三井へけふ行かなかったので注意をする 夜は天明さんが来て鷹治郎²³⁸の上幕の出の特長から役者のそれへゝ個性の話がある

十月十四日

黄蜀葵の制作傍ら柿の写生をする 夕刻小笠原弥君来訪 橋本さんの法要があるとかで僅かにして帰る 夜朝子写生 天明さん葵屋主人等相変らず雑話

十月十五日

黄蜀葵制作 午後はデッサンの例会 高木の御用きゝと武久君とにモデルになってもらふ 小林さんから拝借した犬の写

237 高橋都哉(1893-?)山形県出身。小林古径に師事。1931年日本美術院院友。

238 中村鷹治郎(初代)(1860-1935)歌舞伎役者。

生参考 諸君にて持ち依った写生のうち玉川清次郎君のバステル使用のダリヤから果然清吉君の写生に対する根本義から大分論争が生ず 次いで西欧のデッサンの傑れたるものの複製品にて雑談 十時閉会 どうも此の会には雨降りが多いけふもそうだ 婦女界から五円贈って来る 院出品の色づりを掲載した謝礼なのだ由

十月十六日

黄蜀葵図に引きづられてゐる 雨降りて暗い 切角の日曜に帝展の招待だ 高橋さんから鷹の図に対する謝儀二百円送らる ドイツノ赤十字とかいふところから先般の寄贈した夜雪に對し勲章様のものを贈って来た その勲記が上村松園女史のと間違つて入って来てゐる 夕方青木新次郎例の話してくる 多少了解に近づくか 信州の矢作といふ人が糸を鑑定に來たかカンナの絵でにせものであった

十月十七日

神嘗祭 快晴 黄蜀葵図あらまし完成 石本夫人来訪 夜は東洋美術大觀絶代至宝帖等天明さん等と見る 現代のうはついた作品にほとゝまいる 反省しなければならぬこと痛感 山にこもり静慮 現在の世評を不省 どうしてもそうしなければ最早救へないとおもふ

十月十八日

芙蓉花下図 武久勇三君来る ドイツ大使館へ間違つてゐる勲記様のもの届けてもらふことを頼む 夜は耕田の図の工夫を始める 葵屋へ行つたとて帰りに武久君再び来る

十月十九日

どうも黄蜀葵の下部気にかゝるので隈をとる 芙蓉図本紙にかゝる 胡粉を引く 柿の紅葉が美しい 午食後写生 夜葵屋主人来る 相変らずの話に閉口 青柳君海魚の図の下絵持参 エジプトの話に時を過ぐ 高橋さんからの謝儀二百円山口銀行小切手 清吉君にとりにいってもらふ

十月廿日

芙蓉図前進 本格的の重さを主とす 形而上学的芸術 内在性 豊富にならねばならない 写形と写意の相違 何んでもない当然の辞だがほんとうに会得さるべきには仲々至難事だ 藤の黄葉が写生欲をそゝる

十月廿一日

秋雨 芙蓉図 葉の部分分類法の色彩 古典を超ゆる重さが

出ることを欲するんだが 夕刻柿の紅葉を写生してゐるところへ大衆芸術の人が訪づねて来る 理想が現実の苦難に難破しそうな叫びを聞かせる そうして救ひを求めてゐる 別宅の兄夜来る 三井の組織等に就ての話を聞

十月廿三日

芙蓉図終日作画 忠哉さんところの子供さん達来る 築山にて晚餐 武久君来訪 姓名判断にて和楽母別宅一統等にて賑ふ

十月廿三日

終日芙蓉図の作画 葵屋主人来る どうやら多少勧誘が成功しそうな話 浅岡さんのところへ顔を出して来た由

十月廿四日

芙蓉図あらまし成る 中村鶴心堂氏紅梅図と菖蒲図二点箱書に來る 夜は葵屋主人別宅兄等で保険のはなし

十月廿五日

芙蓉図氣にすまざる個所あり それに引かゝる 午後四時弥次郎君病状悪き由 神奈川飯野病院に見舞ふ 先來の和楽母と同道歸る グレコ画集を開く 完要なるものを力強くつかむ グググット その方向に向つてタッチする 學む可きもの多々 大塚から泥像図鑑第四配本あり 第三分会費支払ふ

十月廿六日

芙蓉図未だおもふところに到らなる 花の付根だ 紅黄蜀葵の組合さつた図の下図尺五巾豎のものにかゝる 午後三時頃笹岡正民君来る約束にて渡欧印象作の選定 和蘭陀デッドシチーを寄贈する 雑談晚餐を共に

十月廿七日

紅黄蜀葵下図 野菊の写生 午後は昨日の約にて笹岡家訪問 小林さんに会し中田紙のキャンパスを見る 森氏来る 同紙は思はしからず 雁皮紙を別にすゐてもらふ約をする 晚餐のおもてなしを受け正民君と小林さん共々銀座に出て木村屋階上にて喫茶 帰宅

十月廿八日

伊太利祝賀会なれと不参 紅黄蜀葵下図 芙蓉図再び手入れ 武久君午頃来訪 弥は弥次郎君見舞に出掛ける 葵屋主人夕刻来る 保険医師そうぢゅう至難の話 夜別宅兄来る 正五郎君の相変らずの話

十月廿九日

芙蓉図 葉の個所色塗り直すかたはら紅黄蜀葵の下図をねる
三上夫人久闊ぶりにに來駕 富取小山両君も偶然会す 小林
兄の犬の下図を巡り作画のたいどに就を話を交す おてん夜
遅くやって来た 別宅の女中のことである

十月三十日

昨日と同様なことに終日過ぐ 葵屋主人横はま島崎氏に紹介
してもらふので別宅兄と出掛ける

十月卅一日

柿生散歩の約束で小田急駅に富取小山両兄に会す 夜来の雨
未だ天候覚束なし やむを得ず帝展拝観に変更 次めで横河
博士²³⁹の寄附に依る陶磁の展観を博物館にそれこそほんとう
のよき拝観す為す 夕刻小山宅に帰着 十五日会の例会にな
らひて晚餐雑談 十時近く散会 帰宅す 別宅兄益の助君共
に正五郎君より発したる財産分配に対するの談十一時半に至
る

十一月一日

芙蓉図 葉の部分に相変らず引きかゝってゐる 午後はデッ
サン例会 高橋夫妻上京及青柳君参会始めて也 ふくおばさ
んと長唄のきみ子さんとにモデルになつてもらふ 富取君か
ら拝借した草花の写生の模本と同君の夕顔ぶじの写生図巻が
本日の参考史料である 九時半散会 今回は天明さん不快の
為め不参

十一月二日

午前中は正五郎君のことにて別宅兄正五郎君とて談話に過ぐ
三溪先生から白鷺図と画集の贈呈を受く 芙蓉図どうにかま
とまる 馬の写生整理する 夜は高橋夫妻清吉君等と三溪画
集を中心に雑話

十一月三日

紅黄蜀葵本紙に着手 別宅兄と正五郎君のことにて長茶亭に
幸三郎兄と会談 次めで午後正五郎君を宅に呼び別宅兄と談
合(三年后解決 一万円家屋建築費、月二百円受諾等) 弥子
供達は朝日講堂に舞踊見に出掛ける 夜は高橋君夫妻弥(廣
ずしおごる)雑談 本日終日正五郎君のことにて了る

十一月四日

亦本日も正五郎君問題にて過半を費す 蜀葵図多少着色 夜
葵屋主人立寄る 池田さんの別の写真を持参し亦以て正五郎
君問題に入る

十一月五日

正五郎君のことにて別宅兄正五郎君と会食 多少了解に近づ
く 高橋夫妻片山帰へる 幸三郎兄見えて小林さん訪問する
とかいふ 金沢氏から電話にて明治屋切符のことことわる
蜀葵の図着色前進 夕方散歩 天明さんを見舞ふ

十一月六日

蜀葵作画連続 小谷津君うづら萩東京会出品持参 暫時道楽
といふことに就て雑談 角谷憲一氏十一月卅日招待にて展観
開催の由にて督促に來駕 葵屋主人青木の問題にて来る 夜
迄保険の話等にて談込む 弥生は和楽の母に誘はれて音楽学
校に長唄を聞きに行く

十一月七日

朝子昨夜来より気管支炎にかゝり発熱 チロ野犬狩にて連れ
られる 清吉君に謝罪に警察に行つてもらふ 了解なる 蜀
葵の作前進 庄司先生朝子の為往診を乞ふ 絶対安静を要す
る由 夜市川君来る 日大夜学の退学 その寸暇を以て絵画
研究にあて度き望なるとのこと 清吉君等とエジプト文化の
談等中心

十一月八日

蜀葵作画連続 三上夫人写生を持参 小生の牡丹図を貸す
武久君嫁の写真を直ちに正ちゃんに見せて和楽母にをこら
れる 八日会の為めに赤坂白水に出掛ける 平福²⁴⁰前田両氏
有吉 原氏等多数 近代女性といふものから近代絵画の動勢
等の話をする 九時半散会

十一月九日

蜀葵 下部野菊の部分に及ぶ 正五郎君了解返答をもたらず
庄司先生来診 朝子の□□□□□□□□□□作用だそ
うだ 弥次郎君急をつげる 弥行きたがったが分を守ること
いふ 大石はかけつけたことが立派であつたのではない 彼
のじん太こをならした最後に於てがいのだ 牛田君見える
はぜの紅葉を描く希望をはなされる つづいて絵画に関して

239 横河民輔(1864-1945)建築家。横河グループ創設者。

240 平福百穂(1877-1933)秋田県角館出身。日本画家、歌人。

十一月十日

正五郎君結婚希望と決定に就いて別宅兄と長茶亭へ出掛ける
蜀葵の図葉進捗 北原三佳氏来訪 鑄金の談ニ終日 松島氏
に芙蓉図渡す 謝儀二五〇拝受 弥は弥次郎君見舞 命旦夕
に迫る様子 フオバアーに更りルウズベルト大統領に当選

十一月十一日

紅黄蜀葵概略完成 尚美堂主来訪 夜は三井朝岡氏来る 別
宅兄葵屋兄同席 西村卓三氏²⁴¹名倉屋主人同行来訪 雑話遂
に十二時を過ぎ ドイツ大使館より赤十字二等章改めて贈ら
る

十一月十二日

黄蜀葵(前作)不満在 手を入れる 黒い揚羽蝶を配す 中村
鶴心堂氏袖裏打して呉れたのを持参来訪 弥次郎君見舞に
出掛ける 今夜重体 紅白芙蓉色紙大双幅下図を工風

十一月十三日

紅白芙蓉本紙にかゝる 午後五時五十五分遂に弥次郎君逝く
栗田ヶ谷の仮寓へ別宅兄と出掛ける 一時近く帰宅 告別式
じゅん備 畳更へをする

十一月十四日

紅白芙蓉作画連続 桑名さんの障子張更へ 畳屋さんも来て
やってもらふ 藤井澄湖氏未亡人來られたが取紛れて会はず
弥は神奈川へ行く 夕方暴風雨を突破 通夜に出掛ける 反
町駅にては全く身体極まる烈しさである 帰途川崎駅と鶴見
間に異様なる音光 電車動揺 同行堀田別宅兄和楽母弥凡
て顔色なし 益々つる烈風近來なきこと まあ無事に帰っ
てきたこと幸かな

十一月十五日

昨夜来の突風 画室硝子戸破損 紅白芙蓉被害 その修ふく
弥次郎君遺骸が来るまでそのじゅん備にせはし 六時頃弥次
郎君等守られて着 天明さん久らくめに来る 高橋君も出京
けふは研究例会なれど此の事によりて諸君に手伝ってもら
ふ

十一月十六日

紅白芙蓉作画 弥次郎君遺骸があるので何かと取紛れる 高
窪氏奥村さんのことにて来る 亦雨が降ってくる どうもい
やな天候 石本、長谷川夫人等見える

十一月十八日

弥次郎君告別式 午前中降雨あれど葬らひに調和よき日和
夜小林さんがもう腸であるとの由 幸三郎兄と見舞ふ いま
のところ順調の御様子 川上五郎氏上京

十一月十九日

棕鳥図色彩に着手 紅白芙蓉土井撰美堂宛発送 松坂屋來春
一月十五日開催展観に就て作画依頼の爲め安藤、森太郎両氏
来訪あり 夜弥次郎君初七日法要

十一月廿日

連日の疲労を朝寝をしていやす 棕鳥図多少手を入れる 大
阪清水氏上京 来月一日開催 その作画に就て 青木新次郎
来訪 例の談了解に近づく 夜は葵屋主人天明さん等来る
保険の話やら雑話

十一月廿一日

棕鳥図進捗 中村豊氏啄木鳥箱書に来る 藤井賢就親父孫一
原田氏同行遂にやってくる 例の作画に就てゝある 夜別宅
兄正五郎君嫁のことにて池田氏訪問 その話に来る 調子は
宜さそう 折柄武久君来り天明さんやら弥太郎君等秘葉に就
て愚話 高橋夫妻片山帰居

十一月廿二日

棕鳥図完成 紅黄蜀葵図隈を入れる

十一月廿三日

山中展観 七絃会観る 交詢社(三時)正五郎見合 本人和楽
母幸三郎兄別宅夫妻池田組本人、父兄御茶の師等 BR 九里氏
経営にて晚餐 どうやら無事成功の様子 葵屋主人夜来る

十一月二十四日

美男かつらの写生及び不図角谷氏作画督促に來駕 田中良助
氏代理に棕鳥図画帖渡す

241 西村卓三(1908-1955)京都の日本画家。

十一月二十五日

美男かつら本紙に着手 弥次郎君退夜にて一統集まる

十一月二十六日

弥次郎君二十七日法要 雅叙園にて供養 午後平福さん訪問
佐伯氏依頼の色紙を御希ひする 千鳥の写生及議会のスケッチ研究例会参考に拝借す 葵屋主人池田氏上首尾の報をもたらず 和楽母欣びもっともなり 青柳君紅葉図横物持参する 面白く見る可きところあり

十一月廿七日

かつら図作画連続 駿馬写生制理 三越桜井氏夕刻来訪 拙作来春の方に延ばしてもらふ

十一月廿八日

かつら図作画続 三上夫人紅葉写生持参 富取、石山小山三君来訪 雑話 八王子在の車人形の話を書く

十一月廿九日

美男かつらるり鳥図巾二尺三寸立一尺六寸あらまし成る 弥小林さん見舞 青木訪問に午後出掛ける 夜幸三郎兄天明さん等にて雑話

十一月卅日

美男葛完成 角谷氏に渡す 中村鶴心堂氏来訪 過般の啄木の図遠入さんに売ったそうで(三百円幸三郎兄渡) 其れと小浜ちりめん拝受 伏原氏作画督促に来られたので紅白梅花瓶図を渡す約をする(二尺五寸巾立三尺) 院へ出品作をとりに行ってもらふ 金子角田両君に 鳥淵令嬢長岡浩氏と結婚解消問題紙上を賑はす 童貞性病に起因してゝある

十二月一日

髪が余り延びたので理髪 三越にて同展覧を見る 横山先生に偶然御目にかゝる 虎の門晩翠軒にて朝鮮紙求める 一枚六拾銭 鳥田にてさら紙等求めて忽々帰宅 研究例会なればなり 平福さんの写生を中心に写生論に入る 十時散会 その間青木母姉和解の問題にて突然来る 此度は■解決する様なり 不在中春芳堂紅梅白梅図とりに来る 朝日の古川といふ人来春展覧に就て来る

十二月二日

巻毛カナリヤを益ちゃんところへ写生に行く 午后下図 夜は明日弥次郎君埋骨なればその退夜として佐伯夫妻を始め一同にて晚餐を共にす

十二月三日

巻毛カナリヤ作画 弥次郎君埋骨の為め弥は東北寺へ出掛ける 夜は葵屋主人別宅兄幸三郎兄やらにて雑話 弥太郎君映画フィルム持参 その映写簡易 探検子供達を欣ばす

十二月四日

巻毛カナリヤ作画傍山茶花写生 太田金藤氏偶然訪問 小生偽作(春山図)持参 関尚美堂主展観画とりに来る 蜀葵胡蝶図渡す 牛田君来て夜迄雑談に高橋君も上京し共にふける 幸三郎兄横山先生訪問して帰りに立寄る 朝日の例の問題は結句行なやむらしい 田中良助氏画帖謝礼五拾円拝受す

十二月五日

角谷松島両展覧を見 交じゅん社に別宅兄を訪ね同所にて午餐 竹越さんに面会 一時池田さんへ正五郎君嫁迎ひの使意を以て行く 帰途九段河本眼科院に吉田誠二郎君²⁴²を見舞に寄ったが既に退院 高橋君片山に帰居 藍沢氏²⁴³依頼の一部持参したが大分出来はいゝ 夜は天明さんやら別宅はなれ兄等にて雑話 好況時代の話に別宅兄の談に賑ふ

十二月六日

巻毛カナリヤ作画 夜は渡欧手記改める 葵屋主人別宅はなれ両兄来り雑話

十二月七日

巻毛カナリヤ描き上げて了ふ 雨もり漸くはげし 先日の暴風雨後修理の外なし 夜天明さん雑話に来る 弥は下駄屋のお伯母さんの通夜に出掛ける

十二月八日

けふは訪問日と定めて朝から出掛ける 平福さんを始めに先般拝借の写生を返し旁々 それから小茂田君見舞 折柄研究会を催うしていられたので暫時にして帰る この分ではもういゝらしい 小山君を訪つねたが行違に拙宅来られたのだそう 次いで小林さんをおたづねする 奥村さんが見えてい

242 吉田善彦(1912-2001)吉田幸三郎の従弟。御舟に師事。1964年日本美術院同人。

243 藍沢弥八

た もうすっかりいゝ様で明日から画室へ行かれる由 愛犬が死んだことを悲しんでいられた

十二月九日

三河島の関文五郎氏訪問 葵屋主人夫妻和解成立の為めの報告にて 王子電車京成電車の便あり 市川富取君をたづね同君と中山法華経寺を訪 同寺にて足利の中門を賞し法華信者の殆んど狂人に等しき礼拜は不可思議なる感を抱かす 船橋に往年の情を懐かしみ乗合の便を以て市川駅に出て省線にて浅草橋に下車 生湯の土地の変遷今昔の感を覚へ小伝馬町村雲別院に吉田勝道氏を訪問 之れ亦兄夫婦和解に就てゝある 同所にて偶然兄に会す 銀座に出て伊東屋にて新聞挟み等求めて帰宅 正五郎君幸三郎兄論争のことより弥と口論す 不快 平福さんから佳紙数多御届を受く

十二月十日

山茶花の写生 朝子弥と銀座に出掛ける 琅玕さんが来たが女中のはからひにて面せず 橋本秀次郎氏朝鮮行のことかつ来春拙画希望の依頼を受く 玉川清二郎君全快挨拶に来る 夜は幸三郎兄別宅兄葵屋兄天明さん等雑話

十二月十一日

山茶花下図 巾一尺八寸立一尺六寸 角谷さん美男かつらの謝礼に来る 百五十円拝受 夜は渡欧記整理 おろくが御金を借りに来たそうだ(七円)

十二月十二日

山茶花本紙にかゝる 新海さんから贈られたるものにどうさを引きて用ゆ 午後琅玕洞主来る 来春一月に展観ノ由 尚一作心見る約をする 尺五絹本を望まる 三村儒平氏にカナリヤ図送る 夜は渡欧記整理 朝子急性気管支炎烈し 弥終夜看護

十二月十三日

山茶花完成 豆柿ノ写生 美の国大山氏来り小生作品記録を聞かれる 夜幸三郎兄小山兄葵屋主人雑談 小山葵屋両兄に酒を出して遂々閉口 小生ノ失策

十二月十四日

豆柿の写生 益の助君の巻毛カナリヤ写生 午後は拝借して家で写生する 田村■司が久振りに来て柱時計を呉れる 自

由ヶ丘ノ地主さんが笹本さんの地面ノこと葵屋滞納に就て来る

十二月十五日

巻毛カナリヤ、メジロ写生に益の助君の宅へ行く 田村金吾少年園の人が来た 山茶花図渡し(参拾円)拝受 研究例会益の助君夫人モデル十時散会 採点体温表を使用 案外ニ工合宜し

十二月十六日

目白に豆柿の下図着手 午後目白の写生未だ不備 益の助君のところへ出掛ける 白木屋四階より出火五六七階全焼十一名の死者を出す 夜天明葵屋主人来る 清吉君硝子工の下図を見せに持参

十二月十七日

関の展観を幸三郎兄ト観に行く 安田小林さん等やっぱりウマイナト思フ 魚がしのすしヲ食へて白木屋の焼けたのを眺めて幸三郎兄に別れ上野の巴里東京新興美展へ行く 常識線の形に支配されてゐるものはつまらなく不可解ながらその他のものに面白さを感じず 小山兄を訪ね新宿に出てたる平にて晚餐 廓内一べつ 紀の国屋にて横川氏に会し若き芸術家の肖像を求めレコードアメリカを求めて帰る 不在中青木新次郎来た由

十二月十八日

めじろ図始める 高沢初風氏²⁴⁴作画希望で来る 葵屋姉が帰るので同主人あたふたしてゐる 弥生和子別宅姉に誘はれて買物に出掛け喜んでゐる

十二月十九日

めじろ図作画 けふは正五郎君の御嫁さんの家族が来る 午餐を共に歓談(親父、兄 本人) どうも鼻加多留に冒かされ不快 夕方床に就く 天明さんが研究記録を持て来て呉れる

十二月廿日

終日臥床 越谷君午後來る 藤井賢就氏から書留が届く 何の意味かわからないなとおもふ

十二月廿一日

終日臥床 土井撰美堂より芙蓉図二対し百二十円拝受 春芳

244 高沢初風 演劇評論、美術評論家。

堂より梅花図二就て三百円拝受 けふは吉田正五郎君の結納別宅その役をつとむ 芽出度し

十二月廿二日

離床 高橋君上京 藍沢氏依頼ノけし図及秋花落葉の三図持参 弥生和子終業式 和子は学芸会の催うしがあるので和服で登校 二人とも成績等あいっらしい 夜葵屋夫妻のことにて夫妻和解 誓約兩人小生等立会のもとに為す 小林さん見える 廿五日三ノ谷行を約す 午後一時桜木町駅待合せ 高窪和吉氏来る 西島さん来たのが多用中不面会 高橋君に研究記録添さくをしてもらふ

十二月廿三日

高橋がいるので兩人で研究記録整頓二終日過ごす 大体まとめ天明さんに渡す

十二月廿四日

二条公邸出火(六時)事件 めじろ図あらまし完成 子供達と猫の題にていろはかるたを工夫 漸く七年もをしせる 白木屋再開店 同情を引いて五百人の客

十二月廿五日

めじろ図くまを入れる 三溪山行の約あり 小林さんを訪問 約束のオルベエトの拙作を奉呈 レントゲン(同氏)写真を見せてもら 氏の進歩的の行為を敬す 三溪山の数時は吾々を幽玄の境に誘びく 久しぶりの桃山探幽の襖絵の墨画 雪中飛雉 蓮華院の床 牧溪のセキレイ 国分寺の瓦硯 藤原時代の盤珪 破祝への風炉 沢庵の消息 鳳凰堂の格子 石棺の火入 卓上の花水仙小菊白椿 風流といふものは何ものも捨てない(祝べを破ったのは益田克徳 破墨北宋の味) 未決囚の感じ 居士草庵の茶 此の幽玄の空気をあっさくすると樹上の鳴鳥の声だ 春日の燈籠に油をつぐ竹の油さし 東大寺の礎石のやりかけの捨石 秋篠寺の燈籠 三溪先生の大面白蓮図と三溪先生の雅談 茶は道具にもて遊はるゝものでなし その主人の人格にて凡ては生かさるゝもの 此の言風格とけん威あり 燈火に仏像の影 炭火の光全世界は滅して此の二畳中板の一椀庵の世界 人類は此主人小林川面あがた余のみになりたかの境 誰ぞ知る ニュウグランドにて此の境を廻想せばさながら故郷を想ふに似たり 相変らず三溪先生のけんたん然れどもその健康法ありてゝある由 亦此の健康法も味覚捨てがたきよりて出発 亦味覚は頭脳の明快を恋ふ

の余りと云 三段論法なり クリスマスの夜の賑ひ十時近く帰宅 有意義な一日 不在中関尚美堂謝礼(三百円)来りしと弥生ははなれのに誘はれ帝国ホテルニ行つたそうだ

十二月廿六日

放光堂五十円残して残分支払ふ 萱間といふ電気をする人が北原大輔さんの経済ののことにて来る 中村鶴心堂小林氏への白鶴 堀越さんとかへの九里香(もくせい)箱書に来る 弥と桜庭先生へ礼に沼袋の野方一五五五の宅へ伺ふ 神楽坂田原屋にしはらくめて晚餐 銀座伊東屋にて子供達への■めすプレゼント買求める 桜庭先生への礼四十五円御渡しするのに百円をくづすことにて三越(新宿)に立寄ったり市ヶ谷で下車したため神楽坂まで歩いたこと等々に大分疲労

十二月廿七日

昨日のつかれで非常な朝寝 高橋夫妻上京 美術評論の藤森といふ人來 高橋君と雑談 夜天明さん別宅兄和楽母等見える 何にしても空々寂々たる空しい日だ

十二月廿八日

黒ちゃぼの写生 仲君、三上夫人、写生持参来る 三上夫人に馬ノ図借 夜豊田豊君²⁴⁵來 十二時近く迄話込む する歩まん歩ろう―として帰る 池田といふ人鳥の尺五の偽筆を鑑定に 亦三宅さんが名古屋の故郷へ帰るといふのでいとまごひに来る

十二月廿九日

暮のセマルの二雨降りデアル 黒矮雞の写生に益の助君のところへ出掛ける 笹本さんが例の紛失したるふくさの下図の事で来た 結句描きあらためることになる 夜はちゃぼの小下図や旅行記の整理

十二月卅日

玄矮雞下図に着手 三溪先生から電話にて長岡別邸の御招きを受く 來春一月七日午前八時五分東京発にて来れとの事 松本直蔵氏青柳五柳君上田子行君市川君それ―^{*}年暮のものをもらふ 年賀状西出氏から出来て来た 三百枚五円 夜北原さんの仏事の返しおたけさんと萱間氏同行来る おろく、かん蔵等も来た

245 豊田豊 美術評論家

十二月卅一日

終日清掃二過ごし昭和八年のじゅん備 弥大いに奮戦 以て
負債ノいゝわけ心から気の毒におもふ 美ノ批判社の人來
る、ヒスケットもらふ 出口さんから亦干物送って来る チ
ロが谷口といふ家のホロホロ鳥を迫害したので謝罪に清吉君
に行ってもらふ 大晦日もどこへも出掛けず理髪にも行かず
に過ごす気持ちは年のせいかな はた寛大な気持ちになったの
か